

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書第3冊

船岡山古墳群Ⅲ

(考察編)

2020年3月

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、船岡山古墳群発掘調査報告書Ⅲ（考察編）である。
- 2 埋蔵文化財包蔵地名は、調査開始時「船岡山古墳」であったが、調査の進展で2基の古墳を確認したため、本書では「船岡山古墳群」と呼称する。詳細は『船岡山古墳群（遺構編）』第2章第1節のとおり。
- 3 調査地、期間及び調査面積は、次のとおりである。

調査地 高松市香川町浅野・大野

調査期間 1次調査：平成20年7月22日～8月21日

2次調査：平成21年2月23日～3月6日

3次調査：平成21年8月17日～9月4日

4次調査：平成22年2月15日～3月10日

5次調査：平成22年8月17日～9月9日

6次調査：平成23年2月21日～3月4日

7次調査：平成23年8月15日～8月26日

8次調査：平成24年2月16日～3月23日

9次調査：平成24年8月20日～9月14日（11月14日補測）

調査面積 161㎡

- 4 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会と徳島文理大学文学部が締結した連携協定に基づき実施した。
- 5 現地調査は、1次調査は高松市教育委員会教育局文化財課（当時）文化財専門員小川賢・高上拓・同課嘱託職員中村茂夫が担当し、2・5～9次調査は高上、3次調査は同課文化財専門員船築紀子が、4次調査は高上・船築が担当した。徳島文理大学は1～9次の全調査を文学部文化財学科教授 大久保徹也が担当した。
- 6 整理作業は大久保・高上が担当した。
- 7 本報告書の執筆は、第1章・第2章第1・2節を高上、第2章第3～5節を大久保が行った。また、附章として（株）パリノサーベイに委託して実施した胎土分析業務の成果を掲載するとともに、分析資料の追補説明を大久保が執筆した。編集は高上が行った。
- 8 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関及び諸氏から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
宇垣匡雅 片桐孝浩 川部浩司 蔵本晋司 栗林誠治 信里芳紀 乗松真也 禰宜田佳男 林正憲
春成秀爾 藤川智之 古瀬清秀 松本和彦 向井敏伸 森下英治 山本悦世 浅野小学校 大野東小学校
香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財センター 金刀比羅宮
- 9 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第IV系にしたがった。
- 10 遺構の縮尺については図面ごとに示している。
- 11 上記で得られた全ての資料は、本書刊行後に全て高松市教育委員会で保管している。

凡 例

- 1 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 2 遺構・遺物の縮尺については図面ごとに示している。
- 3 土層及び土器観察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

本文目次

第1章 報告	1
第1節 寺田貞次収集の船岡山採集資料について	1
第2章 考察	2
第1節 船岡山山上の改変について	5
第2節 船岡山1号墳の築造と石清尾山古墳群の関係	16
第3節 船岡山1号墳埴輪の型式学的出自	23
第4節 特殊器台形埴輪の変容・解体と船岡山1号墳埴輪	31
第5節 高松平野域における船岡山1号墳の位置	41
附章 船岡山古墳群出土埴輪の胎土分析	52

挿図目次

図1 金刀比羅宮学芸参考館所蔵資料実測図	1	図19 東殿塚古墳埴輪	38
図2 トレンチ配置図(再掲)	6	図20 中山茶白山古墳埴輪	39
図3 山上の改変の痕跡(集約して再掲)	7	図21 相の谷1号墳埴輪	40
図4 出土遺物①	8	図22 鶴尾神社4号墳装飾壺	41
図5 出土遺物②	9	図23 稻荷山姫塚古墳埴輪	43
図6 土量計算根拠(西側くびれ部)	12	図24 高松茶白山古墳埴輪(1)	44
図7 土量計算根拠(東側くびれ部)	13	図25 高松茶白山古墳埴輪(2)	45
図8 船岡山の可視領域	14	図26 鶴尾系広口壺の変化	46
図9 関連諸墳の平面図	21	図27 徳楽方墳の円筒形土器と装飾壺	47
図10 船岡山1号墳埴輪の基本形態	23	図28 大型筒形装飾器台(吉備)と円筒形土器(出雲)	48
図11 特殊壺(形埴輪)と初期の朝顔形埴輪	25	図29 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	58
図12 船岡山1号墳埴輪の底部調整	26	図30 胎土中の碎屑物の粒径組成	59
図13 船岡山1号墳埴輪の刻目突帯と透し孔形態	28	図31 碎屑物・基質・孔隙の割合	60
図14 船岡山1号墳埴輪の頸部形態	29	図32 胎土薄片(1)	61
図15 船岡山1号墳埴輪の巴形透し孔と沈線文	32	図33 胎土薄片(2)	62
図16 船岡山1号墳埴輪の直線系沈線文	33	図34 胎土薄片(3)	63
図17 船岡山1号墳埴輪の複合鋸歯文様沈線文	34	図35 胎土分析対象資料	65
図18 元稻荷古墳埴輪	36		

挿表目次

表1 出土遺物一覧表	9	表4 薄片観察結果(1)	55
表2 土量計算結果一覧表	11	表5 薄片観察結果(2)	56
表3 試料一覧	54	表6 薄片観察結果(3)	57

本文中写真目次

写真1	白色マーキングの一群……………	2	写真7	集合写真……………	3
写真2	黒色太線マーキングのうち「浅野舟岡」……………	2	写真8	船岡山1号墳後円部の石積み……………	16
写真3	黒色マーキングのうち「舟岡」……………	2	写真9	船岡山1号墳くびれ部の石積み……………	16
写真4	黒色太線マーキングのうち「佛生山ノ南 舟岡頂上 古墳側」……………	2	写真10	野田院古墳全景……………	17
写真5	写真4の裏面……………	2	写真11	野田院古墳後円部の石積み……………	17
写真6	線刻と透かし孔の個体……………	2	写真12	船岡山1号墳の二重構造……………	19
			写真13	稲荷山姫塚古墳の二重構造……………	19

写真図版目次

図版 1-1	船岡山遠景（南から）	図版 4	船岡山1号墳出土埴輪集合①
— 2	船岡山山上の現況	図版 5-1	船岡山1号墳出土埴輪集合②
図版 2-1	船岡山1号墳 東側くびれ部（16トレンチ） 完掘状況（南東から）	— 2	船岡山1号墳出土埴輪①
— 2	船岡山1号墳 東側くびれ部（16トレンチ） 完掘状況（東から）	図版 6	船岡山1号墳出土埴輪②
図版 3-1	船岡山1号墳 西側くびれ部（9トレンチ） 完掘状況（南から）		
— 2	船岡山1号墳 西側くびれ部（9トレンチ） 石積み状況（南西から）		

第1章 報告

第1節 寺田貞次収集の船岡山採集資料について

第1項 資料の概要

寺田貞次は、1940年から高松商業高等専門学校（後に高松経済専門学校と改称、現在の香川大学）の教授を務めた人物で（乗松 2013）、香川県郷土研究会会長等も務めた人物である。県内の古墳の調査にも精力的に関与しており、船岡山古墳群もまた、踏査の対象となっている。この際の収集資料が金刀比羅宮学芸参考館に寄付されて現存している。松浦正一によると（松浦編 1951）、寺田が高松経済専門学校（現在の香川大学経済学部）に在任中、大正 15～昭和 20 年までの間に収集した考古学参考資料で、高松空襲の戦火を潜り抜け、焼損を免れた資料の一部を金刀比羅宮学芸参考館に寄付したものである。目録によると、「三三七 舟岡山上古墳 埴輪円筒片十一、弥生式片二十八」とあり、今回の発掘調査でも多数確認した埴輪片及び中世の土師質土器の一部であると考えられる。この埴輪片については現存しており、発掘調査の実施に先行して、平成 20 年夏に高松市教育委員会職員が資料調査を実施した。ここでは、調査成果の実測図を掲載するとともに、撮影した写真資料を紹介する。

第2項 調査の方法

高松市文化財課の文化財専門員 3 名（小川・渡邊・高上）が図化と写真撮影を行った。なお、この時点では発掘調査前であったことから、船岡山古墳群の特異な埴輪についての定見はなく、資料のうち形態のよくわかる資料や特徴的な線刻、刻印が残る資料を図化したほか、資料の総体をまとめて写真で記録することとした。撮影した写真は、室内でデジタルカメラで撮影したものである。なお調査対象資料は 27 点であり、上記の目録の数量とは合致しない。

第3項 資料のマーキング

遺物には寺田の手によると考えられる入念なマーキングが見られる。また、マーキングの道具（筆、インク）や記載内容が多様であることが特徴的である。上記の松浦の記載を参照すると、大正 15～昭和 20 年までの間で、複数回の踏査を実施したことが推測される。

まず、マーキングの色調で大きく白色の資料と黒色の資料に分けることができる。また、黒色の資料についても、面相筆を用いたような細かい描線のもの、太い線のもの 2 者に大きく分け

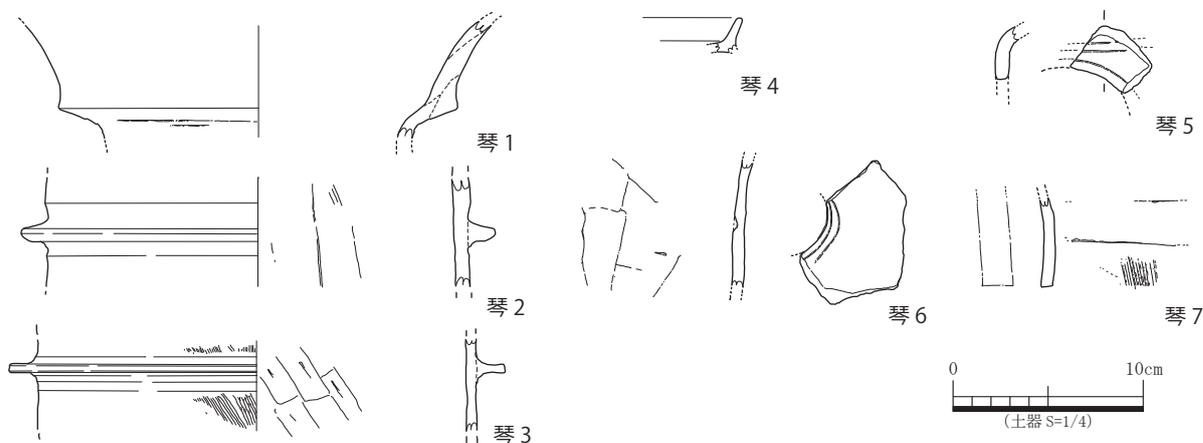


図1 金刀比羅宮学芸参考館所蔵資料実測図



写真1 白色マーキングの一群



写真2 黒色太線マーキングのうち「浅野舟岡」

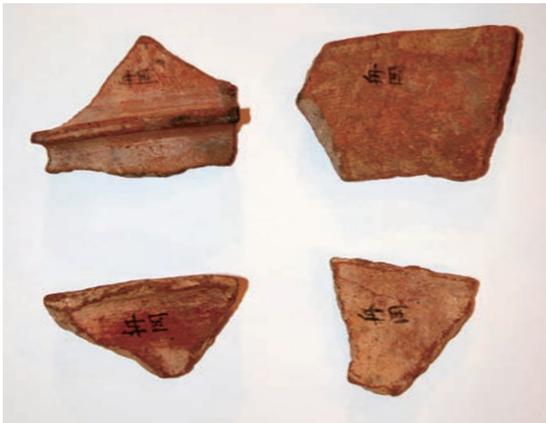


写真3 黒色マーキングのうち「舟岡」
※右上が細線、他は太線



写真4 黒色太線マーキングのうち
「佛生山ノ南 舟岡頂上古墳側」



写真5 写真4の裏面



写真6 線刻と透かし孔の個体



写真7 集合写真（上段に口縁部資料、中位以下に体部その他の資料を配置）

ることができる。数量としては黒色の太線資料が最も多く、白色線資料がそれに次ぎ、黒色の細線資料は1点のみである。また、黒色太線資料にも、「舟岡」「浅野舟岡」「佛生山ノ南 舟岡頂上古墳側」等の複数の記述が認められる。特に注目できる資料（琴1）には、黒色太線で、「佛生山ノ南 舟岡頂上古墳側 昭和六、八採集 寺田」との記載があり、昭和6（1931）年の夏に少なくとも1度は採集がなされたことが裏付けられる。

第4項 実測資料

調査資料の内、形態がよく判明する資料について実測を行った。結果的に、平成20年度以降に実施した発掘調査によって出土した資料群が充実しており、埴輪の形状復元や技法、形態上の特徴は出土資料を基に整理しており、本資料でその内容を改めるものではない（徳島文理大学文学部ほか2019）。ここでは、図化資料の報告を行う。

琴1は口縁部。接合痕が明瞭にみられ、擬口縁の形成後に口縁部が貼り足された状況が観察できる。黒色太線で「佛生山ノ南 舟岡頂上古墳側 昭和六、八採集 寺田」とあり、採集年の判明する資料。内面には赤色顔料の塗布。琴2は突帯を有する体部。やや太く断面台形の突帯を有す。内面にケズリは見られず、ハケのちナデで仕上げたように見える。「佛生山ノ南 舟岡頂上古墳側」の注記。琴3も突帯を有す体部。細く断面長方形の突帯。内面にはケズリが明瞭。外面には細かいハケが見られ、突帯貼り付け時に横ナデで消されている。「舟岡」の注記。琴4は口縁部。全体に摩耗が著しい。擬口縁が剥離した資料の可能性がある。「浅野舟岡」の注記。琴5は透かし孔と線刻を有す資料。円形基調の透かし孔と、それに並行する1条の線刻、直線で並行する2本の線刻。透かし孔より上方（図中）で強く外反するため、頸部の可能性。「浅野舟岡」の注記。

琴6も円形基調の透かし孔とそれに並行する弧状の線刻2条。「浅野舟岡」の注記。内面はケズリ。外面調整は不明だが赤色顔料の塗布。琴7は方形基調の透かし孔と、上部に突帯の剥離。内面ケズリで外面は縦ハケ。「浅野舟岡」の注記。

第5項 小結

形態・調整等の点を発掘調査出土資料と対比しても、寺田資料が船岡山古墳群出土資料であることはほぼ確定できる。いずれも細片化しており、接合関係も確認できない点は、船岡山山上で主に中世に行われた改変の影響を受けてた可能性も考えられる。マーキング資料からも追認された寺田による複数回の踏査は、船岡山古墳群が当時から古墳として認知され、踏査による実態解明が企図されていたことを反映している。我々の実施した発掘調査出土資料と一体的な価値を有する資料と評価できるとともに、戦前の古墳踏査において、細片まで含めた表採資料の1点ずつに価値を見出し、歴史資料として保管し評価を試みたであろう寺田の調査実態を示す資料としての価値付けも可能な資料群である。

参考文献

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会 2019『船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）』

乗松真也 2013「寺田貞次による小豆島の考古資料調査—小豆島で保管されてきた調査記録と未公表原稿—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』IX

松浦正一編 1951『香川県古墳調査便覧』

第2章 考察

第1節 船岡山山上の改変について

はじめに

船岡山古墳で発掘調査を行っていた際、山上の各所で中世に位置づけられる遺物の出土を確認するとともに、墳丘が削平された痕跡などの後世の改変を確認した。これらの改変について、既刊報告書で一度整理を行った（高松市教委ほか2017）。調査の主目的は古墳の範囲確認であり、中世の改変については断片的な情報しか得られていなかったこともあって、前稿では遺構の整理に留まり、出土遺物を踏まえた年代観等の検討が及ばなかった。本稿ではこの点を補うとともに、古墳の改変の内容をより具体的に検討し、船岡山古墳群が辿った履歴を可能な限り明らかにしたい。

まず、既報告で整理した改変の概要は、規模の大きな順に以下のとおり整理できる（図3）。

- ①後円部の削平と発生土を用いた窪地の埋戻しによる山上の平坦化
- ②後円部北東側・くびれ部で確認した、墳丘の削平による小平坦面の形成
- ③前方部前端隅の削平
- ④1号墳～2号墳間で確認した、列石

これらのうち、①については、②で形成された平坦面の埋め戻し行為と、くびれ部の埋め戻しの両者が確認できる。②については、削平により形成された平坦面が水平を指向することから、意図的な整地を想定した。前後関係としては、②が先行し、小規模な平坦地の形成がなされたのちに、それらを全て埋め戻して①山上の平坦化が図られたことが明らかである。

本稿では、ある程度遺物が伴い、時期の推定が可能な①と②に特に焦点を当て、それぞれの時期や規模、背景にある意図について検討を行う。

第1項 古代以降の遺物の出土状況

出土地点の傾向

古代以降に属する遺物は、山上の広範囲で少量ずつ確認できる。ほとんどすべてが細片化しており、山上での複数回の削平や造成などの行為を想定する発掘調査成果と整合的である。一方、後円部東側～東側くびれ部（16・17トレンチ）で比較的まとまった出土がある。遺構が明確でないこともあり調査段階では基本的に流土中に包含された遺物として取り上げを行った。

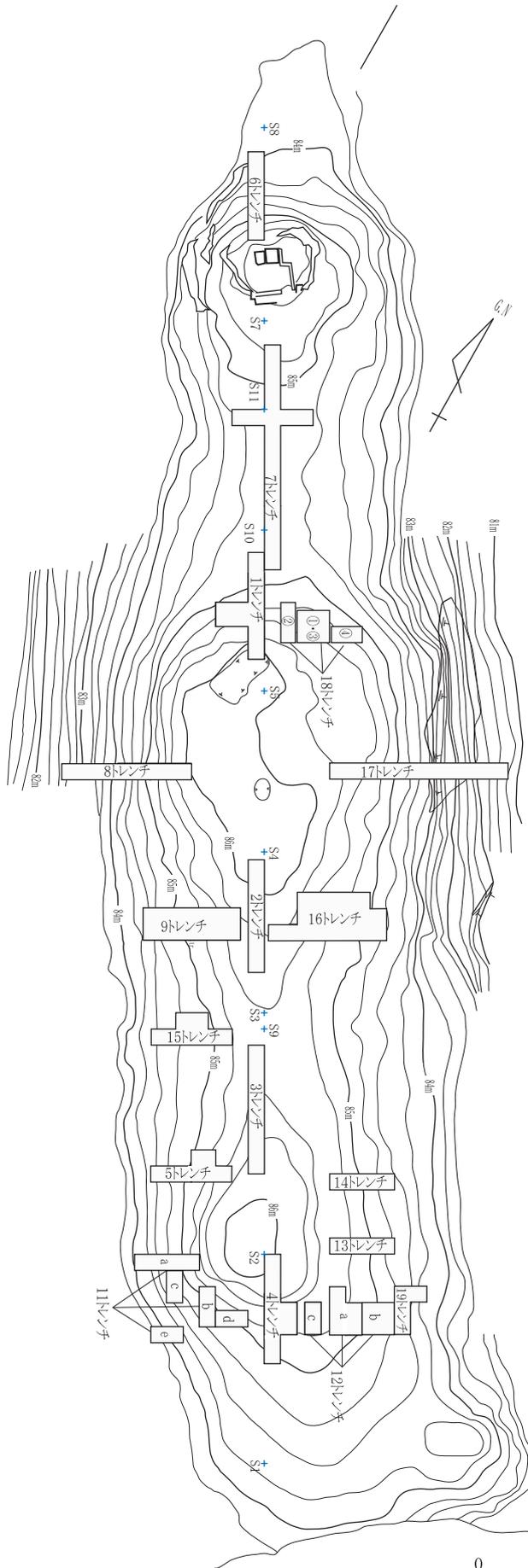
①後円部の削平と発生土による山上の平坦化に伴う遺物（図4）

これに関係する遺物が、1～14、M1～3である。1～7は17トレンチ出土。8～14、M1～3は16トレンチ出土。まずは遺物の特徴を報告する。出土遺物の分類・編年については、（片桐1992、佐藤1993・1995・2000・2003、山本1995）に依拠した。

1は土師質土器皿。口径復元で9.0cm。底部調整不明瞭だが糸切り後に丁寧にナデた可能性高い。佐藤分類皿C-I形式か。13世紀第1四半期。短い口縁部が直線的に延びる。2は皿・杯・碗の底部。底面は回転糸切。3は土師質土器碗・杯口縁部。非常に薄手で硬質に焼き上げる。4は土師質土器碗底部。器壁が厚く、丸みを持ち体部に続く。底部ヘラ切り。5は土師質土器杯。底部調整は不明で、薄く最終のナデが見える。内面に煤焦げが付着しており、灯明皿の可能性もある。口径は不明だが、底部～体部の屈曲が明瞭であり、段を有す。こうした特徴から、片桐分

Y=14000.0

Y=14000.0



X=141010.0

X=140970.0

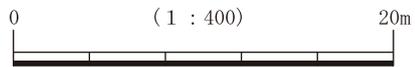
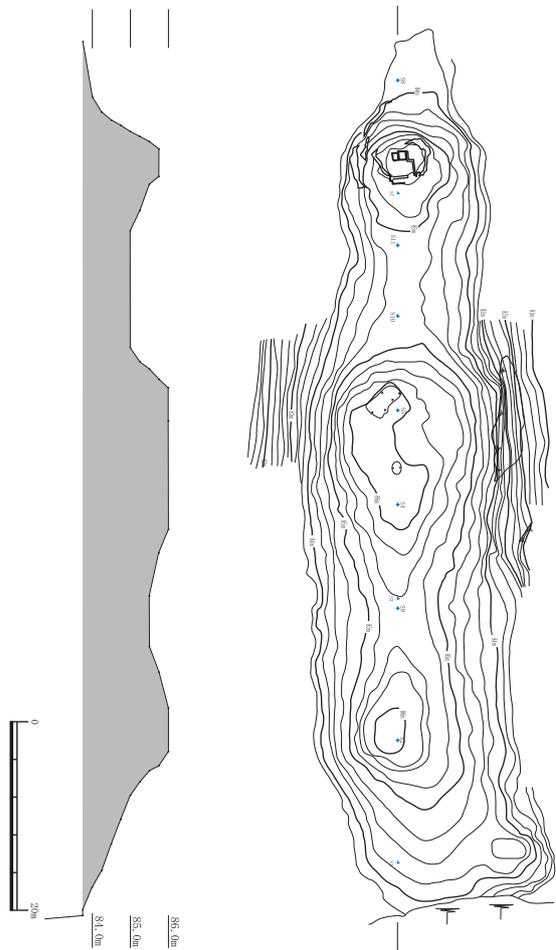
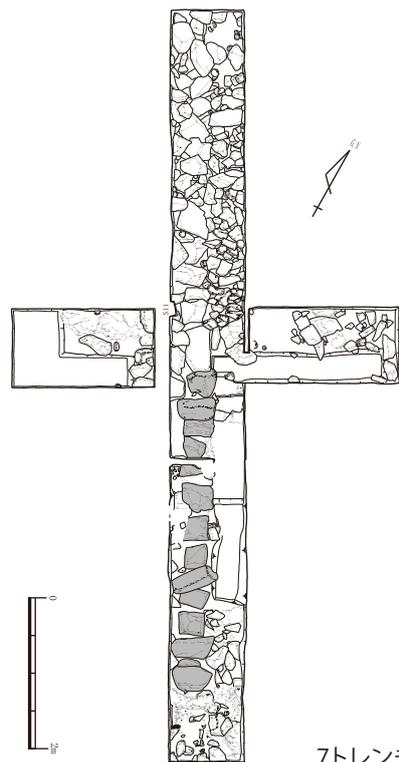


図2 トレンチ配置図 (再掲)

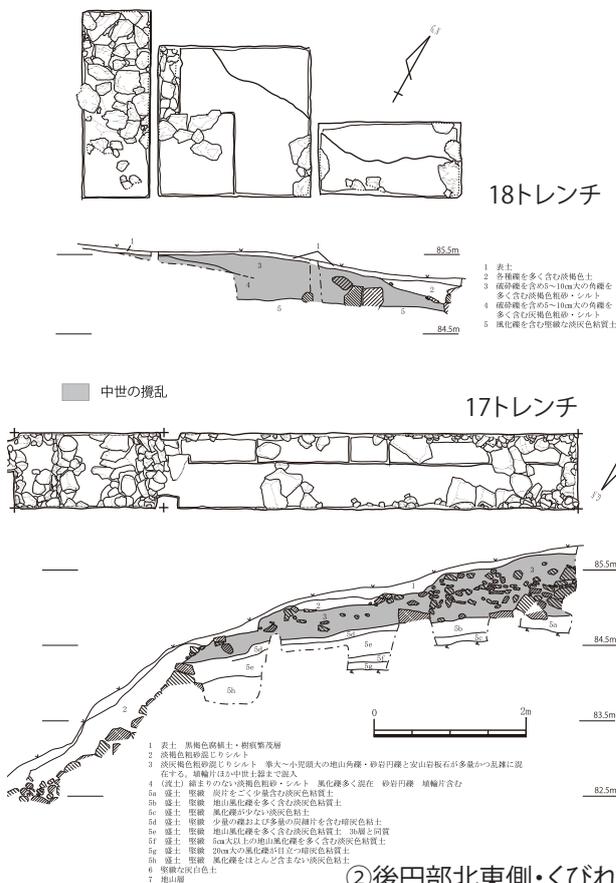


① 後円部の削平と発生土による山上の平坦化



7トレンチ

④ 1号墳～2号墳間で確認した列石



18トレンチ

- 1 表土
- 2 各種礫を多く含む淡褐色土
- 3 礫砂礫を含め5～10cm大の角礫を多く含む淡褐色粗砂・シルト
- 4 礫砂礫を含め5～10cm大の角礫を多く含む淡褐色粗砂・シルト
- 5 礫化礫を含む暗褐色淡灰色粘質土（硬土）

17トレンチ

- 1 表土 黒褐色粘質土・粘質紫灰層
- 2 淡褐色粗砂質シルト
- 3 淡褐色粗砂質シルト 準大～小児頭大の地山角礫・砂岩片礫と安山岩片が多数かつ乱雑に混在する。礫層は中世土層まで遡入
- 4 (硬土) 縦まりのない淡褐色粗砂・シルト 礫化礫多く混在 砂岩片礫 礫層片を含む
- 5a 硬土 礫層 角片をごく少量含む淡灰色粘質土
- 5b 硬土 礫層 地山礫化礫を多く含む淡灰色粘質土
- 5c 硬土 礫層 礫化礫が少ない淡灰色粘土
- 5d 硬土 礫層 少量の礫および多数の角礫片を含む暗灰色粘土
- 5e 硬土 礫層 地山礫化礫を多く含む淡灰色粘質土 30層と同質
- 5f 硬土 礫層 5cm以上の地山礫化礫を多く含む淡灰色粘質土
- 5g 硬土 礫層 20cm大の礫化礫がほとんど暗灰色粘質土
- 5h 硬土 礫層 礫化礫をほとんど含まない淡灰色粘土
- 6 等級灰白色土
- 7 地山礫



16トレンチ

- 1 10YR4/4 褐色 礫砂礫～粗砂 φ1cm以下の地山礫粒を多数に含む
- 2 10YR5/4 に近い黄褐色 礫砂礫～粗砂 φ1cm以下の地山礫粒を多数に含む 1とほぼ同じ色調で分層した5cm以下の層
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色 礫砂礫～粗砂 地山礫 粒少ない(25%程度)
- 4 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト～粗砂 φ1cm以下の地山礫粒を多く含む
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色 礫砂礫～粗砂 φ1cm以下の地山礫粒を少量含む 中世の攪乱直後の堆積層か
- 6 10YR6/6 褐色シルト～粗砂 φ1～3cm大の地山礫を多く含む 円礫・板石・角礫など墳丘構築材を多く含む 礫層片多く含む 封等出土
- 7 7.5YR6/3 に近い褐色シルト～細砂 地山礫(φ5cm大)多く含む 礫層片含む 窓窓の底面か
- 8 7.5YR7/2 明褐色シルト φ1～5大の地山ブロックを含む 板石の基礎の層土
- 9 φ5～20cm大の地山礫の堆積 空隙は地山礫の風化土がしまりなく堆積する 礫の隙間から中世土層等出土(2枚・鎌倉時代)
- 10 7.5YR7/4 に近い褐色シルト～細砂 地山礫少量を含む
- 11 7.5YR6/2 灰白シルト～細砂にφ5～20cm大の地山礫を50%以上含む
- 12 7.5YR6/3 に近い褐色シルトにφ1cm以下の地山ブロック10%を含む 礫小片を含む
- 13 7.5YR7/3 に近い褐色シルト φ1～5cm大の地山ブロック 礫を含む 礫小片を含む 小片礫を含む
- 14 7.5YR5/2 黄褐色シルト φ1cm以下の地山礫粒を20%含む 礫小片を含む
- 15 7.5YR7/2 明褐色シルト 地山ブロックφ5～10cm大を50%含む
- 16 10YR7/3 に近い黄褐色シルト φ20cm大の地山ブロックを含む
- 17 10YR6/3 に近い黄褐色シルト φ1～5cm大の地山ブロックを含む 灰を含むか? やや色調異なる

② 後円部北東側・くびれ部で確認した、墳丘の大規模削平による平坦面の形成
図3 山上の改変の痕跡(集約して再掲)

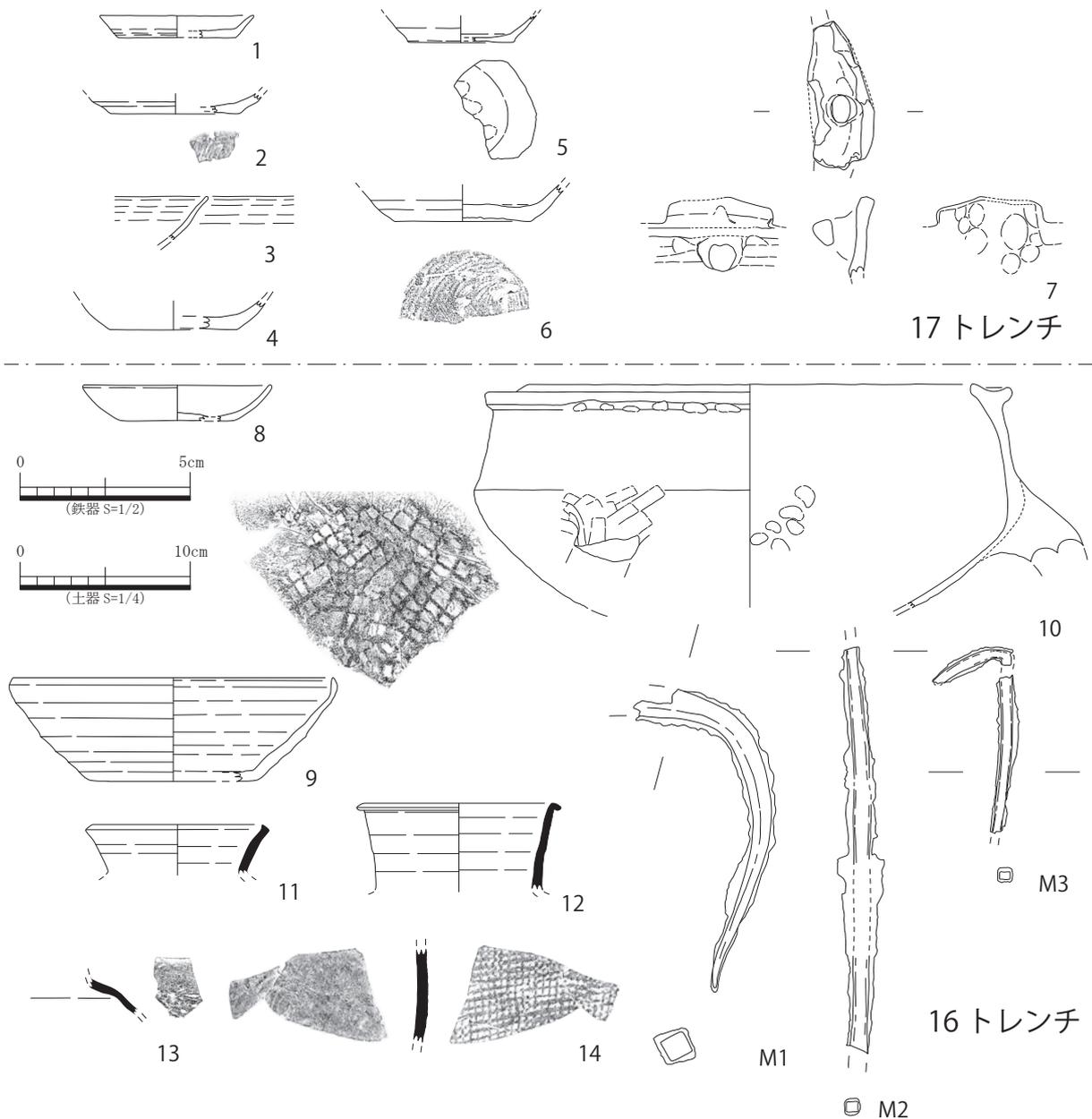


図4 出土遺物①

類の杯Bに相当すると考えられ、9世紀後半～10世紀前半の時期が推定できる。6は土師質土器碗・杯底部。底面は回転糸切。7は土師質土器鍋。内耳を有す。頂部のやや突出した弱いホームベース型の突起部。1孔を確認できる。片桐分類のD類。Ⅲ - ⑥～⑦期。15世紀後半～16世紀前半。8は土師質土器杯。底部ヘラ切り。復元口径11.0 cm。佐藤分類杯DⅡ - 6形式。体部がやや丸みを持ちつつ内湾する。13世紀第2四半期～第4四半期。9は土師質土器碗。口径は復元で19.0 cm。底部調整は不明。口縁部が短く直立しやや内湾する。こうした器形は讃岐地域において一般的なものではなく、外来系の土器の可能性もある。10は土師質土器足釜。良好な遺存状態で体部は全体の1/2、脚部は2本が遺存する。胴部に明確な屈曲があり、稜線下には格子状のタタキが明瞭。また、外面には煤が多量に付着しており、煮炊きの使用痕跡と考えられる。佐藤分類BⅣ類。15世紀前半。11は須恵器甕口縁部。12は須恵器甕口縁部。直伸する口縁部で、

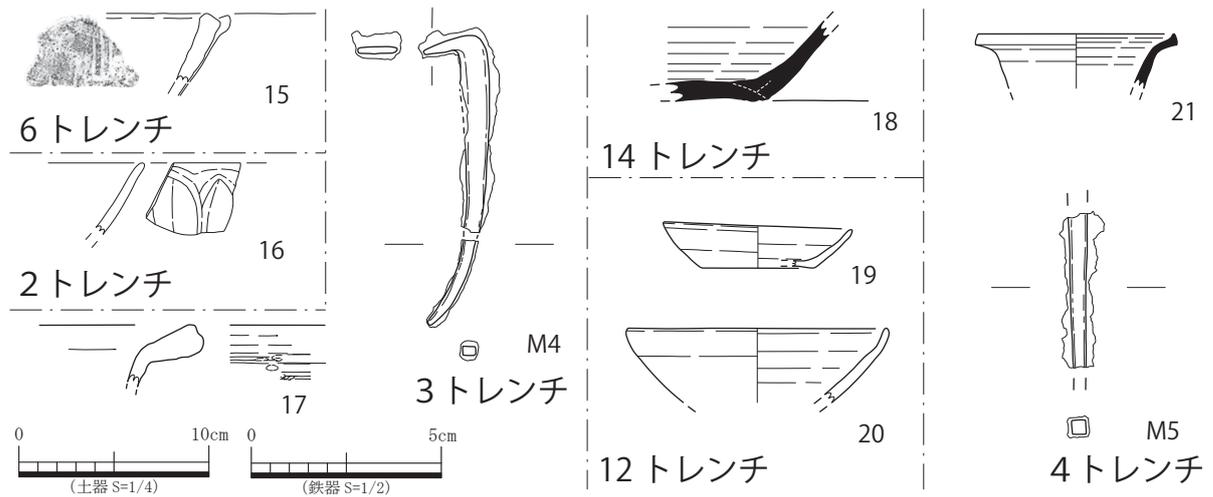


図5 出土遺物②

表1 出土遺物一覧表

報告書 番号	出土ト レンチ	層位	注記	種類	器種	報告書 番号	出土ト レンチ	層位	注記	種類	器種
1	17tr	3	南壁②	土師器	皿	14	16tr			須恵器	甕
2	17tr	3	上部礫面下	土師器	皿・杯・椀	15	6tr			土師器	播鉢
3	17tr			土師器	椀・杯	16	2-1tr		白色土中地表下25cm	青磁	碗
4	17tr			土師器	椀	17	3tr	5	東部円礫混土	土師器	鍋
5	17tr			土師器	坏	18	14tr			須恵器	甕
6	17tr	3	上部礫面下	土師器	椀・杯	19	12atr	4	南端落ち込み	土師器	坏
7	17tr			土師器	鍋	20	12ctr	2~4	石組南側	土師器	坏
8	16tr	1~4	表土下白色層	土師器	坏	21	4tr	2~3	石組外流土	須恵器	壺
9	16tr			土師器	椀	M1	16tr	6	礫群混流土層	鉄製品	釘
10	16tr	4	東拡張区表土下白色層最下部	土師器	足釜	M2	16tr	6	地山礫混褐色層	鉄製品	釘
11	16tr			須恵器	甕	M3	16tr	6	しまり強い地山ブロック多く混土層	鉄製品	釘
12	16tr			須恵器	甕	M4	3tr	5	東部円礫混土	鉄製品	釘
13	16tr			須恵器	甕	M5	4tr	2	灰褐色極粗砂tr中央列石よりガケ側	鉄製品	釘

端部は強く外方に折り曲げ。佐藤分類甕B II類。9世紀末～10世紀初頭か。13は須恵器甕の頸部直下から体部上半。外面の下部には薄く格子状タタキの痕跡。器壁が薄く、比較的小型品か。14は須恵器甕体部。外面は格子状タタキ。内面は当て具の青海波文を入念なナデで消す。M1は鉄釘下半。比較的厚手で、L字に湾曲する。使用の痕跡であろうか。M2は鉄釘か。直線的な棒状。M3は鉄釘か。折損部の接合を推測して配置したが、想定が正しければL字形に屈曲する。

出土層位と年代の共に判明する資料は少ないが、限られた手がかりから中世の改変の年代を絞り込んでみよう。まず、17トレンチにおいては、平坦面の埋め立て（3層）に伴う土器として、1が確認される。底部調整が不明瞭で分類に躊躇を覚えるが、13世紀第1四半期の年代を一応想定しておく。一方、16トレンチでは、同じく埋め戻し層の最下部より、10が確認される。遺存状況の良好な資料で、外面に煤の付着を見るなど、山上での使用が推測できる資料である。こ

のため、16 トレンチにおける埋め戻しは、15 世紀前半以降と考えられる。

後円部上及びくびれ部を埋め戻す行為①が、広く一連の作業として行われたと仮定すると、確実な資料からは 15 世紀前半以降の年代が想定できる。

それ以外の遺物（図 5）

15 は船岡山 2 号墳出土（6 トレンチ）、16 は 1 号墳の墳丘上くびれ部付近（2 トレンチ）。以下は 1 号墳前方部出土。17 と M 4 は 3 トレンチ、18 は 14 トレンチ、19・20 は 12 トレンチ、21 と M 5 は 4 トレンチ出土。

15 は土師質土器播鉢。軟質な胎土で 5 条一束の摺目が 1 単位見える。口縁部が緩やかに湾曲しており、片口の可能性。佐藤分類播鉢 A 類。14 世紀前半～15 世紀前半。16 は青磁椀。鎬連弁の花弁が幅広の削り出しで形成される。龍第 2 校泉窯系青磁碗。13 世紀初頭～中頃。17 は土師質土器鍋の口縁部。佐藤分類鍋 A II 形式。13 世紀末～14 世紀前葉。M 4 は鉄釘。ほぼ完存。扁平な頭部を折り曲げと鍛打で成形する。先端はやや湾曲する。18 は須恵器甕底部。厚手で、大型の甕か。平底であり、佐藤分類の甕 C（十瓶山式甕）。19 は土師質土器杯。底面から鋭く屈曲し、直線的に口縁部に続く。底部はへら切りか。口径復元で 10.0 cm。佐藤分類杯 D II - 8 か 9 形式。13 世紀末～14 世紀前葉。20 は土師質土器杯。復元口径 13.5 cm。口縁端部が緩やかに内傾する。21 は須恵器壺口縁部。佐藤分類壺 C-1 形式。M 5 は鉄釘か。直線的な棒状。

以上の資料から、山上の広い範囲で 13 世紀～15 世紀の遺物が散在することがわかる。遺構との関連は不明であるが、山上の利用がこの時期に小規模ながら行われていたことが推測できる。

出土遺物の傾向

ここでは、出土遺物の特徴と傾向を大枠で整理する。本来であれば、遺構ごと、時期ごとに分けて分析する必要があるが、遺物量及び遺構との相伴関係が薄弱であるため、論拠の弱い部分もあるものの、可能な限り分析を行いたい。

まず、出土遺物の時期幅からみた山上の利用状況の推定である。5、12 など、9 世紀後半から 10 世紀前半にかけての出土遺物が認められる。その後、13～15 世紀にかけての遺物が断片的に確認される。山上では確実に近世まで降る遺物は採集していない。こうした出土遺物の状況からは、古墳築造後、間をあけて 9 世紀後半～10 世紀前半に山上の利用があり、その後再度の空白期間を経て 13～15 世にもう一度山上の利用がなされていることが推測できる。

続いて、出土土器の特徴としては、土師質土器の調理具と供膳具が主体を占め、それぞれに煤の付着といった使用の痕跡が認められる。土師皿には灯明皿として利用されたものも認められる点は注目できる。須恵器は甕が集中的に認められ、法量も大型のものから小型のものまで多様である。貯蔵具としての機能を担ったものと考えられる。特異な遺物としては、青磁碗が注目できる。破片が 1 点出土したのみで、過大評価はできないが、希少な貿易陶磁が山上に意図的に持ち込まれた可能性は指摘しておきたい。

鉄製品は、釘が複数認められる。いずれも和釘であるが、折れ曲がりなど使用の痕跡の可能性が高い。M 1 は断面形が太く、他は細いといった法量の差異がうかがえる。木質の付着は確認できないが、釘を用いた木製品の固定が比較的多くなされたことがうかがえる。用途は不明とせざるを得ないが、建築をはじめとした行為を推定することもできようか。一方で、瓦類が全く確認されておらず、瓦葺の建物の存在は想定し難い。また、建物遺構が確認されていないことから、

山上に建物が広く展開した可能性は考えにくい。

このように、断続的に山上の利用があったことが指摘できる。また、遺物の性格及び検出遺構からは、例えば大規模な寺社や城館といった遺構の存在を読み解くことは困難であること、日常使用される各種土器が持ち込まれ、実際に使用の痕跡が認められることから、小規模ながらある程度山上に人が滞在するような利用であったことが推測される。

第2項 くびれ部の埋め戻しに係る土量

ここでは、船岡山1号墳の改変に伴う行為のうち、最も投下労力の大きいと考えられる、後円部墳丘の削平とくびれ部の埋戻し行為に要した労力を、移動土量の観点から検討する。

作業の前提は以下のとおりである。①くびれ部を埋めた土量は全て後円部の削平により供給されたものと仮定する。後円部の削平以外の、自然な墳丘盛土、積石の流出等による埋没はとりあえず考慮しない。②表土部分は除外せず算定する。③トレンチ外については、地山面を水平と仮定し、表土の傾斜の延長線との交点を求めて計算する。

算出の方法は、東西のくびれ部における発掘調査成果のうち、断面図を元に流土部分を模式的に表し計算する。具体的には、東くびれ部においては、16トレンチ南壁断面と14トレンチ南壁断面を計算根拠とし、各断面の流土面積の平均に断面間の水平距離を乗じて土量を計算する。同様に、西側くびれ部では9トレンチ南壁断面と5トレンチ南壁で算出する。

計算結果は表2に提示する。結果を抽出すると、東側においては21.828 m³、西側においては38.053 m³の流土が存在し、合計で59.88 m³の土量が東西くびれ部を埋め戻し、地形の平坦化をもたらしたことを算出した。

ここで算出した土量がすべて大きく削平され高さを減じたと想定している後円部から供給されたとする仮定に基づき、後円部の本来の形状を推測する。後円部は複数の積石段で階段状に整形されていたことが明らかになっている。現在検出している後円部積石段は、基底段より上に3段目までであり、それより上部は欠損している。3段目の直径は算定根拠に乏しいが、基底段の直径が22.5 mで、基底段と2段目の水平距離が約1 mであることから、2段目の直径が20.5 mと推測される。さらに上段の3段目は、同じく2 mを減じて18.5 mとしておく。ここから、3段目の平面積を268.67 m²とし⁽¹⁾、発生土量を除すると、0.22mとなる。すなわち、後円部3段目を全体に20 cm削平することで地形の平坦化が図られたと推測される。なお、後円部の全体からではなく、南半から供給されたと考えると高さはこの倍の44 cmとなる。この場合、北半の墳丘は1号墳くびれ部の埋め戻し以外の造成に用いられたと想定することになる。

仮定に仮定を重ねた推論であるが、中世における後円部の削平が、少なくとも後円部全体を

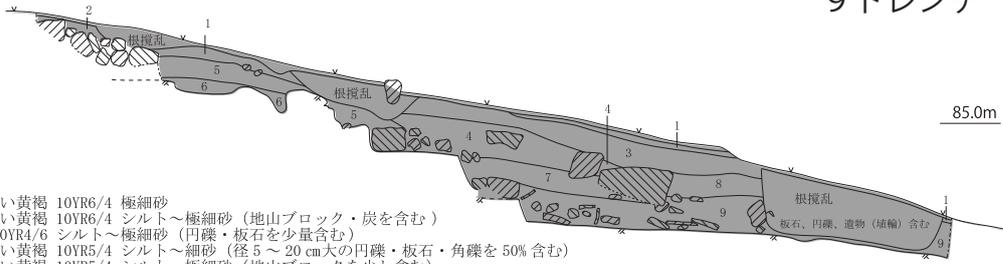
表2 土量計算結果一覧表

西側くびれ部		東側くびれ部	
9トレンチ断面積	2.263 m ²	16トレンチ断面積	3.858 m ²
5トレンチ断面積	0.647 m ²	14トレンチ断面積	1.052 m ²
小計	2.910 m ²	小計	4.910 m ²
平均	1.455 m ²	平均	2.455 m ²
断面間距離	15 m	断面間距離	15.5 m
土量	21.825 m ³	土量	38.053 m ³
合計	59.88		m ³

後円部3段目直径	18.5m (仮)	面積	268.67
----------	-----------	----	--------

土量	÷	面積 =	高さ (m)	備考
59.88	÷	134.3331	0.446	後円部南半起源と仮定
59.88	÷	268.6663	0.223	後円部全体起源と仮定

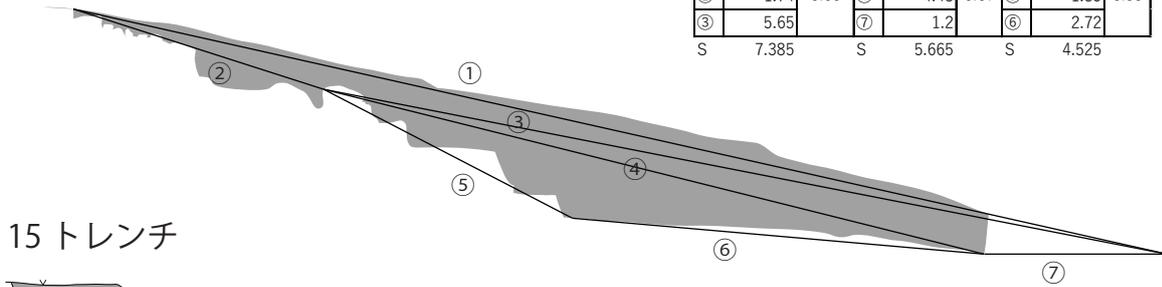
9トレンチ



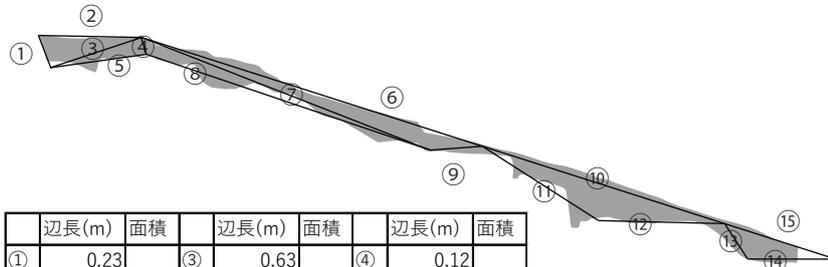
- 1. にぶい黄褐 10YR6/4 極細砂
- 2. にぶい黄褐 10YR6/4 シルト～極細砂 (地山ブロック・炭を含む)
- 3. 褐 10YR4/6 シルト～極細砂 (円礫・板石を少量含む)
- 4. にぶい黄褐 10YR5/4 シルト～細砂 (径5～20cm大の円礫・板石・角礫を50%含む)
- 5. にぶい黄褐 10YR5/4 シルト～極細砂 (地山ブロックを少し含む)
- 6. 褐 10YR4/4 シルト (地山ブロックを含む)
- 7. にぶい黄橙 10YR6/4 シルト～極細砂 (地山ブロック・板石・円礫・角礫を50%含む)
- 8. にぶい黄橙 10YR7/4 シルト～粗砂 (円礫・板石を10%含む)
- 9. にぶい黄褐 10YR5/4 シルト～極細砂 (円礫・板石を50%以上含む)

	辺長(m)	面積		辺長(m)	面積		辺長(m)	面積
①	7.38		③	5.65		④	4.48	
②	1.74	0.60	④	4.48	0.67	⑤	1.85	0.99
③	5.65		⑦	1.2		⑥	2.72	
S	7.385		S	5.665		S	4.525	

15トレンチ



- 1 表土
- 2 風化礫碎片を多く含む灰白色砂
- 3 風化礫碎片を含むしりのない灰白色～黄白色シルト
- 4 灰白色～黄白色風化礫碎片層 礫間を充当
- 5 風化礫を含む堅緻な灰白色シルト 炭片少量を含む 配石下部に連続する
- 6 表土
- 7 風化礫碎片を含む浅黄色シルト・粗砂
- 8 風化礫碎片を多く含む褐色シルト・粗砂
- 9 地山岩盤 灰白色



	辺長(m)	面積		辺長(m)	面積		辺長(m)	面積
①	0.23		③	0.63		④	0.12	
②	0.68	0.07	④	0.12	0.04	⑦	2.04	0.10
③	0.63		⑤	0.64		⑧	1.97	
S	0.77		S	0.695		S	2.065	

	辺長(m)	面積		辺長(m)	面積		辺長(m)	面積
⑥	2.35		⑩	1.68		⑬	0.28	
⑦	2.04	0.18	⑪	0.91	0.19	⑭	0.59	0.07
⑨	0.35		⑫	0.83		⑮	0.77	
S	2.37		S	1.71		S	0.82	

■ : 土量算出範囲

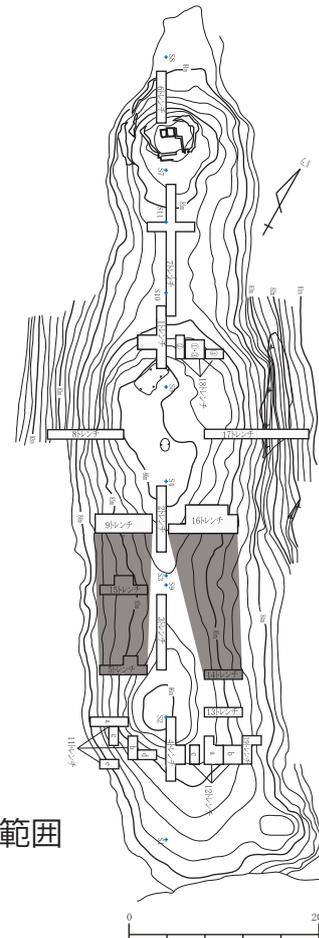


図6 土量計算根拠 (西側くびれ部)

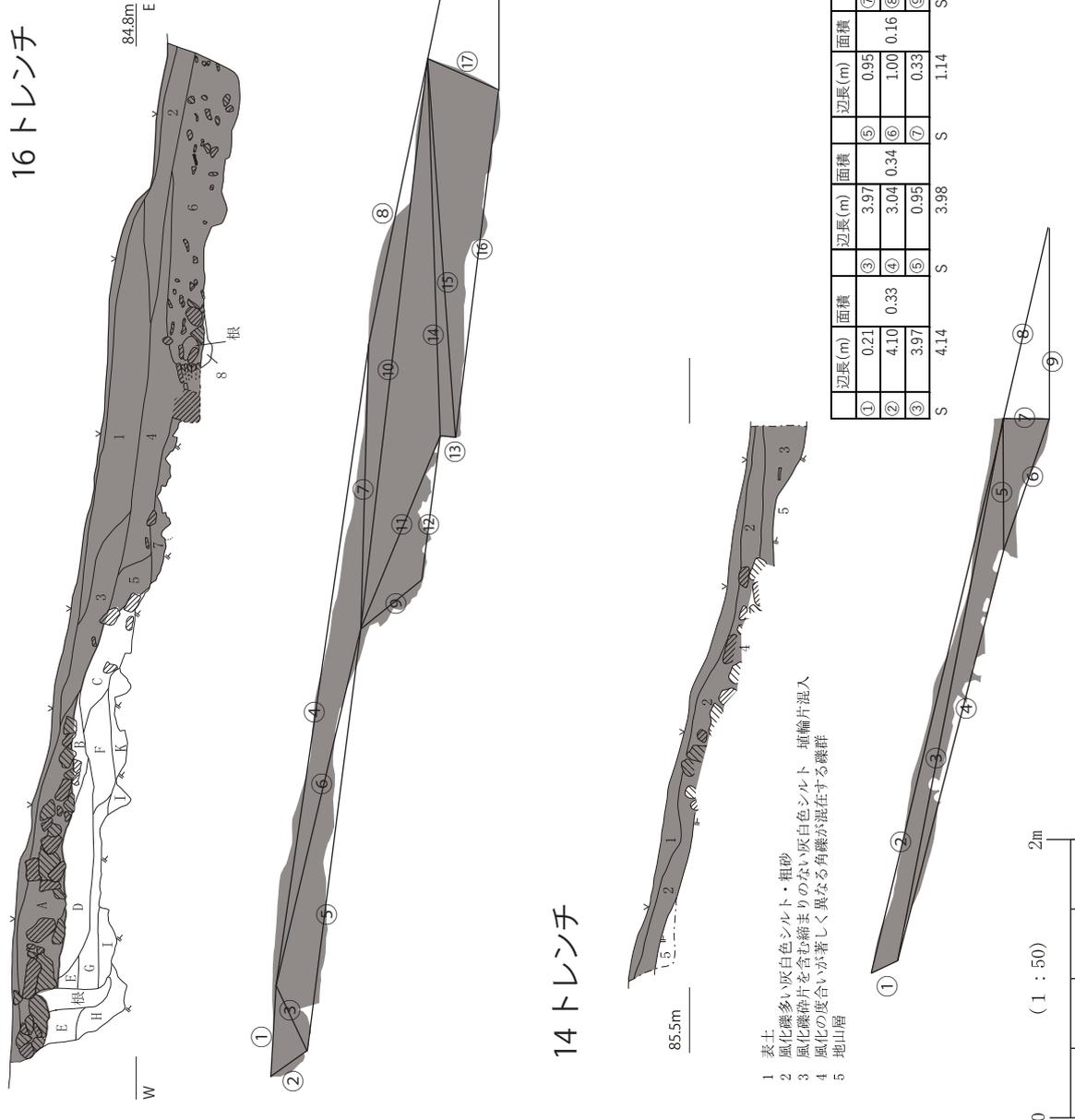


図7 土量計算根拠（東側くびれ部）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
0.65	0.32	0.08	3.05	0.45	2.64	2.05
S						
0.745 S 3.105 S 4.68						

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
2.05	2.08	0.30	1.49	0.21	1.49	0.80	4.12	1.56	2.72	0.56	4.12
S											
4.125 S 1.545 S 4.16											

⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
0.11	2.71	0.15	2.52	0.68
S				
2.77 S 2.9 S 2.905				

- 1 10YR4/4 褐色 極細砂～粗砂 φ1cm以下の地山細粒を多量に含む
- 2 10YR5/4 に近い黄褐色 極細砂～粗砂 φ1cm以下の地山細粒を多量に含む 1と2はしまりと色調で分層したがほぼ同質の層
- 3 10YR5/4 に近い黄褐色 極細砂～粗砂 地山細粒少ない(2%程度)
- 4 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト～粗砂 φ1cm以下の地山細粒を多く含む
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色 細砂～粗砂 φ1cm以下の地山細粒を少量含む 6の糜乱直後の堆積層か
- 6 10YR4/6 褐色シルト～粗砂 φ1～3cm大の地山礫多く含む 円礫、板石、角礫など珧片構架材を多く含む 珧輪片多く含む 珧等出土
- 7 7.5YR6/3 に近い褐色シルト～細砂 地山礫(φ5cm大)多く含む 珧輪片含む 改築の底面か
- 8 7.5YR7/2 明褐色シルト φ1～5大の地山ブロック含む 板石の基礎の盛土
- A φ5～20cm大の地山礫の堆積 空隙は地山礫の風化土があまりなく堆積する 礫の隙間から中世土器等出土(2T:調査時)
- B 7.5YR7/4 に近い褐色シルト～細砂 地山礫を50%以上含む
- C 7.5YR8/2 灰白シルト～極細砂にφ5～20cm大の地山礫を50%以上含む
- D 7.5YR6/3 に近い褐色シルトにφ1cm以下の地山ブロック10%含む 珧小片含む
- E 7.5YR7/3 に近い褐色シルト φ1～5cm大の地山ブロック5%含む 珧小片含む 小中礫含む
- F 10YR5/2 黄褐色シルト φ1cm以下の地山細粒を20%含む 珧小片含む
- G 7.5YR7/2 明褐色シルト 地山ブロックφ5～10cm大を50%含む
- H 10YR7/3 に近い黄褐色シルト φ20cm大の地山ブロックを含む
- I 10YR6/3 に近い黄褐色シルト φ1～5cm大の地山ブロックを含む 珧を含むか? やや色調異なる

20 cm以上削平する規模であったことが想定できた。実際には、1号墳くびれ部以外にも土砂は流出したであろうし⁽²⁾、本来の後円部高さは今回想定した数値よりも高くなるはずである。

以上の推定から、山上の平坦地整備に投下された労力は、少なくとも約60 m³の墳丘の削平と土砂の運搬を伴う行為であったことが確認できる。仮に1 m³の掘削に1人・日の労力が必要であったとすると、掘削だけでも延べ60人・日の労働が必要になる。運搬も人力でかなりの労力を必要としたことだろう。山上の整備にはそれなりに集約した労力の投下がなされたであろうことを確認しておきたい。

第3項 船岡山の立地と地理的特性

地理的特性の概要は、(高松市教委ほか2017)に整理した。ここでは、独立丘陵としての船岡山の地理的特性を、可視領域の観点から指摘しておきたい。船岡山は、中位段丘の先端に位置する独立丘陵で、標高は約86 mを測り、周囲への、そして同様に周囲からの眺望に優れている。この点は、前期古墳の築造にあたっての選地条件でもあったと考えられるが、可視領域を確認するところから地理的特性が如実に表れている(図8)。丘陵周辺のみならず、北方に広がる高松平野のかなりの範囲までが可視領域に収まってくる。こうした地理的特性は、中世における山上の利用においても考慮された可能性が高い。すなわち、高地の利用を目的とした選地であった可能性である。

まとめ

船岡山の山上は、眺望に優れたその立地的特性から、古墳時代前期に前方後円墳が築造され、その後、9世紀後半～10世紀前半、13世紀～15世紀にかけて断続的に土地利用がなされた。山上の利用は、出土土器の数量比から、13～15世紀が主体であったと想定できる。特に規模の大きな後円部の削平と平坦地の形成については、15世紀前半に実施されたと考えられる。後円部削平の発生材でくびれ部を埋め戻して平坦地を確保したのであろう。一方で、確保した平坦面上には建物群が展開したわけではない。この造成の主目的は、平坦地の確保そのものであったようである。平坦地の用途は、やはり発掘調査成果からは不明と言わざるを得ない。

続いて周辺の遺跡の状況を確認する。船岡山北側の山下で、百相坂遺跡の発掘調査が実施されている。報告書によると、9世紀後半～10世紀前半の遺構と、13～14世紀の遺構が確認されている(香川県教育委員会1997)。この年代観は、上で確認した船岡山山上の時期幅と概ね合致する。さらに、遺構・遺物の検出量も13～14世紀に増加しており、山上と山麓の遺跡動態は連動していた可能性が高い。山麓の百相坂遺跡では、9世紀～10世紀にかけては掘立柱建物1基、13～14世紀には掘立柱建物・柵列・土坑・集石遺構(塚か)



図8 船岡山の可視領域(カシミール3Dを使用)

が確認されている。山上の用途を推測することはやはりここでも難しいため、山上と山麓で関連した土地利用が行われていた可能性を指摘するに留める。

高松市内では、御殿貯水池南遺跡で、13世紀後半～14世紀前葉に丘陵の斜面地を平坦に切り出して、建物を整備した状況が確認されている。ここでも、宗教的あるいは軍事的な用途が想定できる遺物は出土せず、日常生活で使用する遺物類が主体を占めることが指摘されている（高松市教委 2015）。同時期に丘陵部の利用が盛行した可能性が想起されるが、類例が少なく確定的ではない。部分的な調査成果を整理し積み重ねてなお、土地の用途は不明であると言わざるを得ない。

参考資料として、現在山麓北側にある船山神社は、もともとは船岡山に鎮座したとされ、天正年間の長宗我部氏の侵攻に伴う戦火を受けたため、場所を移したとされる（中條 1995）。移転の契機等は検証する余地があると考えられるが、船岡山山上が寺社用地として利用されていたことが推測できる資料である。また、現在山上北端に、山の神を祀ったラントウと祠跡が残されていることや、近世史料であるが『全讃史』の「神社志」に、船岡山の北に祠があり、神宮寺の村社であり、天慶5（942）年に正六位を授かったとされる（中條 1995）記述がある。こうした近現代の資料状況は、中世の山上利用が小規模な宗教施設用地としての整備であった可能性を示唆する。

発掘調査成果は断片的であり、山上利用の時期的変遷の一端を明らかにしたが、その用途までを特定することはできなかった。古墳以後の山上利用は発掘調査の副次的な成果であったが、2号墳の実態解明と合わせて、今回の調査で明らかにしえなかった課題として現時点での到達点を整理しておきたい。（高上）

註

（1）後円部の面積を算定する際に前方部との接合部は考慮せず正円として計算する。また、3段目よりも上部の積石段の存在も想定されるが、根拠に乏しいため今回は考慮しないこととした。

（2）トレンチ調査が十分及んでいないが、例えば1号墳と2号墳の間の尾根側面も平坦化が図られた可能性は高い。

参考文献

香川県教育委員会 1997『百相坂遺跡』香川県教育委員会

片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『川津元結木遺跡』香川県教育委員会

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四十周年記念

佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡』IV 香川県教育委員会

佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『高松城跡（西の丸町地区）II』香川県教育委員会

高松市教育委員会 2015『御殿貯水池南遺跡』高松市教育委員会

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2017『船岡山古墳群（遺構編）』

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会 2019『船岡山古墳群II（古墳時代遺物編）』

中條登 1995「船岡山」『香川町の地名』上巻

山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

第2節 船岡山1号墳の築造と石清尾山古墳群の関係

はじめに

船岡山1号墳の築造背景について、石清尾山古墳群を中心とした積石塚築造の周辺展開という側面から検討を行う。船岡山1号墳は古墳時代前期前半新相⁽¹⁾に築造された。この時期、石清尾山古墳群では、全長96mの猫塚古墳、69mの鏡塚古墳といった地域最大規模を誇る双方中円墳の築造をはじめ、稲荷山姫塚古墳・稲荷山南塚古墳といった前方後円墳も含めて、多数の積石塚が築かれた。石清尾山古墳群の最盛期に相当し(高上2018c)、周辺地域に積石塚の築造が数多く展開した時期でもあった。船岡山1号墳の墳丘外表構造が、石清尾山古墳群と極めて類似しており、意図的に外観上の共通性を表現したことをかつて指摘した(高上2017)が、本稿では、船岡山以外で展開した積石塚の様相を概観しつつ、船岡山1号墳の特質を整理したいと思う。

第1項 船岡山1号墳の墳丘築造

既刊報告書(高松市教委ほか2017)ですでに整理したが、ここで船岡山1号墳の墳丘築造方法の特徴を再整理する。

まず、墳丘内部は地山の地質に起因する盛土と詰石状の石材の使用が確認される。これはいずれも地山の風化土と風化礫を素材とする。こうした地山起源の材を利用し、墳丘の概形を整えたのちに、積石によって墳丘外表を形成する。

墳丘外表構造は、まず塊石を用いて2段程度の積石段を形成する。積石段は垂直基調に積み上げられ、小口積と横積を併用して形成される。くびれ部及び前方部側面では、こうして形成された塊石の積石段の前面に、安山岩板石の垂直積みによる段が配置され、塊石の積石段を被覆する(写真9)。こうした構造を墳丘外表の二重構造と呼称した。安山岩板石による積石段は、構造上の強度とは関係がないため、装飾的な用途で施工されたと考えている(高上2018c)。

こうした構造は、石清尾山古墳群の積石塚と類同であり、墳丘完成時の外観を石清尾山古墳群と同様に整備するための強い意図が背景にあったものと考えた。石清尾山古墳群では、墳丘外表の二重構造は鶴尾神社4号墳と猫塚古墳でその可能性が推測され、確実な事例では稲荷山姫塚古墳で確認されている。いずれも石清尾山における地山起源の安山岩を用いている。船岡山1号墳



写真8 船岡山1号墳後円部の石積み



写真9 船岡山1号墳くびれ部の石積み

の墳丘は、装飾的造作まで含めて石清尾山古墳群と同様の構造を採用しており、その実現にあたっては、現地で調達することのできない安山岩板石を外部から獲得し、搬入するという多大な労力が投下されていた。墳丘完成時の外観の共通性の演出に強い意図が働いていた点に、船岡山1号墳と石清尾山古墳群との強い紐帯の存在を想定したのである。

前稿においては、船岡山1号墳の墳丘構造の分析から上記の想定を導いたが、本稿では他の積石塚の構造との差異を検討して、船岡山1号墳と石清尾山古墳群の関係を間接的に照射する。

第2項 周辺地域の積石塚の構造

船岡山1号墳と同時期、古墳時代前期前半新相に積石塚はその分布域を最大にしており、石清尾山古墳群の中心的な役割をその背後に想定している（高上 2018b）。

高松平野以西については、現坂出市域～善通寺市域を中心に積石塚の築造が認められる。未調査の資料がほとんどであるため、構造がある程度明らかになっているのは野田院古墳に限られる。古墳時代前期前半新相に位置付けられる当墳は、墳丘の整備に伴い全面的な解体調査が実施された。発掘調査報告書が未刊であるため、整備事業報告書の写真等から旧状をうかがうと、塊石を用いて複数段の積石段を築いていることが確認できる（写真 11）。一方で、船岡山1号墳で確認された安山岩板石の積石段は全面的な解体にも関わらず確認されていない。石清尾山古墳群で装飾的な板石積みが全盛であった時期に平行するものの、ここでは採用されていない。また、前方部が盛土で形成され、表面を石材で覆う（あるいは積石する）意図は認められない（写真 10）。後円部は積石で形成し、前方部を盛土で施行する事例は、坂出市爺ヶ松古墳（渡部 1983）、同雌山2号墳（今井 1990）でも確認されていることから、積石による墳丘外表構造は、後円部に意図的に用いる意識があったことが分かる。石清尾山古墳群では、墳丘全体が積石で形成されていることを考えると、西部の積石塚はこれを部分的に採用したことが想定できる。船岡山1号墳では前方部でも外表に積石が施工されている点から、より明確に石清尾山古墳群との共通性を表現したと考えられる。

高松平野以東では、積石塚の構造が明らかになった事例は少ない。前期前半古相に位置づけられるさぬき市うのべ山古墳では、柱状の塊石を横方向に1段配置した墳端の構造が確認できる。同川東古墳では、発掘調査が実施されていないが、踏査の成果として東側くびれ部に板状石材が2～3段垂直に近い状況で積まれていたことが報告される（さぬき市教委 2013）。当墳は船岡山1号墳と同じく前期前半新相に位置づけられる。写真等で詳細を確認することはできないが、墳



写真 10 野田院古墳全景



写真 11 野田院古墳後円部の石積み

丘外表の二重構造が確認できる可能性はある。

阿波地域にも、多くの積石塚が認められる。詳細は別稿（高上 2020）で検討しているため、ここでは概要だけ示すが、阿波地域の積石塚はいずれも吉野川南岸に位置し、地山起源の石材である結晶片岩を用いて墳丘構築を行う。石清尾山古墳群をはじめ讃岐地域では安山岩が用いられるが、徳島は結晶片岩である。材質が異なるものの、いずれも岩質（節理の特性）に基づき塊石と板石が産出する。主に石清尾山古墳群の資料を基に検討した墳丘外表の積石技法の変遷は、阿波地域の資料においても概ね追認できることから、積石塚の築造にあたっては、密な情報の交流があったものと考えられる。

一方で、阿波地域の積石塚においても、墳丘外表の二重構造を採用した資料は認められない。発掘調査で構造が確認された事例が少く、根拠が不十分であることは否めないが、装飾性が高く、それゆえ必要な材料・労力が余分に必要な二重構造は、川東古墳で可能性が想定されるものの、現状では石清尾山古墳群と船岡山 1 号墳でしか確実な事例が確認できない。板石自体は結晶片岩で現地調達が可能であるにも関わらず、阿波地域では二重構造が採用されなかった点は重要である。材料の制限ではなく、石清尾山古墳群で盛行した手間の掛かる装飾的な石積み技法が採用されなかった点には、阿波地域の主体的な選択、交流の疎密といった背景が想定される。

こうした周辺地域の積石塚の様相と比較することで、船岡山 1 号墳の特質が浮き彫りになってくる。現在のところ、船岡山 1 号墳は石清尾山古墳群以外で、外表二重構造が確認された唯一の事例である。調査の進展で見直される可能性も十分あるが、現地で産出しない材料（安山岩板石）を調達してまで、同一の技法で墳丘を築造した点からは、石清尾山古墳群との強い一体性の表示といった意図がうかがい知れる。周囲の状況と比較すると、この側面をより強調することになるだろう。

竪穴式石室石材としての安山岩板石は、讃岐地域から吉備地域まで広域流通したことが知られている（宇垣 1987）が、墳丘構成材としての板石もまた流通していた可能性を想定したい。この場合、墳丘構築技法の共通性や、後述する墳丘形態などの共通性から考えても、石清尾山からもたらされたとするのが妥当であろう。今後、岩石学的な分析で検討されることが望まれる。

第 3 項 墳丘の形態

墳丘外表構造以外にも、船岡山 1 号墳と石清尾山古墳群との関係を検討しておく。まずは墳丘形態である。船岡山 1 号墳は、発掘調査の結果、全長 44 m の前方後円墳であることを確認した。また、墳丘平面形の特徴として、前方部がくびれ部からやや内側に直線的に伸び、屈曲して外方に伸びる点、前端が撥形に開く点を確認した。こうした形態上の特徴は、石清尾山古墳群においても確認できる⁽²⁾（図 9）。

船岡山 1 号墳に先行する事例として、石清尾山古墳群中の鶴尾神社 4 号墳と石清尾山 9 号墳があげられる。いずれも前期前半古相に相当する。鶴尾神社 4 号墳は、発掘調査によって墳丘形態がある程度明らかにされている。前方部はくびれ部から前方部前端に向かってやや幅を減じ、屈曲して外方に伸び撥形を呈す。また、前方後円墳ではないが、同時期の双方中円墳である稲荷山北端古墳でも、北側方形部は一度幅を減じて屈曲し、前端付近が撥形に開く。こうした形態上の特徴は船岡山 1 号墳と共通性が高い。石清尾山 9 号墳は、表面観察ではくびれ部の形態は不明だ

が、前方部前端が撥形に開くと想定される。船岡山1号墳と同時期の資料としては、稲荷山姫塚古墳⁽³⁾、稲荷山南塚古墳がある。くびれ部の調査を行っていないため、特徴的なくびれ部の形状で比較はできないが、前方部が前端に向けて開く点は共通している。特に前方部で観察される形態上の特徴からは、船岡山1号墳と石清尾山古墳群中の同時期あるいは先行する積石塚との共通性は高いと判断できる。なお、正確な測量図では提示できないが、前期後半古相の姫塚・北大塚古墳も前方部は外方に広がる。また前期後半新相の石船塚古墳も、現地観察によると従来考えられていた柄鏡型の前方部ではなく、前端付近が外方に開くことは確実である。前方部前端付近が外方に開き、場合によっては撥形に屈曲するのは、石清尾山古墳群で代々踏襲された形状といえるかもしれない。墳丘形態の把握は、こうした歴史的評価に結び付く属性であり、基本的な把握が急務である。

おわりに

船岡山1号墳は、現地の地質的前提（地山の風化した土壌が厚く発達する、安山岩板石が産出しない）にも関わらず、多大な労力を投下して、積石塚としての外観を手に入れた。また、安山岩板石を入手して、装飾的な墳丘外表二重構造を採用している点には、石清尾山古墳群との共通性を表示する強い志向を読み取ることができる。讃岐地域の前期古墳は、「讃岐型前方後円墳」と様式的な把握を行うことが試みられ（北條1999）、その後実態としての多様性から一律の様式把握が困難であるとの修正見解が提示された（北條2003）。前方後円墳様式の影響を受けながら、様々な独自の要素を作り出し、さらに属性の組み合わせも一律でないことで多様な状況を呈す（大久保2011）というのが実態であろう。こうした背景のなかで評価すると、船岡山1号墳は石清尾山古墳群との共通性の表示を意図的な戦略として採用したことがより強調される。

船岡山1号墳が築かれた古墳時代前期前半新相は、石清尾山古墳群の最盛期にあたる。地域最大規模墳である双方中円墳（猫塚古墳、鏡塚古墳）の築造、積石塚の周辺地域への分布の広がり、築造数といった諸点に、その盛興がうかがえる。船岡山1号墳はこうした時期的背景のもとで築造された。石清尾山古墳群との共通性は、直線距離にして6km程度、相互に視認も可能であるという地理的条件に影響された側面もあっただろう。ただし、同時期の高松市茶臼山古墳も同様に6km程度の距離を隔てるのみであるが、畿内的と評価される竪穴式石室や石製腕飾類、盛土による墳丘⁽⁴⁾といった、石清尾山古墳群とは大きく異なる属性が意図的に採用されている。単純



写真12 船岡山1号墳の二重構造



写真13 稲荷山姫塚古墳の二重構造

な距離的近さによる関係だけではなく、船岡山1号墳の被葬者の意図的な選択と政治的な戦略を背景に古墳築造がなされたと考えたい。

一方で船岡山1号墳の周辺には、先行する古墳は確認されておらず、また後続する古墳も確認されていない⁽⁵⁾。石清尾山古墳群は、前期後半古相に急激に衰退することを確認しているが、船岡山1号墳の系譜的非連続性は、こうした動きと連動するものと考えられる。すなわち、石清尾山古墳群との共通性に大きく依拠した政治戦略が不調におわり、古墳築造が連続しなかったものと考えたい。(高上)

註

(1) 時期区分は(大久保2013)に依拠し、同氏の讃岐1期を前期前半古相、2期を前期前半新相、3期を前期後半古相、4期を前期後半新相とそれぞれ呼称する。

(2) こうした形態上の特徴は、四国島東北部地域の前期古墳に特徴的な形態であることが指摘されている(北條1999等)。また、鶴尾神社4号墳に典型的に認められることから、石清尾山古墳群を中心として展開した属性の一つであると考えられている。積石塚に限定される訳ではなく、盛土墳にも採用される事例があるため、様式的に一律なものとして展開したのではないことには注意が必要である。ここでは、共通の墳形の特徴を有す古墳間に共通性の表示を媒介とした紐帯の存在を推定する。

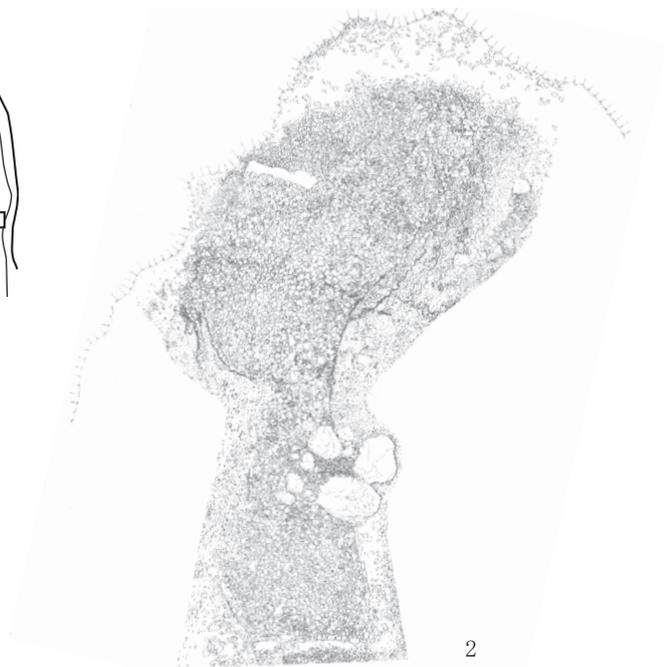
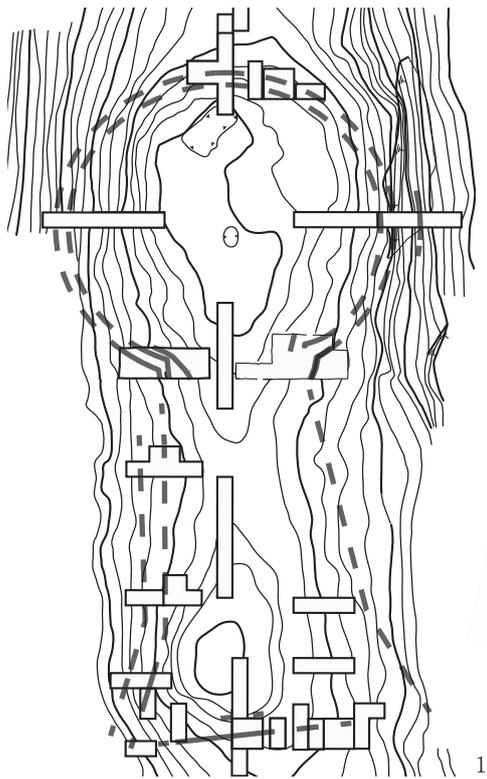
(3) 稲荷山姫塚古墳では、後円部、前方部側面まで板石の垂直壁が巡らされている一方で、船岡山1号墳はくびれ部と前方部側面に限られ、後円部では認められない。入手した石材量の制限があったのか、施工範囲の規制があったのか定かではないが、この点は石清尾山古墳群との差異として認識できる。

(4) 葺石が施工されたとされるが、調査報告書の写真を見る限り、墳丘側面を覆うほどの石材の転落状況は確認しがたいように思われる。調査が古く、不明な点も多いが、全面的な葺石の施工を想定するのは難しい。

(5) 船岡山2号墳の時期的な位置づけや墳丘規模等は不明であり、今後の課題である。また、古墳そのものは確認されていないが、現在浅野小学校校庭に保管される刳抜式石棺は、もともと船岡山麓の出水の樋に転用されていたものである。前期後半に周辺に刳抜式石棺を主体部とした古墳が存在した可能性が高い。他の刳抜式石棺を伴う事例をみると、さぬき市一つ山古墳を除き全て前方後円墳であるため、おそらく墳丘規模の大きな前方後円墳であった可能性が高い。未発見の前方後円墳の存在が推測できるが、いずれにせよ船岡山1号墳との時間的距離はある程度大きく、船岡山1号墳築造後の断絶は指摘できるだろう。

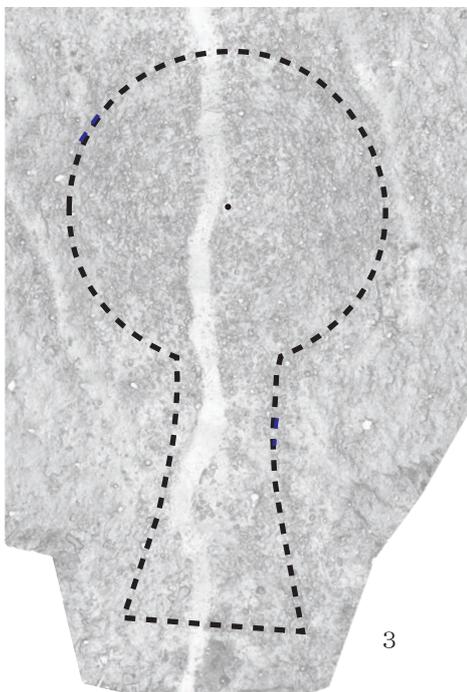
参考文献

- 今井和彦 1990 「雌山古墳群」『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会
- 宇垣匡雅 1987 「堅穴式石室の研究(上)(下)ー使用石材の分析を中心にー」『考古学研究』第34巻第1号・第2号、考古学研究会
- 大久保徹也 2000 「四国北東部地域における首長層の政治的結集」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集、古代学協会
- 大久保徹也 2006 a 「備讃地域における前方後円墳出現期の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』考古学協会
- 大久保徹也 2011 「四国」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店
- 大久保徹也 2013 「津田湾・津田川流域に所在する前半期主要古墳の編年的整理」『津田古墳群調査報告書』考察編、さぬき市教育委員会
- さぬき市教育委員会 2013 『津田古墳群調査報告書』
- 高上拓 2017 「船岡山1号墳の墳丘構造」『船岡山古墳群(遺構編)』高松市教育委員会・徳島文理大学文学部
- 高上拓 2018a 「石清尾山古墳群の墳丘外表構造」『石清尾山古墳群(稲荷山地区)調査報告書』高松市教育委員会
- 高上拓 2018b 「石清尾山古墳群の評価と調査成果の位置づけ」『石清尾山古墳群(稲荷山地区)調査報告書』高松市教育委員会

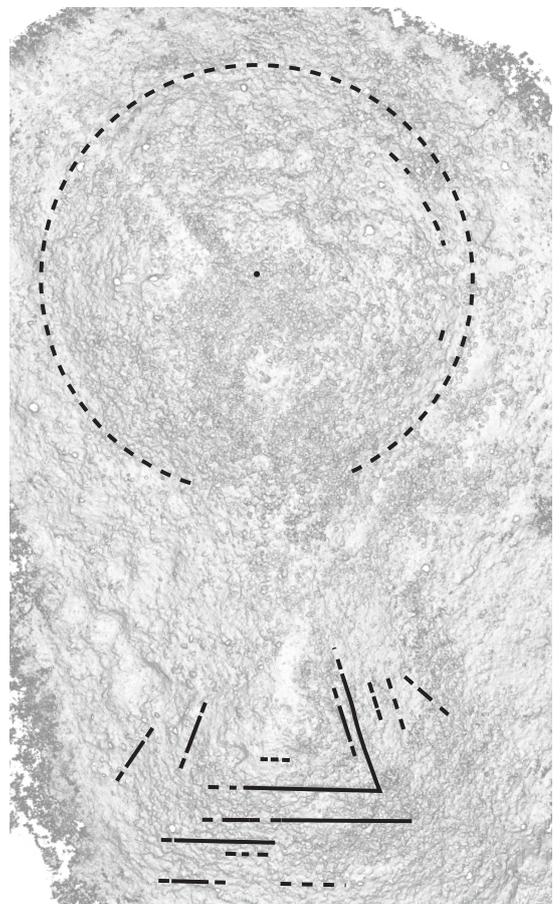


2

- 1. 船岡山1号墳
- 2. 鶴尾神社4号墳
- 3. 稲荷山南塚古墳
- 4. 稲荷山姫塚古墳



3



4

図9 関連諸墳の平面図

高上拓 2018c 「積石塚古墳の墳丘外表構造」『待兼山考古学論集』Ⅲ大阪大学考古学研究室
高上拓 2018d 「香川県域における古墳時代前期の埴輪—近年の調査成果を中心に—」『四国のハニワ 調査成果報告・講演会資料集』2017 年度アワコウコ楽連続公開講座（後期）資料集 徳島県埋蔵文化財センター
高上拓 2020 「積石塚の広がり」と受容からみた地域の実態」『讃岐野に種を蒔く』片桐さん還暦記念論文集
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2017 『船岡山古墳群（遺構編）』
高松市教育委員会 2018 『石清尾山古墳群（稲荷山地区）調査報告書』高松市教育委員会
徳島文理大学文学部・高松市教育委員会 2019 『船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）』
北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集
北條芳隆 2003 『東四国地域における前方後円墳成立過程の解明』平成 12～14 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書
渡部明夫 1983 「讃岐における積石塚古墳の分布」『鶴尾神社 4 号墳調査報告書』
渡部明夫 2017 「讃岐・阿波」『積石塚大全』雄山閣

第3節 船岡山1号墳埴輪の型式学的出自

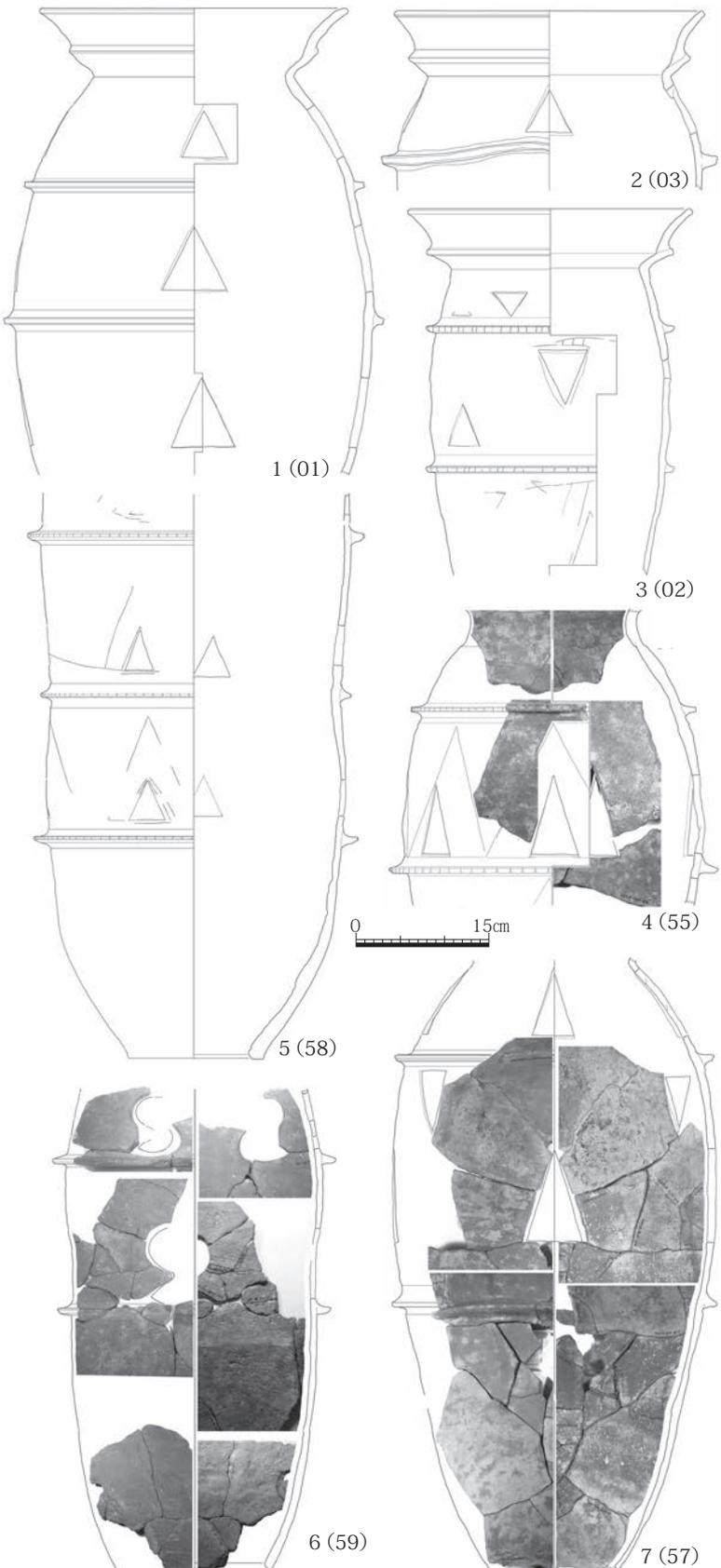
本節では船岡山1号墳埴輪の型式学的出自、いいかえれば船岡山1号墳埴輪が出自する埴輪器種についてあらためて検討する。

第1項 船岡山1号墳埴輪の基本形態 (図10)

まずは特異な船岡山1号墳埴輪の概形についてあらためて述べる。上下両端が強く窄まった紡錘形を思わせる特徴的な器体の上端に二重口縁形態が取り付く(図10-1・3など)。口縁部は大きく外反して延びる立ち上がり部から強く屈折して短い頸部を具える(図10-1~3)。器体と口縁頸部が直結してその間の頸部ははっきりしない。

器体には2ないし3条の突帯が巡る(図10-1・3・5~7)。以下、これらを上段・中段・下段突帯と呼ぶ。また器体上端~上段突帯を肩部、上段突帯~下段突帯を中位部、下段突帯以下を底部と呼ぶ。さらに必要に応じて中位部を上・下段に分ける。

器体肩部と中位部には三角形(図10-1~5・7)もしくは変容が著しい巴形透し孔(図10-6)を穿つが、底部段に透し孔を穿たない。中位部突帯間の透し孔は必置だが、肩部はそうではない。また透し孔に加え、粗放な沈線文を施すことがある。



*括弧内は船岡山古墳群Ⅱ報告番号

図10 船岡山1号墳埴輪の基本形態

第2項 型式学的出自

こうした形態から船岡山1号墳埴輪の形式学的出自を特殊器台・特殊器台形埴輪に求めることは難しい。ただし基本形態を離れてそこに加味された文様については特殊器台形埴輪に淵源すると考える。この点は後段で詳しく検討したい。また古墳時代前期、特に前半期に一時的な据え置きを含めて墳丘に配置する土製仮器類(=埴輪)のうち、器台形を呈する一群においても必ずしも特殊器台・特殊器台形埴輪に由来しない系統のそれが一定数存在することもよく知られている。近隣の事例では稲荷山姫塚古墳(高松市教委2018)の特徴的な装飾器台形埴輪はそうした典型例と云える。愛媛県妙見山1号墳(下條編2008)の器台形埴輪は有帯装飾器台の一種に由来し、そこに特殊器台形埴輪などの文様要素を組み込んだものとみられる。また山陰地域の円筒形土器(器台)の多くも特殊器台・特殊器台形埴輪との型式学的連関をスムーズに辿ることが難しい。そうした存在を念頭におき、これら各種の「器台形」埴輪と比較しても、船岡山1号墳埴輪の基本形態を広い意味での器台・器台形埴輪と関連づけることはできないと考える。

そうするといささか消去法的ではあるがとりあえずは朝顔形埴輪の一種、もしくは壺形埴輪の変容形態であることが予想される。まずは朝顔形埴輪との関連について検討してみよう。

a. 朝顔形埴輪と船岡山1号墳埴輪

朝顔形埴輪では、壺相当部位の上部、すなわち口頸部を強調する傾向が強い。二重口縁壺の頸部および立上り部の伸長が著しい一方で、口縁頸部は頸部と一体化することが多い。

特殊壺形埴輪(壺形埴輪)を載せた特殊器台形埴輪(円筒埴輪)の外観を擬えた朝顔形埴輪の最初期の形態は東殿塚古墳(天理市2000)、玉手山3号墳(安村2001)などで知られる。これらから成立期の朝顔形埴輪の様相を見ておこう(図11-12・13)。東殿塚古墳資料(図11-12)で重要な点は器体に巡らす3条の突帯だ。上段突帯は付設位置から特殊壺(形埴輪)の胴部突帯を表現したものであろう。問題は中段の突帯でその断面形は特異な鍵手状を呈し、特殊器台形埴輪の二重口縁形態を擬えたものとされる。東殿塚古墳資料では特殊器台形埴輪の器体相当部分がひどく切り詰められ低いのだが、上記したように壺を載せた器台というこの器種の出自を象徴的に表現した部分を作り出す。

では船岡山1号墳埴輪にこうした形跡を見出すことができるだろうか。あらためて確認しよう。器体上部の口縁接合部に向けて強く窄まる肩部は概ね半球形を呈する。肩部の高低は個体差が目立つが、概形に大差はない。結合形態たる朝顔形埴輪の特徴が最も表れる「壺」と「器台」結合部の痕跡は定かではない。船岡山1号墳埴輪では2ないし3条の突帯を巡らす。しかしこれらに東殿塚古墳や玉手山3号墳の器台形口縁を準えた特異な鍵手形態をもつ突帯はない。また突帯間には透し孔を配置する十分な間隔を保っており、三段構成の個体でも上段と中段突帯、もしくは中段と下段突帯の間隔を目立って狭める個体もない。あるいは白水瓢塚古墳(神戸市教育委員会2009)等にも朝顔形埴輪の肩部が筒部の径よりも強く張り出し、壺体部の形態を準えた作りが観察できるわけでもない。朝顔形埴輪で今挙げた型式学的出自を示唆する形態的特徴を解消する時期以降に船岡山1号墳埴輪の編年の位置を下げることは著しく説得力を欠くことになる。

以上の諸点から、船岡山1号墳埴輪を朝顔形埴輪の一種と見なす根拠はなく、この型式学的出自に関わる仮説の一つ、すなわち朝顔形埴輪と関連づける可能性を除外する。

b. 特殊壺形埴輪の可能性

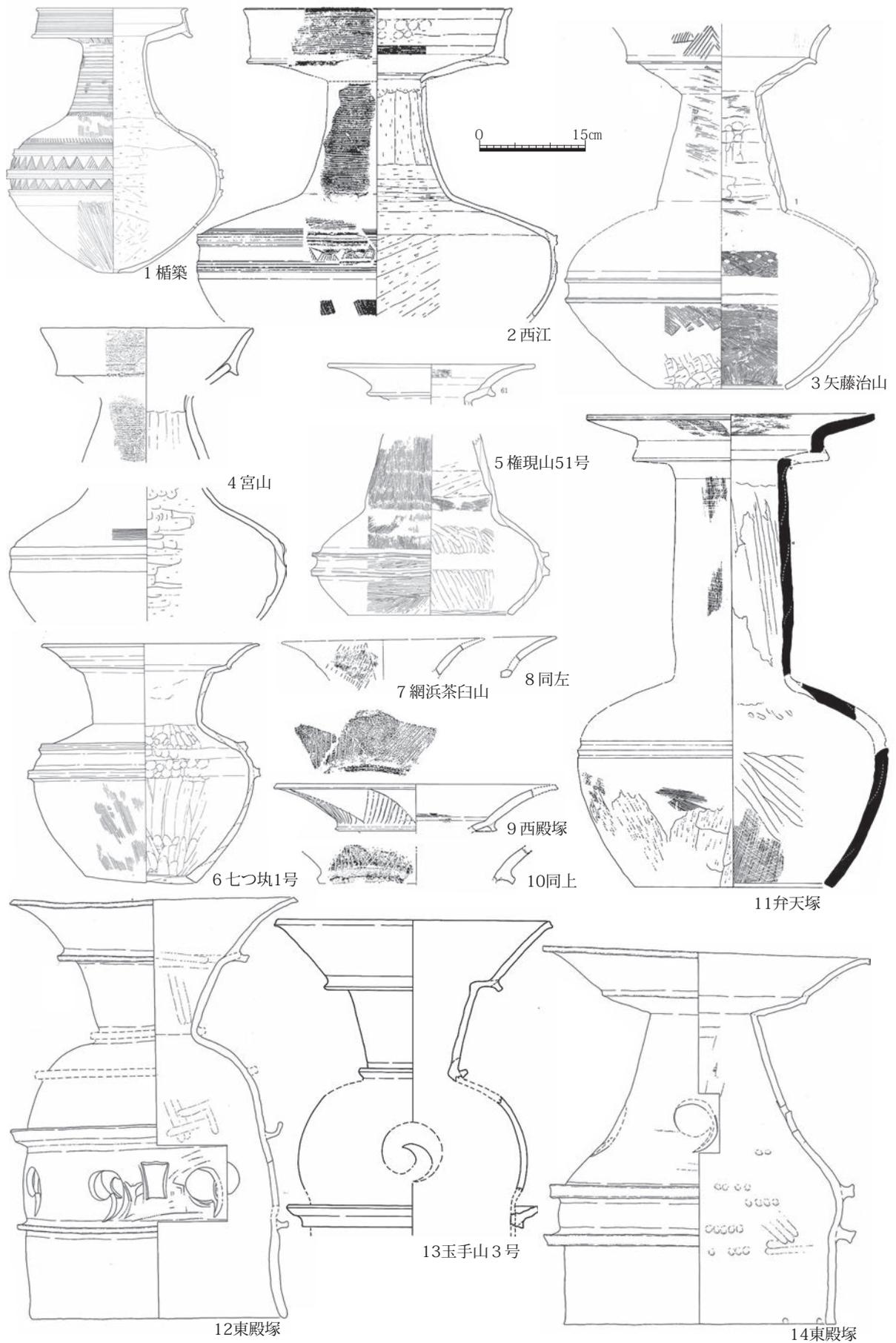


図 11 特殊壺（形埴輪）と初期の朝顔形埴輪

続いて壺形埴輪の可能性を検討する。器体に突帯を添付する形態から、正確には特殊壺形埴輪の変容形態と捉える可能性を探る。

長く紡錘形に引き伸ばした器体の基本形は扁平球形を基調とする特殊壺〔形埴輪〕の体部形態から大きくかけ離れたものである。伴出する特殊器台形埴輪の文様構成から、今のところ吉備地域における特殊壺の最終型式と宇垣が位置付ける（宇垣 1997）岡山県七つ坑 1 号墳資料（近藤他編 1987）では、体下部（突帯下方）を長く引き伸ばして扁平球形から逸脱する傾向が認められる（図 11- 6）が、船岡山 1 号墳埴輪の器体ほどには極端ではない。

特殊壺に遡り、やや強調気味に長く設けた頸部の作りはこの系統の壺の特徴であったが、これに相当する部位は船岡山 1 号墳埴輪では大幅に省略されている。さらに透し孔と簡略的ながら篋描沈線文を器体に付加することも特殊壺形埴輪と船岡山 1 号墳埴輪の関連を否定する材料になりうるだろう。より後出的な壺形埴輪では器体は筒形化し瓶子状となることも珍しくないが、突帯および透し孔などの装飾的要素 - 後に論じるように都月型文様の構成要素に淵源すると考えてい

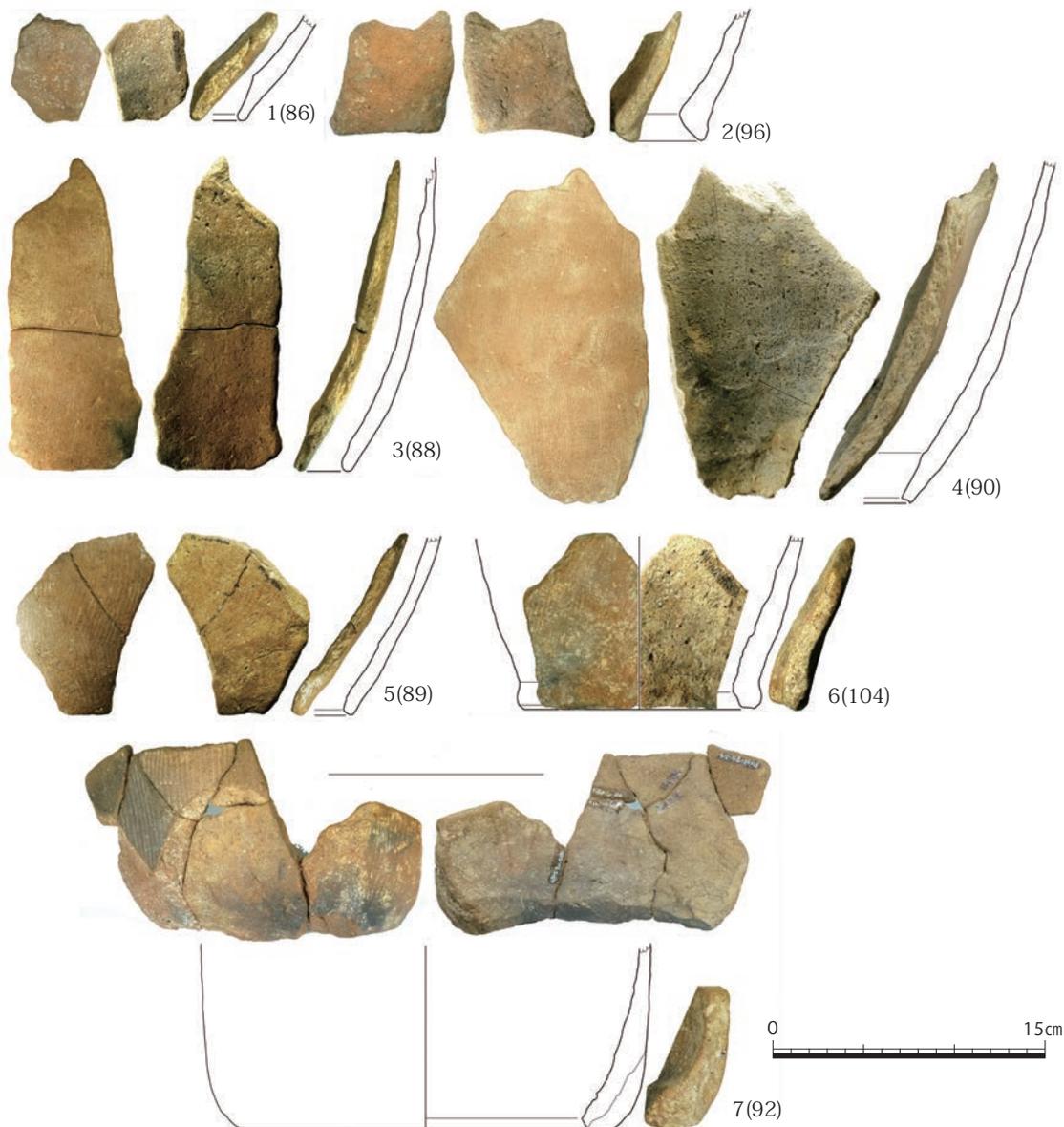


図 12 船岡山 1 号墳埴輪の底部調整

る - の説明が難しくなるし、そうした形態の壺形埴輪が登場する時期まで船岡山 1 号墳の編年的位置を下げることもできない。この点の詳細も後に論じることとする。

ここで結論を急がずに、以下ではまず各部の形状をあらためて詳細に検討したうえでこの点の判断に戻りたい。

b-1) 器体の形状 とくに底部形態について

紡錘形に近い器体の基本形態は上に述べたように特殊壺形埴輪のそれとはかけ離れている。その一方、下端に向かい強くすぼまる形態は特殊器台形埴輪あるいは円筒埴輪の底部とも全く異なる。もう少し詳しく底部の細かい形態と仕上げ技法について確認しておこう。下端の断面形は、大半では器体の下部よりさらに薄くやや尖り気味に終息する個体が多い。器体の特に中位以下は原則的に削り仕上げとなるが、こと下端部に限って重ねて削りを加えるものが目につく(図 12)。下端の器壁の薄化はこれによる。こうした底部調整とその結果生じた断面形態は特殊器台形埴輪や古墳時代前・中期の円筒埴輪には見られないものだ。またこのことに関連して興味深いのは図 12-2・6・7 の底部片である。これらの資料は上記した底部調整が充分ではなく、底部付近は分厚くなる。特に典型的な図 12-7 では乾燥前に自重で潰れた下端附近が内面側にはみ出すように変形した様が残されている。下端を強く窄める器形のため、乾燥前に過度な荷重がかかった場合、このような無様な格好にままなりかねないのだろう。上に示した底部調整(主として内面側の下端附近のヘラケズリ)はこうした歪みを補正する措置である。

宇垣匡雅氏は特殊壺・特殊壺形埴輪と都月坂 1 号墳壺形埴輪の底部仕上げを比較した(宇垣 1984)。宇垣氏によれば特殊壺ではいったん成形した底部を焼成前に穿孔し、特殊壺形埴輪・壺形埴輪では底部を筒状に成形して最後に下端を切除するという。宇垣氏が例示した都月坂 1 号墳の壺形埴輪では体下端の切除部周辺の内面を削り、器壁の薄化と形状の補正をおこなっている。船岡山 1 号墳埴輪の底部調整は宇垣氏が指摘した特殊壺形埴輪・壺形埴輪の底部成形と整形に通じる内容と考える。ただし器体の長胴化に伴って必然的に底部の立ち上りは急になり、その結果調整の細かな手法や完成形態に若干の差異が生じているのだろう。また少数だが底部調整の不十分な個体を伴うことは、この部位の仕上げを省略する傾向が生じている。

こうした底部調整は器体を直立させる特殊器台形埴輪・円筒埴輪には不要な工程である。中位部が強く張った器体、つまり壺形を意図するならば、一部で略化は生じているとはいえ、なかなか取り除きがたい工程であろうし、船岡山 1 号墳埴輪と特殊壺形埴輪の関連を示唆する一つの手がかりではある。

なお壺形埴輪の底部穿孔について補足しておく。高松平野周辺では少なくとも石清尾山古墳群の鶴尾神社 4 号墳(高松市教育委員会 1983)から猫塚古墳(梅原 1933・香川県教育委員会 1996)までの間、広口壺(形埴輪)の底部に径 10mm 内外の小円孔を焼成前に穿つ(図 26-2・5)。特徴的な底部穿孔の手法である。また焼成後の可能性もある事例を含めれば善通寺市野田院古墳など同形の小円孔を穿つ事例はさらに増える。船岡山 1 号墳埴輪では今挙げた諸例とは異なり特殊壺形(埴輪)の底部穿孔に通じる仕様を採用している点にも留意しておきたい。

b-2) 貼付突帯

器体に繞らす突帯の条数は 2 ないし 3 条と少なく、これによって器体は 3 段もしくは 4 段に区分される。突帯は器体中位にまとまる傾向があり、すでに述べたとおり下段突帯下=底部は器体

中位の突帯間の各段や、器体肩部に比べてことさらに長い。その一方、3条突帯で中位部を上下に分割する個体では上下の突帯間隔に差を設けていない。

こうした突帯配置は特殊器台形埴輪の定式的な構成⁽¹⁾-6条突帯7段構成で特殊器台に比べ文様帯と間帯(無文帯)の幅の差は明らかに縮小し、突帯間隔の均質化が進む-との懸隔は大きく、突帯条数と配置は特殊壺形埴輪に通じる点が多い⁽²⁾。

その一方、突帯の形状に目を向けるといっそう相違点は大きい。まず断面形態では船岡山1

号墳資料では総じて細身で突出度が高い。また頂部に面をもたないので、矩形を呈さず、むしろU字形に近い。やや幅広の矩形をなし、それすらも鈍化する方向に変化する特殊壺形埴輪の体部突帯との差異は大きい。

この点に加え、船岡山1号墳埴輪では突帯上面に刻み目を加える資料が一定数存在する。観察できた突帯条数は全47例となる。一個体で2段以上の突帯が残る場合は、残存条数を各1として左の観察数に加えている。このうち刻目突帯は14例(1/3弱)となる。また2段以上が確認できた大形破片のうち図10-3・4・5および図13-1では残存突帯の全てに刻み目を加え、逆に図10-6・7および図13-2・3では残存突帯の全てに刻み目はない。つまり刻目突帯の有無は個体差である可能性が高い。さらに個体別に見ると、2段以上の刻目突帯が残り、透し孔および沈線文を観察できた4個体の全ては三角形透し孔を配し、かつ透し孔間に山形文(図10-4・5、図13-1)ないし斜線文(図10-3)を加える。なお小片図13-4は沈線文の有無は定かではないが三角形透し孔の可能性が高い。逆に突帯に刻み目を加えない図10-7は三角形透し孔だが沈線文はなく、図10-6は巴形透し孔で沈線文がない。図13-2は三角形透し孔のうち1孔に縁取り様の沈線文を伴うが、透し孔間に展開する山形文などはない。図13-3は透し孔・沈線文は不明だ。

以上から刻目突帯と、文様要素としての三角形透し孔と山形意匠沈線文は相関する可能性が高いことがわかる。

箸墓古墳では伴出した壺形土器の頸基部に刻目突帯例(書陵部1999)があるが、共伴する特殊器台形埴輪などに応用された徴証はない。刻目突帯はおよそ特殊壺形埴輪、特殊器台形埴輪とは無縁なものである。特殊器台に先行、あるいは並行する大形の筒形装飾器台では刻目ないし今少し手の込んだ意匠の竹管文を突帯上面に施す例がある。兵庫県有年原田中遺跡資料の一部、岡山県長坂1号墳の棺体転用器台(図28-4、岡山市教育委員会1999)および同津島遺跡河道1出土資料(図28-2・3、岡山県教育委員会2003)の一部などだ。しかしこれらが古墳時代前期

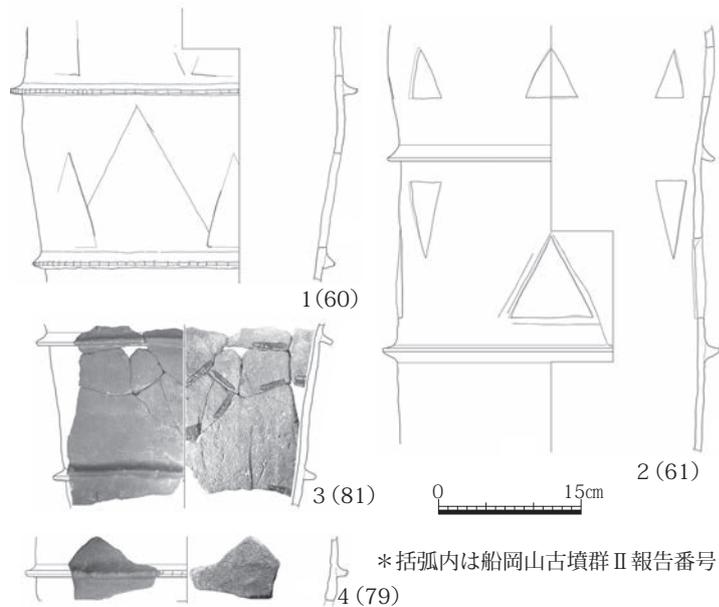


図13 船岡山1号墳埴輪の刻目突帯と透し孔形態

まで存続した可能性は低いし、またそうした加飾法が特殊器台・特殊器台形埴輪に広く浸透した気配はなく別の出自を探る必要がある。

なお高松平野の稲荷山姫塚古墳、高松茶臼山古墳の特異な器台形埴輪では刻目突帯をみる。しかし本節で主題とする特殊壺形埴輪と船岡山1号墳埴輪の関係からは、とりあえず分けておきたい。この点については後節で検討を加える。

こと貼付突帯の形態等に関しては、船岡山1号墳埴輪のそれは特殊壺形埴輪に由来するとは捉えがたい点を確認しておく。

b-3) 口縁部形態

船岡山1号墳埴輪の口縁部は、短いが頑丈な顎部から屈折して強く外反して延びる立上り部に至る。口縁端部はやや尖り気味に終息する。また屈折部外面は多少突出気味に強調するが、突帯状に突起させる形ではない。

最初期の岡山県楯築墓(近藤他1992)から、広義の向木見型のうち同西江墓群(岡山県教育委員会1977)までの特殊壺では、口縁部は長大な顎部と、そこから鋭く屈折して直立ないしやや内傾気味に延びる高い立上り部を具える。宮山墓(岡山県1986)・矢藤治山墓(近藤編1995)のそれでは、顎部は引き続き長いものの、先行型式ではほとんど水平に開いていたものが斜め上方に延びるようになる。同時に立上り部は強く外反してのび、端部が尖る形態に転じる。権現山51号墳特殊壺形埴輪(図11-5)では、口縁立上り部の外反と伸びはいつそう発達するが、それと反比例するように顎部が目立って短くなる。網浜茶臼山古墳(図11-7・8)でも口縁立上り部外反の強化と伸長は同様である。立上り部の伸びと外反度は及ばないが、顎部の圧縮は七つ坩1号墳資料(図11-6)からも読み取れる。

一方、西殿塚古墳特殊壺(図11-9・10)は立上り部の外反と伸長は同様だが、顎部からの屈折は鈍化し、それを代替するように突帯を添付して補う朝顔形埴輪的な形を採る。葛本弁天塚古墳特殊壺形埴輪(図11-11)は立上り部の途中で屈折し、同部の外反形態が変化してひどく硬化した印象を与える特異な形態だが、上に挙げた特殊壺形埴輪口縁部から派生する形態と解することは可能であろう。

吉備地域で特殊壺(特殊器台とのセット関係が想定されるものを特殊壺としておこう。)の末期的型式で生じた口縁立上り部の様変わり-長く外反する立上り部-が、特殊壺形埴輪に引き継がれ、さらに顎部の縮小がはじまる。大勢としてはこのような変化を辿るが、船岡山1号墳埴輪の、こと口縁部形態に関しては特殊壺形埴輪のそれから逸脱した形ではない。

吉備地域で特殊壺(特殊器台とのセット関係が想定されるものを特殊壺としておこう。)の末期的型式で生じた口縁立上り部の様変わり-長く外反する立上り部-が、特殊壺形埴輪に引き継がれ、さらに顎部の縮小がはじまる。大勢としてはこのような変化を辿るが、船岡山1号墳埴輪の、こと口縁部形態に関しては特殊壺形埴輪のそれから逸脱した形ではない。

b-4) 顎部の退化

体部に比べて大振りな口顎部を取りつけることは特殊壺・特殊壺形埴輪の一つの形態的特徴といえる。その中でも長く引き伸ばした顎部は目につく。吉備地域における特殊壺形埴輪の末期形態と思われる七つ坩1号墳資料(図11-6)では外傾気味に立ち上がる形態に変化した顎部は少し短くなるが、奈良県葛本弁天塚古墳資料(図11-11)では顎部を極端に伸長させたものがある。

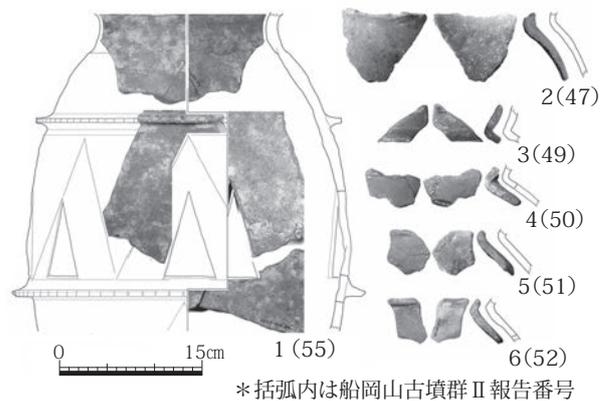


図14 船岡山1号墳埴輪の頸部形態

いずれにせよ口縁部と器体上部の間に設ける頸部を欠く船岡山1号墳埴輪が特殊壺（形埴輪）一般から大きく逸脱した存在であることは間違いない。

そこであらためて口縁部下端（＝顎部）と器体上端、両者の接合部の形状を細かく観察してみる。内湾気味に強く窄まる器体上部から口縁顎部へは急角度で向きを転じることになるので、この屈曲部分に注目する。この点では興味深いのは図10-4（図14-1）資料だ。残念ながら口縁部を欠失するが、肩上部で緩やかに外反し、短い接続部を介して口縁顎部に接続する。他の資料（図14-2～6）も、顎部の展開角度を考慮すれば、器体上端から屈折して一旦、短い（であろう）外傾部分を経て顎部に接合する形態に復元できると考える。こうした点から船岡山1号墳埴輪は本来的に頸部を具えない形態として構想されたものではなく、極限的に頸部を圧縮する方向に変容させた可能性を想定しておきたい。また上記した資料（図10-4）以下の形状、また他の口縁顎部や器体上端のそれを合わせ考えれば、今述べた顎部の圧縮・退化は、器体上部＝肩部と顎部のなだらかな連続、対照的な顎部下端の屈折から、肩部と顎部とが一体化し、後者が前者に吸収される方向に進んだものと考えられる。器体上部＝肩部の窄まりが弱い資料（図10-3）などの形態も、肩部と顎部の一体化に起因するものと推測することもできるだろう。

b-5) 透し孔・沈線文

船岡山1号墳埴輪では必ず巴形若しくは三角形の透し孔を器体部に穿つ。またこれに単線構成の粗雑で簡略的な沈線文を伴う個体も一定数確認できる。透し孔、沈線文ともに口縁部と底部には施さない。もちろん透し孔と沈線文は特殊器台（形埴輪）の最も重要な装飾的属性であって、原則的に特殊壺（形埴輪）にこれを加えることはない。しかし東殿塚古墳（図11-14）等では特殊壺形埴輪に透し孔を穿つ例があり、特殊器台形埴輪と特殊壺形埴輪の中で両者属性の混淆が生じ、透し孔など特殊器台形埴輪の文様を転写した特殊壺形埴輪が出現している⁽³⁾。したがって船岡山1号墳の透し孔とそれにまつわる沈線文の存在は、大局的にこれを特殊壺形埴輪の範疇で捉えることを妨げるものではない。なお透し孔などの文様構成は船岡山1号墳の編年的位置を考察する上で不可欠な要素と考えるので、次節であらためて検討する。

結局、船岡山1号墳埴輪の特異な形態は、特殊壺形埴輪の著しい変容形態と見なさざるを得ないと考える。いささか消去法的な推論ではあるが、この形態を特殊器台形埴輪、朝顔形埴輪に出自すると捉えることはできず、この推論に立ち至った。この変容著しい特殊壺形埴輪由来の器形に特殊器台形埴輪に由来する文様を転写することでいっそうその特異性が高まっている、と理解しておきたい。（大久保）

第4節 特殊器台形埴輪の変容・解体と船岡山1号埴輪

第1項 船岡山1号埴の文様構成 -透し孔と沈線文-

前節の検討結果を簡単に要約しておく。船岡山1号埴輪は極度の変容を遂げた特殊壺（形埴輪）に由来する器体の基本形態に特殊器台（形埴輪）の文様要素、透し孔と沈線文を転写したものである。

それにしても度々言及したように基本形態に限らず、転写された特殊器台形埴輪の文様要素についても変容の度合いは相当に大きい。ここに特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の成立時期との時間的隔たりの大きさが予想されるわけであるが、それを具体的にどの程度に見積もるべきか。他古墳資料と対比して検討したいが、本節ではその前にあらためて船岡山1号埴輪の文様構成 -透し孔配置と沈線文- について確認することから始める。

a. 船岡山1号埴輪の透し孔形態とその配置

船岡山1号埴輪の透し孔は巴形と三角形の二種で、後者では下向き配置と上向き配置の両例がある。巴形透し孔では尾部が肥大化しその先端も鋭利さを失う例が増える（図15-1等）、バランスを欠きほとんどS字形に近い双尾形（図15-3）もある。それに応じるように三角形透し孔も大形化し、全てではないが文様帯幅の半分以上の高さに達する例（図13-1）すら存在する。

尾部を円孔部の右辺に付けその先端を下に向ける巴形透し孔の向きは都月型文様初期形態の箸墓古墳例から元稻荷古墳例まで長く踏襲される。巴形透し孔の尾部位置と蕨手文の取り付け方は深く関係するので、広義の都月型文様が維持される間、巴形透し孔向きの固定は当然ではある。

では船岡山1号埴輪の巴形透し孔はどうだろうか。尾部の位置と向きが判定可能な14例についてみると、驚くべきことに正位置 - 右辺 / 下向きに遵ったものは皆無であった。多くは巴形を右もしくは左方向に90度回転させ、尾部が円孔の下部もしくは上部に取り付ける（図15-2・7等）。またさらに尾部の向きも反転したものが2例ある（図15-8他）。

都月I a・b類文様（春成1984）とそれを踏襲する特殊器台形埴輪の文様帯の透し孔数は一単位あたり巴形1孔、三角形2孔（上下各1孔）で、巴形1に対して三角形2となる。船岡山1号埴資料について破片ベースで巴形と三角形透し孔の確認数を集計 - ただし接合した該当破片は1とした - したところ、巴形透し孔38例に対して三角形透し孔は49例を確認した。もっとも小片が多く、円形基調の透し孔では尾部が残らない例がかなりあるが、透し孔縁辺がある程度残る資料では尾部切り込みの確認例が多いので、上記の集計では円形基調の透し孔は巴形の可能性が高いと判断した。その結果、巴形透し孔1に対して三角形透し孔は約1.3となり、巴形透し孔の比率が明らかに増している。

またそれ以上に重要な点は、二者は一段の文様帯で共存する例はないし、個体レベルでも両者が共存することもない。透し孔の組成と配置は都月型文様のそれが完全に分解している。それに応じるように、三角形透し孔の上向き / 下向き交互配置は必ずしも保たれなくなる（図10-1・4・5など）し、本来は文様帯の中位に穿たれなければならない巴形透し孔が三角形透し孔と同じように文様帯の下端近くに下がる例（図15-6・7など）が多い。

b. 船岡山1号埴輪の沈線文

つぎに沈線文について詳しく検討しておこう。小片を含め篋描沈線文が観察された資料は25

例である。小形の円形基調の透し孔に接する図 15-4 は異様に切り込みが深く、造作に失敗した巴形尾部の先端とみられるので集計から除いた。なおこうした巴形透し孔尾部の粗雑な作りは図 15-5 にも見える。上に挙げた点数からも沈線文の出現頻度が高くないことは明らかだ。

船岡山 1 号墳の沈線文は粗雑で整わないが、一応は直線系と弧線系に大別しておく。上記し

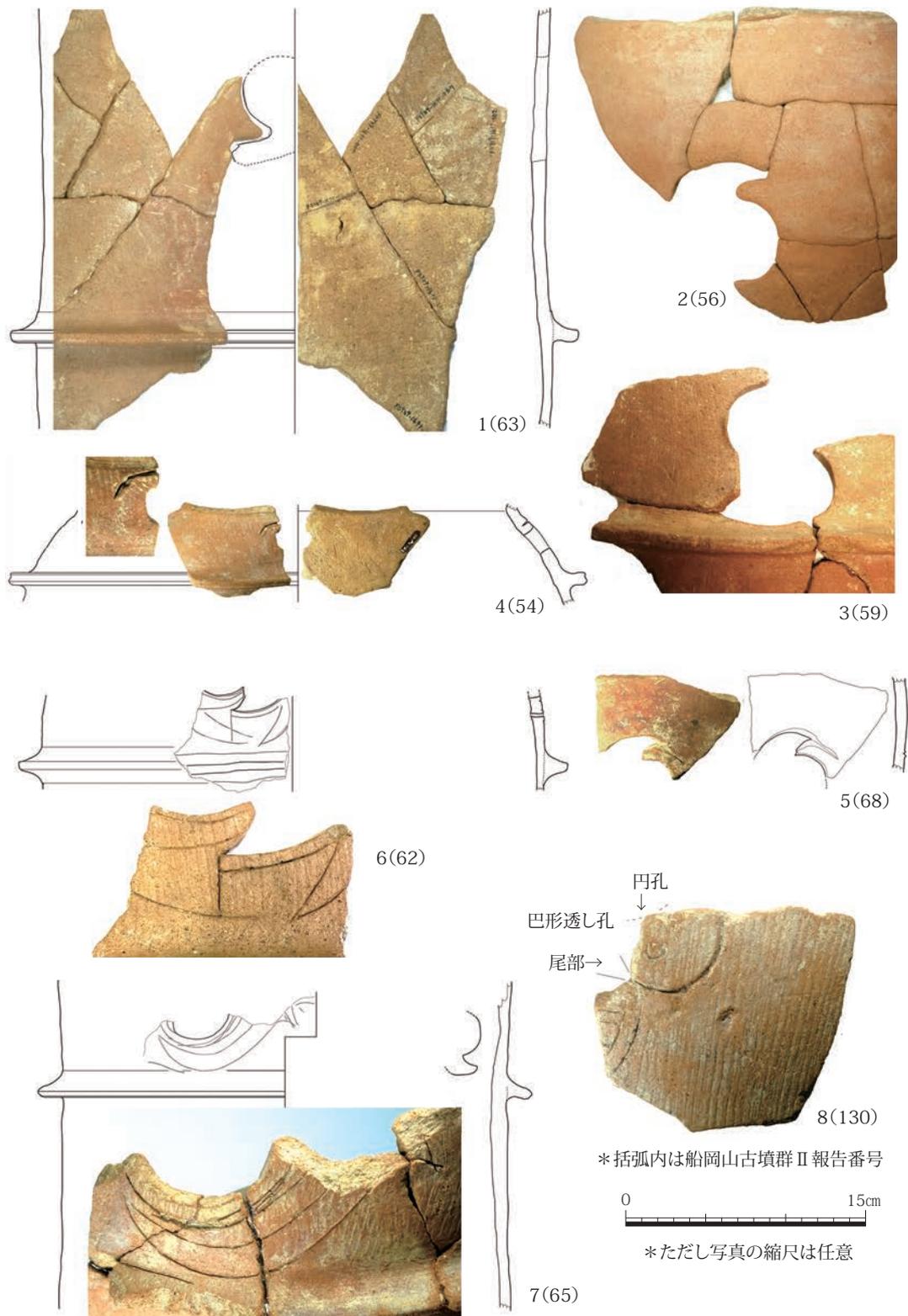


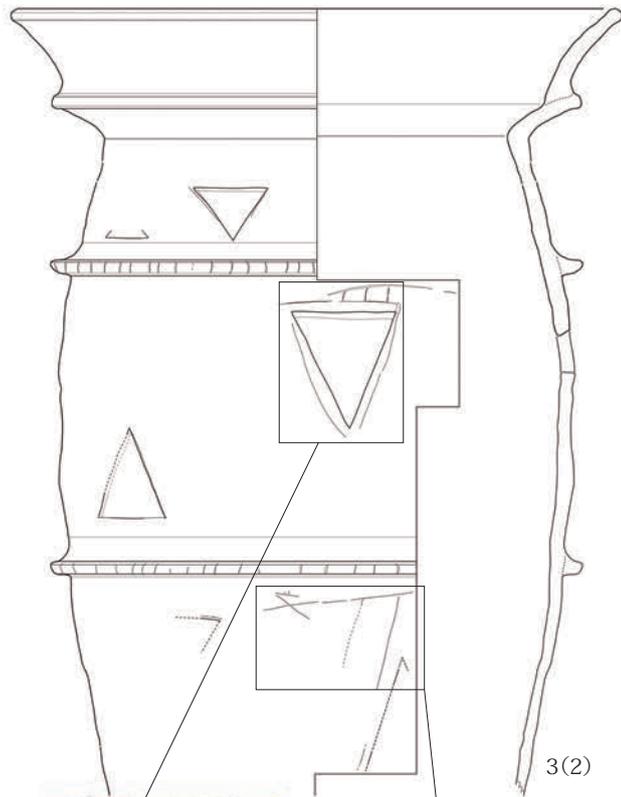
図 15 船岡山 1 号墳埴輪の巴形透し孔と沈線文

た 25 例中、弧線系 6 例、直線系 19 例となる。この二種は明らかに透し孔の形態に対応するので、上記した巴形透し孔と三角形透し孔の数比に留意すると、巴形透し孔では沈線文を省く傾向が相対的に高い、といえる。

直線系沈線文の構図には a : 透し孔外縁に近接した縁取り様、b : 透し孔の間に展開する山形意匠、c : 横線と斜線が交差する構図、d : 多条沈線帯の組み合わせ、の 4 種に一応区分できる。a の一部と d を除き沈線は単線化している。なお直線系沈線文は確認できた限りでは透し孔の穿孔後に加えている。

一応、破片数を挙げておくと a : 8 例、b : 6 例、c : 1 例、d : 5 例、不明 2 例となるが、色調、素地、焼成状態からみて d の諸例は同一個体の可能性がある。なお a と b、また a と c は一つの文様帯で共存する例があり、小片ではこの点はわからない。全体としてまず云えることは直線文系沈線文では三角形透し孔を縁取る、いわば透し孔に付属した補助的な構図が多いことである。これらは広義の都月型文様における沈線文の主眼的な役割を喪失している。

透し孔間に展開する b は二方向の斜線を交互に配してそれぞれの端部をつなぐだけの



*括弧内は船岡山古墳群Ⅱ報告番号

0 15cm

*ただし写真の縮尺は任意

図 16 船岡山 1 号墳埴輪の直線系沈線文

単調な構図で都月型文様の構図に積極的に結びつけることは困難である。a と b の共存例では、ラフではあっても透し孔に沿って外縁に加える a に対して b の構図はしばしば透し孔の配置と整合せず、山形意匠が孔の斜辺に接して途切れてしまう（図 16-1（図 10-4）・2）。都月型文様でも箸墓古墳資料等に少数例、斜線帯が三角形透し孔斜辺に接して終わる構図がみられるが、船岡山 1 号墳埴輪では全体がごく単純な構図であって、それとの積極的な関係を推測することはできないし、この整合性を欠いた山形意匠の積極的な構図上の意味を汲み取ることも困難である。

c（図 16-3）は中位上段と中位下段に単純な構図だが、他資料と違う沈線文がある。前者は文様帯の上部にある下向き三角形透し孔（a 縁取り沈線文を伴う）の上辺側に彎曲したラフな横線があり、それと透し孔上辺の縁取り沈線の間をわずかに右に傾く単線 3 条が並ぶ。後者はやはりラフな横線があり、そこから上向き三角形透し孔の左辺に沿うように間隔を空けた右上がり沈線 2 条を伸ばす。前者は都月型文様で三角形透し孔底辺にまま取り付く沈線帯を想起させる構図である。後者もまた巴形透し孔＋蕨手文の間を充填する交差斜行線帯のごく一部を図案化したものと見なせなくもない。いずれにせよ文様帯の全貌は明らかではないし、沈線文それ自体、極度に単純化しているので詳細な検討はもとより難しい。しかし他の沈線文構図に比べればわずかながらも都月型文様との関連を推測させうるので、あえてその可能性を示しておく。

d のうちもっとも構成がわかる破片（図 17-1）でみると、方向を違えた 10 条前後の斜行沈線を連結する複合鋸歯文に類似した構図であるらしい。この破片の左辺は三角形透し孔となる。別の小片（図 17-2）でも同様の並行沈線がやはり三角形透し孔に接している。また左上がり並行斜線帯の右端の無文部を経て一本の垂線をみる破片（図 17-3）もある。以上から d は三角形透し孔の側方にワンポイント的に加えた複合鋸歯文的意匠とみられる。線間は詰まっているが、文様単位の高さは 10 cm 強、幅は 8 cm を越える大柄なものとなりそうだ。また一定の間隔を空けて透し孔の配置に合わせてそれごと加えたものかもしれない。いずれにしても都月型文様の直線文系沈線帯の構図とは結びつかず、他に出自を求めざるを得ない。

続いて弧線系沈線文について確認する。断片的な資料が多く、大半は単に透し孔外縁を巡る弧線の一端が観察できるにすぎない。その中で多少なりとも構図を窺えるものに図 15-6～8 の 3 点がある。これらを検討しよう。なお直線系沈線文の幾つかで観察された透し孔の穿孔による沈線の潰れや部分的な切除は、弧線系沈線文では確認できず、施文手順が逆転している可能性がある。一点ずつ検討しておこう。

図 15-7 資料は透し孔 2 孔のそれぞれ一部が残る。一方は下方で左に向く巴形透し孔の尾部がほぼ残るが、沈線文はない。もう一方は透し孔円孔の一部が残るだけだが、他方の配置を勘案すると、残部は肥大化した巴形尾部

の外縁と思われる。沈線にはこの透し孔尾部外縁に沿う様に配された弧線 3～4 条が見える。うち 1 本は書き直しを重ねておりよくわからない。この弧線群は左方で収束するらしく、下方の 2 本は破片左端近くで接する。また下方の 2～3 本は次第に透し孔

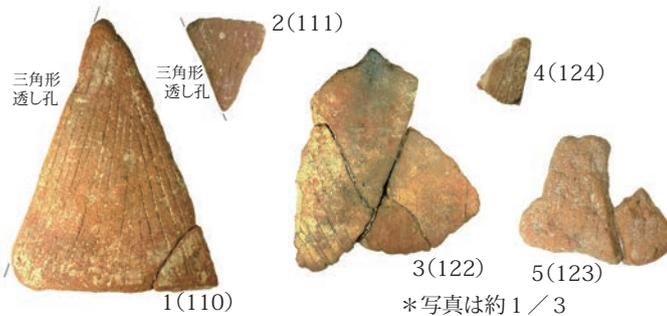


図 17 船岡山 1 号墳埴輪の複合鋸歯文様沈線文

外縁から逸れるように右上方に延びる。さらにこの右方には右下に向かう不揃いな3～4条の単線がある。おそらく弧線に接すると思われるが、接合部は失われており確定はできない。

この弧線群は蕨手文に由来すると考える。その場合、破片右辺の粗雑な短線群は蕨手文に取り付く斜線帯に相当するかも知れない。とはいえ本資料は都月型文様蕨手文の配置と比べ、重大な逸脱があることも間違いない。それは2点ある。第一点は巴形透し孔の向きと蕨手文の展開方向だ。上に述べたように当該する透し孔は、円孔部の下方で左向きと復元できる。都月型文様蕨手文は透し孔尾部の向きに応じて時計回りに透し孔の外方を3/4回転以上は巡る。しかし本資料では破片左端から始発する弧線は逆時計回りで、早々に透し孔外縁から逸れてゆく。もう一点は蕨手文の始発位置である。巴形透し孔尾部の付け根付近から発するのが都月型文様の通則だが、本資料は尾部の外縁から始まる可能性が高い。

図15-6ではごく薄く細いものであるが、左辺の上から三段目に左上から右下にわずかにカーブを描いて延び、下方弧線の右端に近づく線がある。沈線文の下書き線かもしれない。

これを加えると右端で終息する2条一組の弧線2つと、逆に向いて左端で終息する2条一組の弧線、近似した構図の計3組の弧線が主たる構成で、これに透し孔尾部外縁と併走する弧線1条、透し孔尾部先端から垂下した直線が加わる。左上の弧線帯だけを取り上げると、蕨手文始発点のように見えなくもないが、同形の3組を素直に解すならば、巴形透し孔尾部の輪郭を図案化した単位と見なすべきだろう。つまり本資料の沈線文は巴形透し孔を巡る蕨手文の構図が着想にあったとしても全くそこから離れた別の構図に至ったものとしきれない。

図15-8は、破片左辺に巴形透し孔の尾部先端をかりうじてとどめ、また左辺上端に残る縁辺痕跡から、下辺に右向きの尾部を取りつけた巴形透し孔を復元した。

したがって、この特異な沈線文は透し孔の右下に位置する。尾部先端付近から二つの弧線が始まる。一方は円孔部に向かい、その中にラフな小円を描く。

下方に延びるもう一方は二重線で左側に3本の横線がある。小片で構図の全体はわからないが、都月型文様に関連する要素は見いだせない。

結局のところ船岡山1号墳の弧線系沈線文は、透し孔に取り付くという一点で通じるが、上記した図15-6・8のように関連を辿りにくい別種の構図が考案されている。一方、図15-7は逸脱と変容の度合は著しいのだが一応は都月型文様の蕨手文に由来するであろうことが推察できる。

第2項 特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の変容と船岡山1号墳埴輪

「埴輪の起源」(近藤・春成1966)において、最初の円筒埴輪(都月型埴輪)として設定された特殊器台形埴輪は、同論文中でも都月坂1号墳資料がa～c類と分類されたように、当初から一定の変異類型が存在することが知られていた。さらに元稲荷古墳や箸墓古墳等の類例が増える中で特殊器台形埴輪そのものの細分編年が俎上にのぼり、都出比呂志氏による元稲荷古墳資料の検討(都出1971)を嚆矢に、春成秀爾氏(春成1984)、宇垣匡雅氏(宇垣1984など)、高井健司氏(高井1987)、安川満氏(安川1991など)をはじめとして精緻な検討と編年案の提示が進められてきた。個別資料の編年的位置付けについて必ずしも諸氏の見解は一致していないが、都出氏の見通しを追認する形で、元稲荷古墳埴輪を文様構成などの変容が進んだ段階と位置付けることは共通理解となっている。

また奈良県東殿塚古墳埴輪が明らかになり、特殊器台形埴輪の形態や文様構成を部分的に保ちつつも、既知の諸例に比べて著しく変容した様相もまた関心を集めた。たとえば宇垣匡雅氏は東殿塚古墳埴輪を特殊器台形埴輪とは区別して「特殊器台形模倣円筒埴輪」とする（宇垣 2013）。

上記した都出比呂志氏の元稲荷古墳資料の考察ではその編年的位置の検討にとどまらず、特殊器台形埴輪から（普通）円筒埴輪に至る経過を「埴輪の起源」で想定された以上に長期的で複雑な過程として捉え直そうとするものであった。これは円筒埴輪の型式変化の認識とも連動する理解であった。東殿塚古墳埴輪を特殊器台形埴輪の一類型と位置付けるか、あるいはそこから除外するかと云った評価とは別に、箸墓古墳埴輪から都月坂 1 号埴輪までの間、微細な変化を生みつつも保持されてきた文様構成などが、元稲荷古墳で指摘された変容の後も、解体と変容の度を強めながらなお存続したことを示すと考える。

本項では、変容が始まり、あるいは著しく進展し、またはもはや片鱗のみとどめる事例若干を示して、それらと対比して船岡山 1 号埴輪の位置づけを検討する。元稲荷古墳、東殿塚古墳に加え、中山茶臼山古墳と玉手山 3 号墳の各資料を挙げ、船岡山 1 号埴輪と比較する。

a. 京都府元稲荷古墳（図 18）

元稲荷古墳で全形が復元された 2 個体（向日市教育委員会 2014）のうち、大形の個体（図 18-2）は頸帯を含め七段構成を保ち、やや間隔を空けているが巴形透し孔と上下方向の三角形透し孔を第二、四、六段に穿つ。しかし口縁立ち上がり部の鋸歯文と筒部の沈線文を省略する。もう一方の小形の個体（図 18-1）では筒部に沈線文を伴う。段構成と透し孔の配置は他と異ならない。しかし本来は間帯である第五段に沈線文がめぐり、逆に二種の透し孔を配した第六段では沈線文を欠く。第二段では尾部が伸び形の崩れた巴形透し孔に蕨手文が取り付き、巴形透し孔の間には右上がり斜線帯 3 組とそれを左上がり斜線帯で繋ぐ。ただし斜線帯の条数は 2 条構成が多い。第四段は透し孔の間隔が狭くその点では古風だが、巴形透し

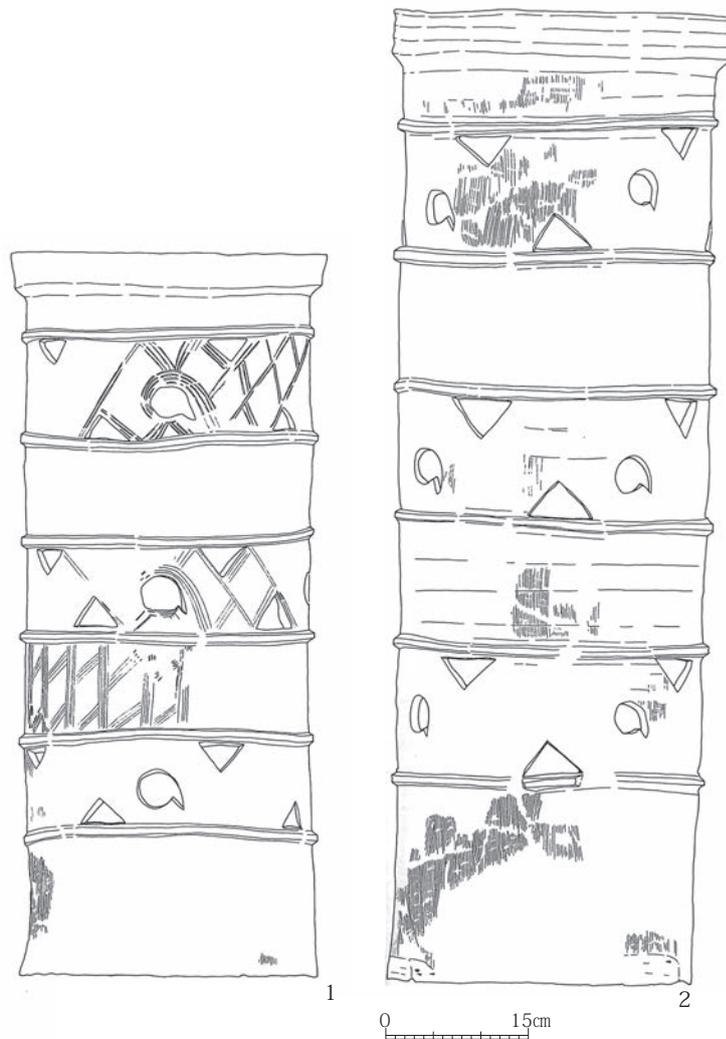


図 18 元稲荷古墳埴輪

孔間の斜線帯は左上がりのそれが優位となる。また間帯（無文帯）であるべき第五段では透し孔と蕨手文を欠いて斜線帯だけを施す。ここでは右上がり斜線帯が起き上がってほぼ直立し、その間を右上がり斜線帯で繋ぐ。また第六段は上に述べたように巴形と三角形透し孔を正しく配置するが沈線文を欠く。間帯相当位置の文様帯は箸墓古墳にもあるが、その場合は直上文様帯とは異質な複合鋸歯文などを施す。しかし元稲荷古墳図 18-1 では第四段に連続する第五段は都月型文様に由来する沈線文の一部を抽出しており、特殊器台形埴輪の文様帯が分解する様と見たい。

このように元稲荷古墳では沈線文を省略した個体が存在し、また文様帯構成の変容、そして部分的には蕨手文帯+斜線帯という基本構成の分解が生じている。

b. 奈良県東殿塚古墳

東殿塚古墳では特殊器台形埴輪、円筒埴輪に加え、特殊壺形埴輪、朝顔形埴輪が伴う。判明した限りの円筒埴輪口縁部は端部を短く屈折させるか、その直下に接して突帯を加える形態である。器形はもちろん、文様および文様帯構成の点で都月型文様からの逸脱は著しい。また特殊器台形埴輪文様帯も分解が進んでいる。各資料からその様相を見ておく。

図 19-1 は筒部に鱗部を付した点で特殊器台形埴輪からは大きく逸脱する。口縁部は立上り部が外反気味に強く開き、頸部との接点の屈曲は弛緩するがそれを突帯で代置する。筒部は6段構成で頸帯を省く。間帯は文様帯と同程度の高さを具えるまでに成長するが、文様帯と間帯の交互配置は保つ。しかし文様帯の構成は大きく崩れている。上段の文様帯は尾部の発達した大形の巴形透し孔に極小形の三角形透し孔からなるが沈線文を省く。中段は三角形と長方形の透し孔を穿ち、都月型文様の斜線帯に由来すると思われる交差沈線帯がその間を充填する。下段では三角形透し孔を主体としてそこに一孔だけ巴形透し孔が加わる。沈線文は中段のそれに通じる。この個体では都月型文様の分解が進み、文様帯の構成諸要素の一部が省かれるか、抽出・分置される。

図 19-5 は朝顔形埴輪と思われるが器体上部を欠失する。残存する二段のうち上の段には巴形透し孔のみを穿ち、三角形透し孔はない。複線構成の沈線文では透し孔に取り付く蕨手文とやや乱雑に配された斜線帯およびそこから派生する弧線からなる。都月型文様を極度に変容した姿である。なお下段には円形透かし孔のみを穿つ。

特殊壺形埴輪（図 11-14）では内傾して延びる頸部と肩部から張り出した体部に2条の突帯を具え、壺の体部形態をそれなりに擬えるが、体下部は完全に筒形化し、特殊器台形埴輪・円筒埴輪と異ならない。頸基部相当位置に沈線文は伴わないが、大形の巴形透し孔を配している。また図 19-4 資料は頸部相当位置に円形基調の透し孔を穿ち、外周に沈線が巡る。図 19-3 資料は頸部相当位置に円形基調の、肩部相当位置に三角形透し孔を配し、やはり特殊器台形埴輪の文様要素を特殊壺形埴輪に転写した形となる。

前節で触れた初期的な朝顔形埴輪にも都月型文様の断片を垣間見ることができる。これらは既に触れたように器台形口縁は断面鍵手状の特異な突帯にその残影をとどめ、器体をわずかに二段に圧縮して文様帯も一段構成となるが、文様帯には都月型文様のかすかな片鱗をみる。図 11-12 資料は尾部の発達した大形の巴形と長方形の透かし孔を配し、その間に構図不明な粗雑な沈線文がある。図 19-2 資料では上向き三角形と巴形透し孔を配し、巴形透し孔には3条構成の蕨手文がめぐる。しかしここでは下向き三角形透し孔と斜線帯が省かれている。

c. 岡山県中山茶臼山古墳

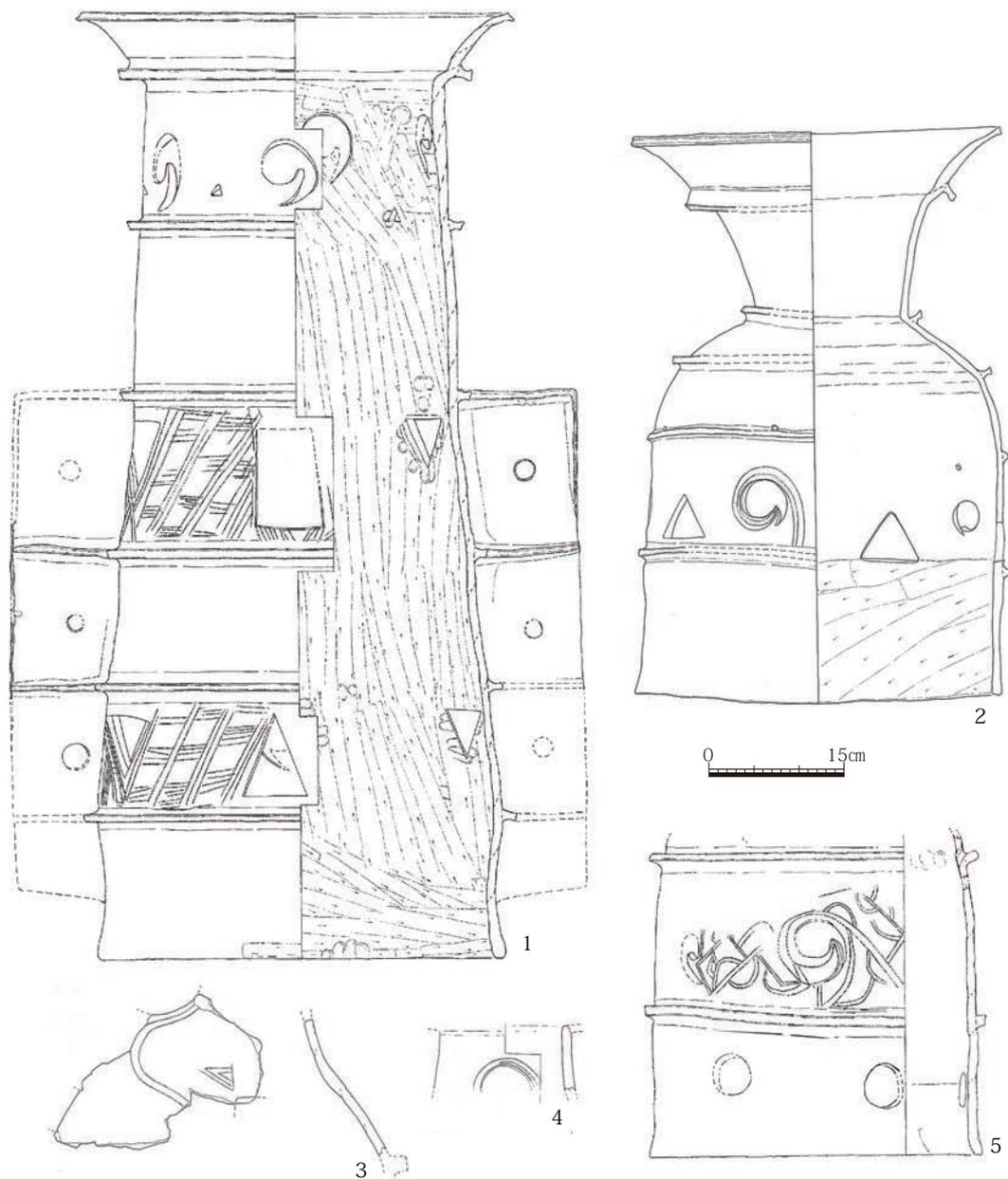


図19 東殿塚古墳埴輪

幾度かの機会に特殊器台形埴輪と壺形埴輪が採集されており、近年、宮内庁書陵部がそれらを図化し公表した（陵墓調査室 2011）。別に伝中山茶臼山古墳出土とされる埴輪の拓本も過去に公表されている（近藤 1984）。これらから中山茶臼山古墳埴輪の様相を確認したい。

採集資料中、無文片の割合が多いことから円筒埴輪が共伴する可能性が指摘されている（前掲陵墓調査室）。特殊器台形埴輪の口縁部は頸部と立上り部が著しく矮小化する（図 20-1）。器体には透し孔と沈線文を施す。突帯を挟みその上下に連続して施文する例（図 20-2・4・5・8）がままあり、文様帯と間帯の区分解消が進んでいるらしい。円形基調の透し孔が多く、その中には確実に巴形を含むが、全てそうなるかは不明だ。その他、方形と三角形の透し孔を伴うが、前者は少ない。全体として透し孔はかなり大形化している。各種透し孔の配置関係はわからない。

沈線文は大半の特殊器台・特殊器台形埴輪とは違って2条一対例が多く、3条以上の多条化した沈線帯は少ない。円形基調の透し孔に外縁に取り付く例（図 20-3・6・9）も基本は単線で、（図

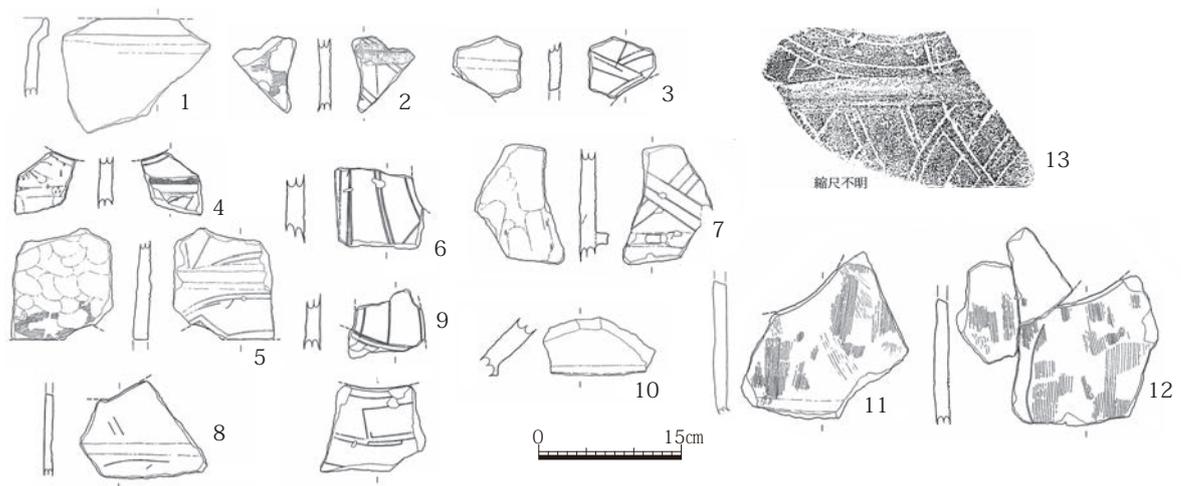


図 20 中山茶臼山古墳埴輪

20-6・9) では間隔を空けて単線ないし複線の弧線が併走し、この間を繋いで交差する沈線が加わる。これは伝中山茶臼山古墳出土埴輪(図 20-13)の突帯上部の文様帯沈線文にも通じる。文様の構図は不明だが、少なくとも蕨手文様やS字状文を推測させるものではない。図 20-7 は都月型文様蕨手文間の交差斜線帯に近いが、そうした構図は全般的に少ない。古くに採集された伝中山茶臼山古墳埴輪にややカーブを描き斜行する単線ないし複線の交差が連続する構図がある。

文様構成の復元は難しいのだが、上記した諸点から仮に都月型文様と関連づけるとすれば、蕨手文が欠落、片鱗をとどめるとはいえ(交差)斜線帯の変質など総じて変容の度合いは大きく、もはや都月型文様からはかなり外れた姿を示している。その一方、併走する複数の弧線帯がありその間に挿入された交差沈線は、各線帯の構成条数が著しく減るなど差異が大きいが、複数の併走する弧線帯と交差する弧線ないし直線という構図は宮山型文様にも通じる内容と云えなくもない。いよいよ文様構成の理解は難しい。また文様帯と間帯の区別の曖昧化やひどく簡略化した口縁部形態も同様である。

壺形埴輪は二重口縁形態で口縁の屈曲部分を突帯に代置した例がある(図 20-10)。また肩部片と推測されている破片から立上りのきつい筒状に近い体部形態が想定され、壺形埴輪も形態面の極度の変容が示唆される。また壺形埴輪の肩部片と推定された破片には大形の透し孔が穿たれており構図は不明ながら粗雑な沈線文(単線)も施されている(図 20-11・12)。

d. 大阪府玉手山3号墳

玉手山3号墳では東殿塚古墳特殊器台形埴輪(鱗付)に似た口縁部形態が推測され、こうした器形が一部に残ると見られるが、沈線文と透し孔が組み合った文様帯の衰退は著しい。わずかに下向き三角形透し孔の左辺に併走する3条沈線をとどめる破片一点が知られる。その一方、朝顔形埴輪では東殿塚古墳の器台形口縁を擬えた断面鍵手状突帯に近似した破片がある。壺体部相当位置の破片に円形基調の透し孔が穿たれ、別の破片から透し孔が巴形を呈する可能性が推定されている。これらの破片から安村俊史氏は朝顔形埴輪を復元(図 11-13)している(安村 2001)。

上記したように円筒形埴輪の文様(沈線文)出現率はかなり低いとみられ、また鍵手状突帯は屈曲部を突帯で代置する形態に変化しており、東殿塚古墳より後出する可能性を考えておきたい。

この他、愛媛県相ノ谷1号墳でも鍵手状突帯を付した朝顔形埴輪が知られる(愛媛県歴史文化

博物館 2007)。ただし相ノ谷 1 号墳円筒埴輪は器台形口縁が近接突帯形態に変化する。器体に比較的多くの沈線文を施すが、鋸歯文を基調とする単純な構成である。文様帯と間帯の区別は失われ、また透し孔形態も長方形にほぼ統一されている。玉手山 3 号墳より後出する可能性を含むと考える。山内英樹氏が指摘（山内 2007）するように器台形埴輪と壺形埴輪の初期的な結合形態の特徴を保持する末期的な事例であろう。

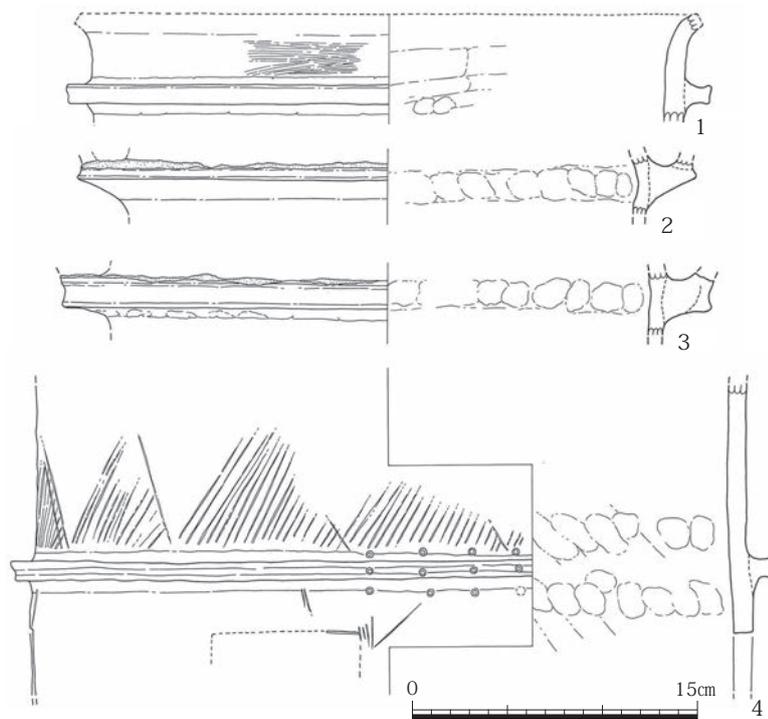


図 21 相の谷 1 号墳埴輪

第 3 項 特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の変容・解体と船岡山 1 号墳埴輪の位置

特殊器台形埴輪の変容は、早くから指摘されていたように元稲荷古墳埴輪において明瞭に確認できる。口縁部文様（鋸歯文）の消失、文様帯-間帯関係の揺らぎと都月型文様の分解＝部分要素（交差斜線帯）の抽出などが生じている。さらに東殿塚古墳では形態面の変容がいつそう進展することに加え、文様構成の分解・分置が一層進む。そして特殊器台形埴輪と（特殊）壺形埴輪の関係ですら重大な変化が生じる。二器種の結合形態および形態面を含めた属性の融合である。前者は朝顔形埴輪の創出を意味し、後者では体部の筒形化と特殊器台形埴輪の装飾要素を移植された（特殊）壺形埴輪の生成である。中山茶臼山古墳埴輪では東殿塚古墳のそれと同じ様に特殊器台形埴輪の装飾要素-透し孔と沈線文-を転写した（特殊）壺形埴輪が存在し、同時に特殊器台形埴輪では口縁部の器台形形態の形骸化と文様構成の著しい変容が推測される。

なお東殿塚古墳の初期的朝顔形埴輪に近似した形態の共伴が推測される玉手山 3 号墳埴輪は、形態と文様構成の面で特殊器台形埴輪から変容（と云うより離脱）が一步進んだものと思われる。

船岡山 1 号墳埴輪は、変容・解体の到達度という観点からみれば、東殿塚古墳埴輪や中山茶臼山古墳埴輪に近い位置に充てることことができる。ただし形態面の極端な変容、そして文様要素-透し孔と沈線文-の略化・変容の様に留意すれば、もう一步、変容と解体が進んだ様相と見ておきたい。現時点では、東殿塚古墳、中山茶臼山古墳を越えがたい上限と見なし、玉手山 3 号墳との並行関係あるいは東殿塚古墳等と玉手山 3 号墳の間に船岡山 1 号墳を位置付けたいと考える。

ただし、この見通しは関係古墳埴輪を一つの型式組列の上に配した所見ではなく、特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の変容・解体の度合いから推測した点で曖昧さを残してはいる。（大久保）

第5節 高松平野域における船岡山1号墳の位置

最後に高松平野域資料と船岡山1号墳埴輪を比較しておきたい。ここで挙げるのは鶴尾神社4号墳装飾壺、稲荷山姫塚古墳埴輪、高松茶臼山古墳⁽⁴⁾埴輪である。いずれも加飾性が強いものである。後者埴輪は以下で述べるように船岡山1号墳埴輪と同じ型式組列上に配することができるものであるが、前二者はそうではない。また同じ石清尾山古墳群に帰属する積石墳墓で時期的にも近い鶴尾神社4号墳と稲荷山姫塚古墳とでは意外なほどに使用埴輪の様相が異なる。石清尾山古墳群の性格を考察する上で興味深い事実であるが、ここでは船岡山1号墳埴輪との対比に限定する。

a. 鶴尾神社4号墳装飾広口壺

鶴尾神社4号墳では香東川系の単広口壺多数を墳丘外周に配列したことが知られる。それと共に竪穴式石槨周辺と木蓋の腐朽で槨内に落ち込んだ細頸壺など小形器種類が検出されている。そして竪穴式石槨および周辺では少なくとも4個体の特異な装飾壺を伴う。川部浩司の再実測と詳細な復元的検討(川部2007)が既に行われているので、その成果に依拠しながらあらためて検討を加えてみる(図22)。

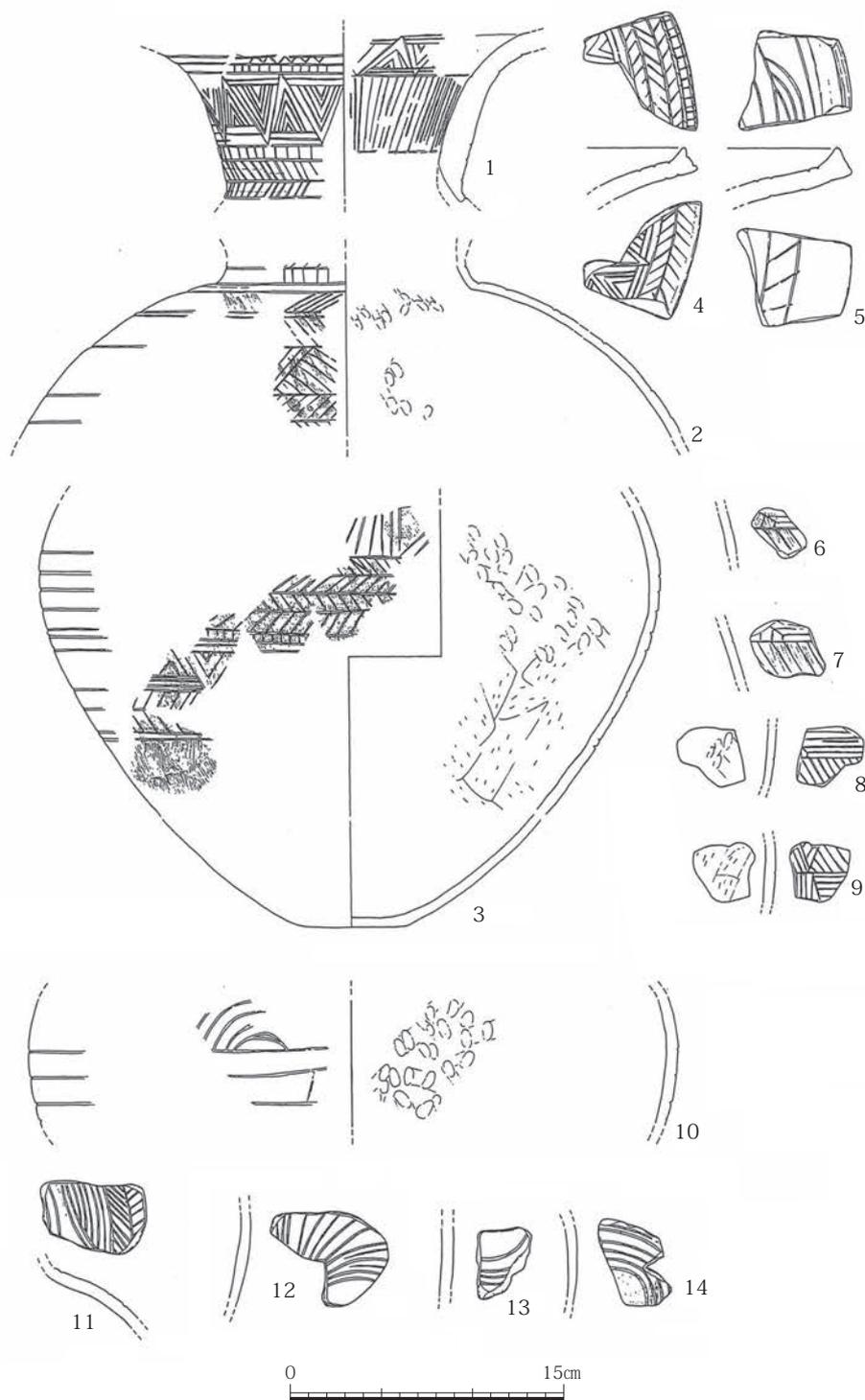


図22 鶴尾神社4号墳装飾壺

装飾壺はいずれも中形広口壺とみられる。しかし墳丘に並べた香東川系のそれとは異なり、外反を強めつつ頸部が立ち上がる、丸井古墳壺形埴輪などに近い形態である（図 22-1）。

この広口壺の口頸部から体部中位にまで緻密に沈線文を施す。大きく開く口頸部では内外面に文様が展開する（図 22-4・5）。また沈線文は川部が指摘するように直線系と弧線系-川部は曲線系と表現したが、ここでは弧線系と呼ぼう-の二者がある。後者は少数派であるらしい。前者の文様は比較的細かく水平に重ねた沈線の間を斜行もしくは直交する短線を充填する構図が大半を占める。水平沈線で区分された段毎に斜行線の向きを換えた綾杉文と同一段の中で斜行線群の方向を転換する複合鋸歯文が多い。またやや複雑な構成で入れ子状に重ねた山形文（図 22-1・3・4）が上下に反転しつつ横に連続する構図がある。

弧線系文様は少なく構成を捉えがたいが、重弧文を基調に内部を直線もしくは外周の円弧とは対向方向の並行弧線で充填する構成がみられる（図 22-11）。しかしこの文様単位の意匠は直線文系の複合鋸歯文や入れ子状山形文からさほどかけ離れたものとはいえない。

施文範囲の広さと構成の緻密さが特徴といえるが、総じて、限られた個々には比較的単純な図文を横方向に繰り返した文様帯を執拗に重ねた構成である。さほど複雑なものではない。川部が指摘しているように特殊器台・特殊器台形埴輪文様とはおよそ異質なものと筆者も考える⁽⁵⁾。

b. 稲荷山姫塚古墳埴輪

基本形は筒形の器体上部に二重口縁を取りつけるものである。脚部は裾が強く張った脚台をもつ形態（図 23-7～9）と、単純に筒形のまま下端に至る形態（図 23-10）の二者がある。前者、脚台の内湾気味に強く開く裾部とそこから続く屈曲部の形状は、二重口縁部の相当部位のそれとは明確に分別でき、かつ口縁部に比べて総じて分厚いことから、こうした頑丈な脚台の存在は間違いない。また検出破片数から前者が多数派を占めることも確実である。

口縁部は強く屈曲して一旦内傾した後に外反して立ち上がる形態（図 23-1）と、外反しつつ短く開く形態（図 23-2・3）の二種がある。いずれも円筒部から外反して開き、口縁屈曲部に至り（図 23-1・3・4）、器体上端と口縁頸部の間に明瞭な屈曲点をもたず、特殊器台・特殊器台形埴輪野相当部とは異なる。口縁立ち上がり部には複合鋸歯文を加える例（図 23-1～3）が多い。

残念ながら今のところ器高を復元する材料を欠く。円筒部に透し孔と突帯があるが、どちらも出現頻度はかなり低いと思われる。透し孔には大振りで丸窓風（図 23-5・13）と小円孔（図 23-11）があるが、方形ないし三角形透し孔の存在は定かでない。突帯には2条を接続して貼付するもの（図 23-14・15）と、そうではないもの（図 23-6 等）とがある。また上面に刻み目を施した突帯の出現頻度はかなり高く報告破片数の約8割に達する。突帯片がかなり少なくかつその中に接続形態を含むことを考慮すれば、突帯を以て筒部を数段に分節し、文様帯を割り付ける特殊器台・特殊器台形埴輪とは文様構成は異なると思われる。図 23-5 資料文様帯の遺存部は約 15 cm の長さがあり、一部が残る丸窓風の大形透し孔に留意すれば少なくとも 20 cm 近くには達するだろう。長さ 17 cm を越える無文部片（高松市教委報告図 5-13-13）もある。また突帯を挟み上下に文様帯が続く例（図 23-6）もある。

筒部の沈線文は直線系でその意匠には複合鋸歯文（図 23-5）、横走綾杉文（図 23-6）がある。その一方、数少ない透し孔は円形基調で沈線文の意匠とは整合しない。また鶴尾神社 4 号墳の装飾壺にあった入れ子状山形文を簡略化した意匠（図 23-11）も見られ注意される。筒部が発達

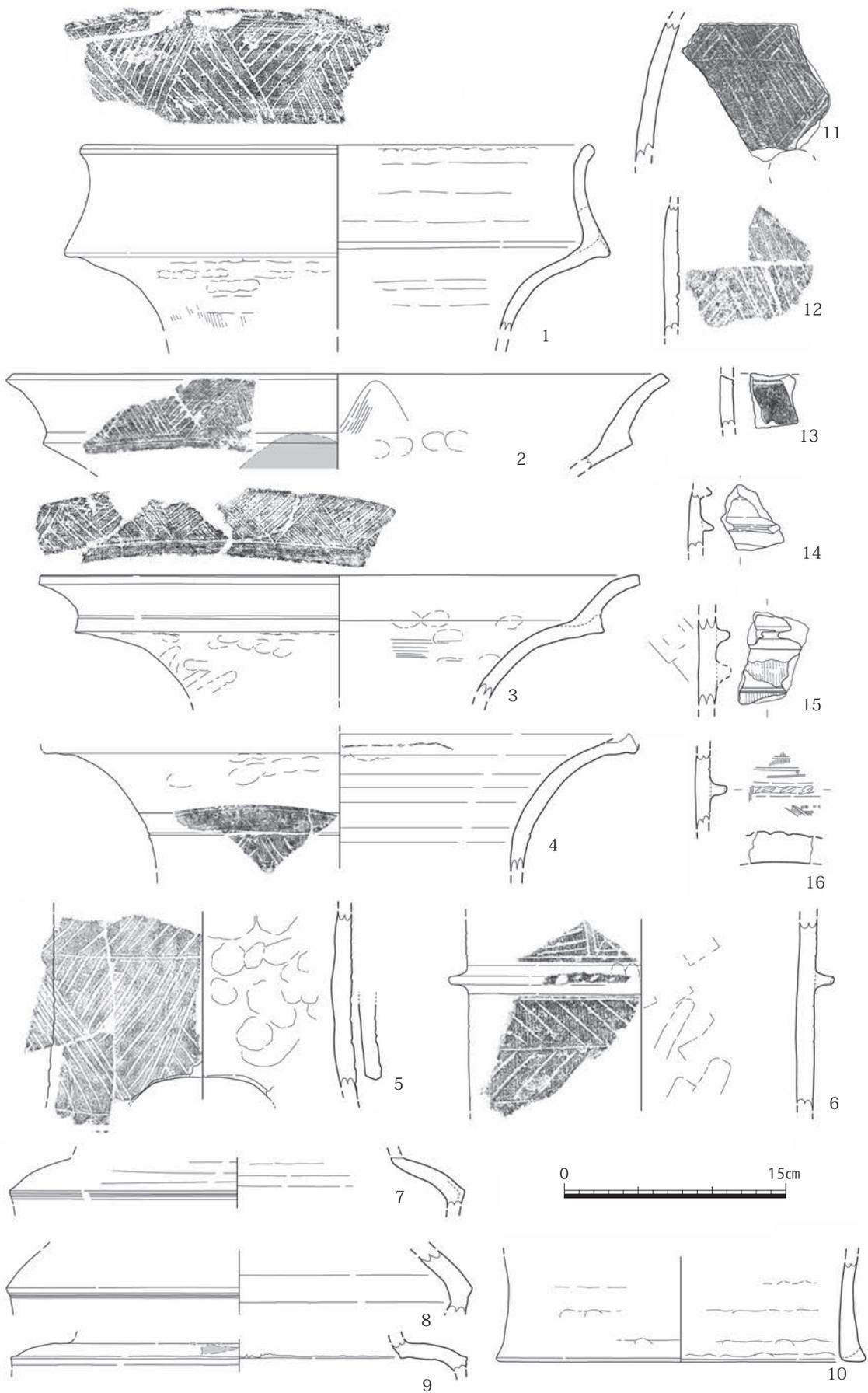


图 23 稻荷山姬塚古墳埴輪

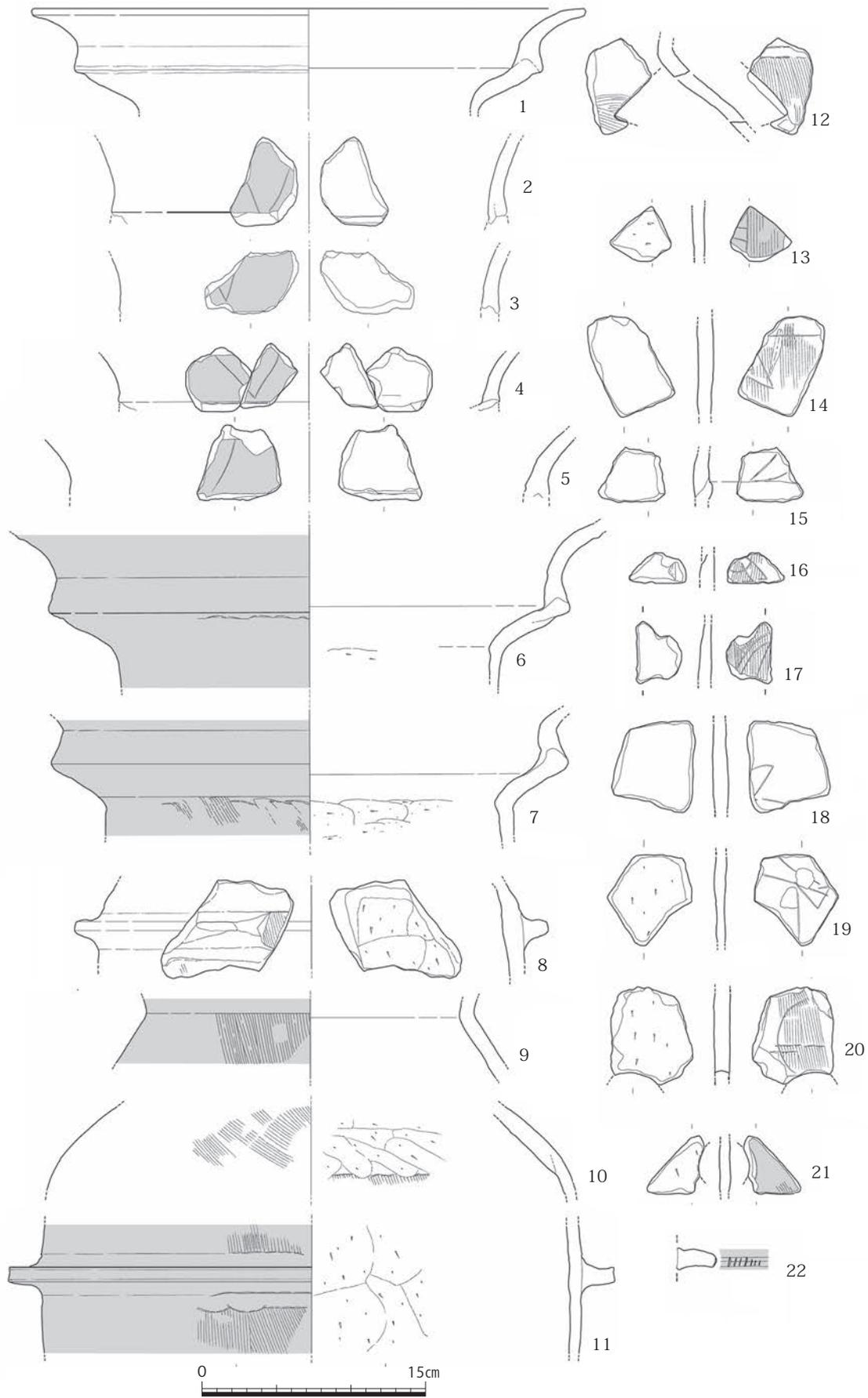


图 24 高松茶白山古墳埴輪 (1)

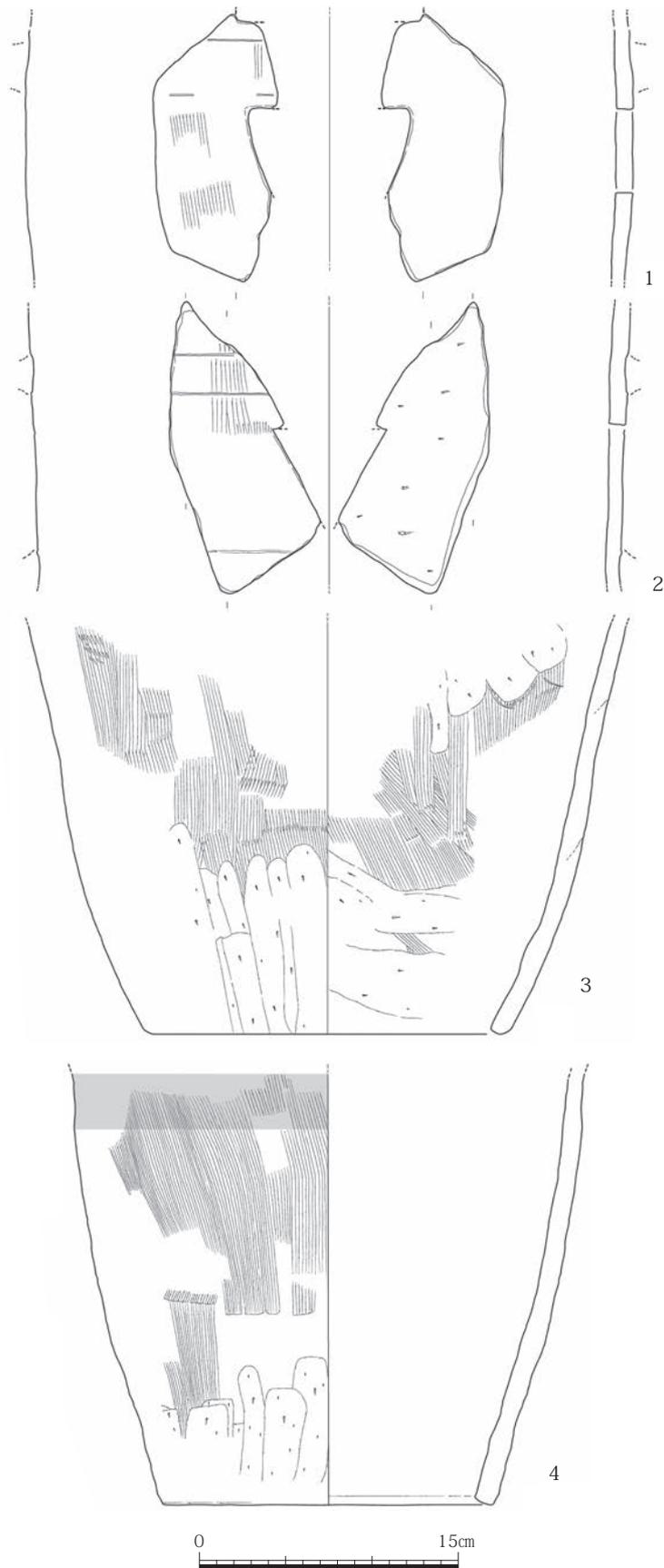


図 25 高松茶臼山古墳埴輪 (2)

した器台形を呈するが、総じて特殊器台形埴輪とは異質である。

c. 高松茶臼山古墳埴輪

高松茶臼山古墳埴輪は船岡山1号墳埴輪の基本形態に近似する。立上り部が強く外反する口縁部形態(図24-1~7)は、船岡山1号墳に比べて鈍化するが、やはり器体上部は窄まって口縁部に接合(図24-7・9・10)し、器体下端も窄まる(図25-3・4)。これを無理に器台形円筒埴輪の組列に置く必要はない。器体中位の突帯間隔は判明する限りで10~14cmだが、底部は少なくとも24cmと一際長い(図25-3・4)。この点も船岡山1号墳埴輪に通じる。貼付条数は不明だが、鏝状を呈し突出度は極めて高い(図24-8・11)。船岡山1号墳で約1/3に達した刻目突帯がここではごく例外的となる。報告書で図示された突帯は27点あるが、このうち刻目突帯は1点だけだ(図24-22)。

透し孔には三角形(図25-1・2)と円形基調(図24-20・21)の二種が確認できる。しかし後者が巴形を呈する徴証はない。配置は不明だが、三角形透し孔を穿った肩部片がある(図24-12)。また構図は不明ながらラフな単線構成の沈線文が認められる。器体のそれでは緩い2本の弧線が一端で接する鋏状の図文が散見される(図24-14・15・17~19)。船岡山1号墳埴輪に一例似た構図がある(図15-6)。弧線系沈線文の一部(図24-20)もみえるが、やはり構図

は不明で透し孔と組み合うものではない。また杵線のみで内部を充填する並行線を省くが、口縁立上がり部にラフな鋸歯文を施す例がある。ただし杵線のみで内部を充填する並行線を省く（図 24-2～4）。口縁部の沈線文は船岡山 1 号墳にはない。

以上の基本形態と文様（透し孔と沈線文）点から、高松茶臼山古墳埴輪は船岡山 1 号墳埴輪の形態と文様が弛緩した後継的位置にあると考える。ただし口縁部のラフな鋸歯文は船岡山 1 号墳埴輪に由来せず、この点に留意すれば単なる退化形態というだけでは十分ではない。

d. 高松平野域前期古墳の中の船岡山 1 号墳、そして派生する検討課題

必要に応じて、これまでに述べた点にも触れつつ、船岡山 1 号墳の編年的位置について述べる。香東川系広口壺に発する壺形埴輪の形態変化を指標として鶴尾神社 4 号墳→稲荷山姫塚古墳→猫塚古墳の先後関係を組める。（図 26）。一方、高松茶臼山古墳埴輪は、特殊壺形埴輪の著しい変容形態である船岡山 1 号墳埴輪の後続形態と解され、船岡山 1 号墳→高松茶臼山古墳の時間的關係が設定できる。

では前者の組列と後者のそれをどのように関係づけることができるだろうか。前者、鶴尾神社 4 号墳裝飾壺および稲荷山姫塚古墳の特異な器台形埴輪には山陰地域の裝飾壺や円筒形土器（器台）の要素が色濃く刻まれている、と考える。上記したように鶴尾神社 4 号墳裝飾壺の口縁部から体部中位まで細かく区画した横帯を短線で充填する構図は鳥取県徳楽方墳（東森・花谷 1992）資料（図 27-7）にみるような山陰地域の裝飾壺に通じる。幅狭い文様帯（横帯）を頸部から体部中位までの広い範囲に展開させる裝飾壺は

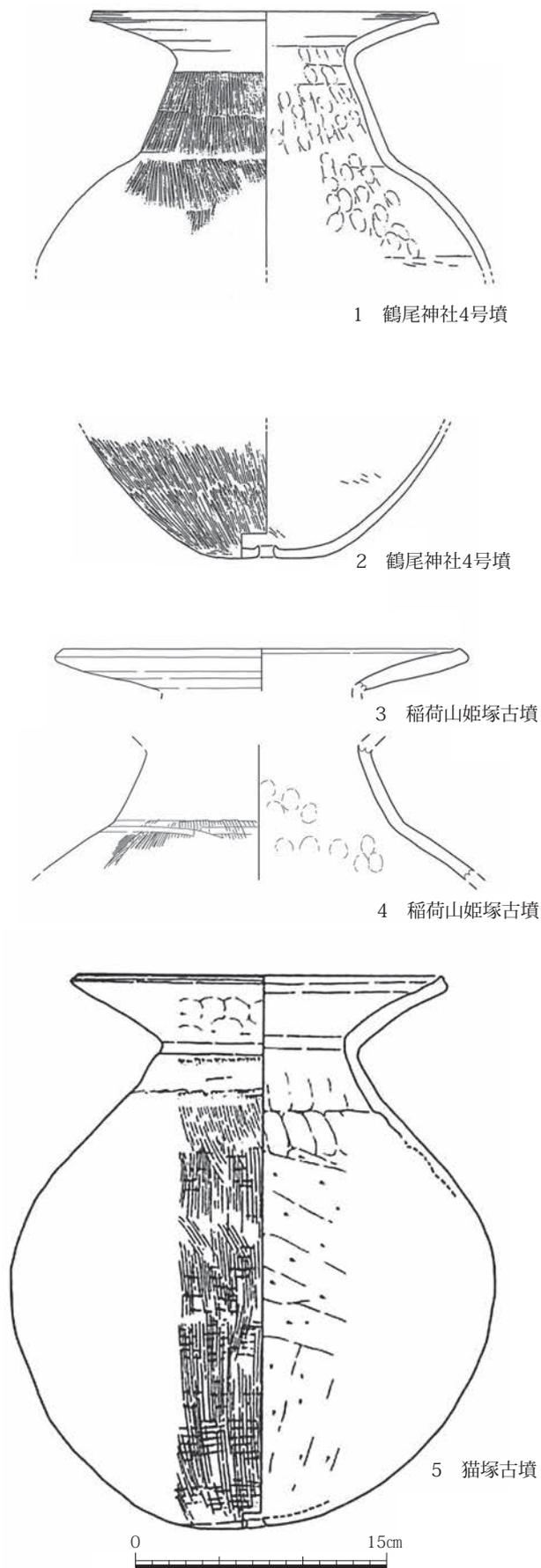


図 26 鶴尾系広口壺の変化

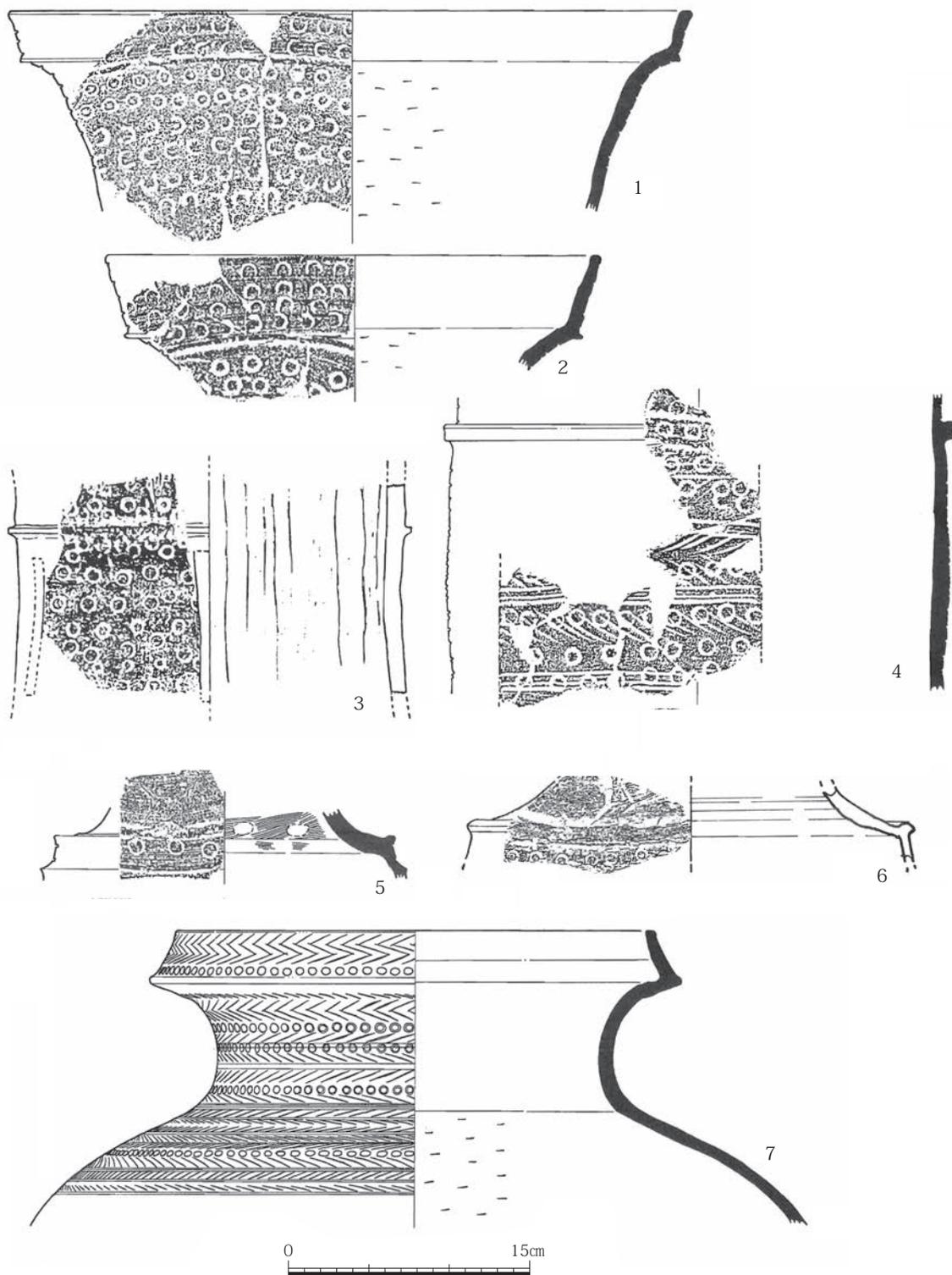
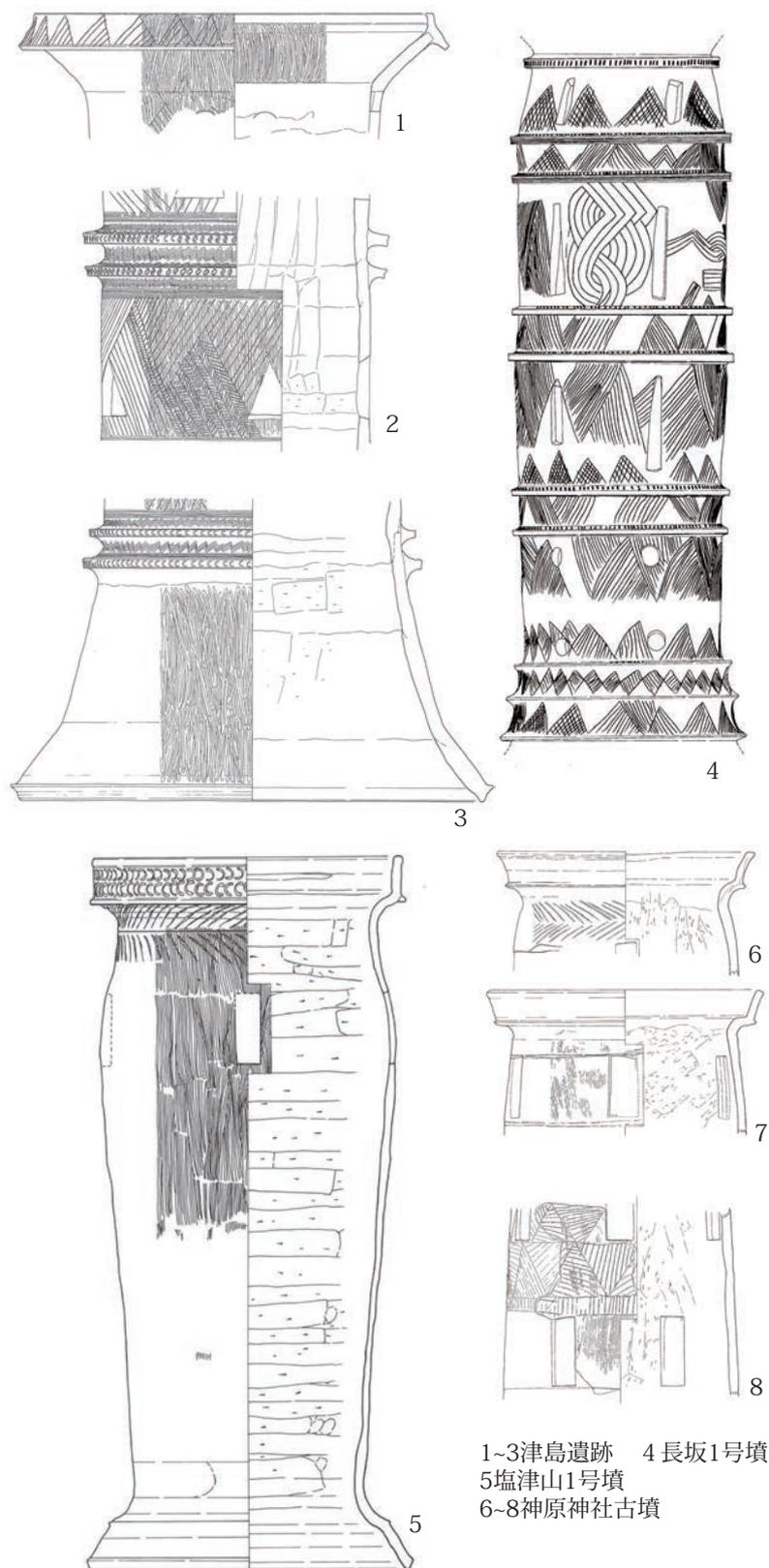


図 27 徳楽方墳の円筒形土器と裝飾壺

山陰地域に多いが、吉備南部など中部瀬戸内海沿岸部の該期の中形壺にこうした装飾は見ない。また鶴尾神社4号墳裝飾壺、稻荷山姫塚古墳器台形埴輪で多用する文様意匠のうち、複合鋸齒文は箸墓Ⅱ類文様（春成 1984）の一部に通じるが、横走綾杉文は特殊器台形埴輪の文様帯では採用されない。しかし山陰地域で多用される羽状文（図 27-4・7）に近い意匠ではある。山陰地域の円筒形土器（器台）は型式学的出自と展開についてなお未解明な部分を多く残すが、稻荷山姫塚古墳埴輪の口頸部や脚部の形態はそのうちの徳楽方墳資料（図 27-1～6）を想起させる。もっ

とも、塩津山1号墓の脚台を付した先駆的形態（図28-5）を含め、神原神社古墳「埴輪」（図28-6～7）を典型とする出雲地域の突帯を廃した円筒形土器に対して、徳楽方墳の特異な形態（図27-1～7）は独自色が強く、一概に円筒形土器（器台）全般と関連するとまではいえない。ここではとりあえず稲荷山姫塚古墳埴輪との一定の親和性を指摘することにとどめておこう。なお付言すれば、稲荷山姫塚古墳の器体（筒）部沈線文で多用する横走綾杉文と複合鋸歯文は、先に触れた岡山県津島遺跡河道1出土資料（図28-1～3）、また同長坂1号墳で棺体に転用の特異な大形の装飾筒形器台（図28-4）の筒部にも多用される。しかし前者は伴出土器の大勢から下っても弥生時代後期後葉のうちに収まり、その口縁部形態は後期中葉の装飾土器に多く、楯築墓等、最初期の特殊器台の一部にも採用されるので、むしろ特殊器台成立期に遡る可能性がある。後者は棺体に転用した時期は古墳時代に下るが、器体（筒部）文様の一部に縦形の弧帯文を採用しており、いわゆる立坂型文様との関連が窺われる。したがってこれらと稲荷山姫塚古墳埴輪との時間的懸隔は大きく、文様モチーフの授受と



1-3津島遺跡 4長坂1号墳
5塩津山1号墳
6-8神原神社古墳

図28 大型筒形装飾器台（吉備）と円筒形土器（出雲）

いった彼我の直接的な関係は想定しがたい。上に触れた神原神社古墳資料では筒部にまま複合鋸歯文を施し、これまで特殊器台との関連も指摘されてきた。しかしその文様構成は特殊器台よりもむしろ今挙げた、吉備南部の傍流的な大型装飾器台に通じるもので、その点に留意すれば、(山陰)円筒形土器(器台)を介した(吉備南部)傍流的な大型装飾器台と稲荷山姫塚古墳埴輪の間接的な関係は想定可能かもしれない。今後の検討課題としておきたい。

これに対して船岡山1号墳埴輪は特殊壺形埴輪に淵源する器形に特殊器台形埴輪・都月型文様の断片的要素を転写したものであって、両者は基本的に型式学的系譜を異にする。ゆえにその対比は難問である。しかし幸いにも両者共にもう一方の装飾的要素、つまり稲荷山姫塚古墳埴輪にわずかに浸透する特殊器台形埴輪の、そして船岡山1号墳埴輪には非特殊器台形埴輪的な装飾的要素がこれまた断片的に浸透し合っている。このことに糸口を見出したい。

稲荷山姫塚古墳の口縁部文様は特殊器台形埴輪の鋸歯文(口縁部)に由来すると見てよいだろう。山陰円筒土器の口縁部文様は竹管文か櫛原体の刺突文ないし羽状文が目立ち、鋸歯文は神原神社古墳でまみ見いだせるが、円筒形土器総体としては例外的である。稲荷山姫塚古墳の口縁部鋸歯文も特殊器台形埴輪や一部の円筒形土器そのままではなく複合鋸歯文化という変容を経ている。船岡山1号墳にこれは入らないが、高松茶臼山古墳埴輪の口縁部には極度に簡略化したラフな鋸歯文(輪郭)を加えた例がある。稲荷山姫塚古墳→高松茶臼山古墳の関係が推測できる。

また稲荷山姫塚古墳では複合鋸歯文が筒部の主たる文様意匠の一つだが、船岡山1号墳のおそらく一個体にこれが崩れた意匠(図17)をみる。出現頻度の低さと描画の崩れ、また全周せず透し孔に付随するワンポイント的な表現らしいことから、全般的に沈線文の略化が著しい船岡山1号墳埴輪では限定的な適用と解される。なおこの意匠を高松茶臼山古墳埴輪は引き継がない。

もう一点は刻目突帯である。稲荷山姫塚古墳埴輪では検出した突帯の八割までが刻み目を加えている。繰り返すと、刻目突帯は特殊器台形埴輪にない要素であり、鳥取県徳楽方墳の「円筒土器」(埴輪)突帯の竹管文、あるいは一部の壺頸基部の刻目突帯につながる可能性を考える。船岡山1号墳埴輪の刻目突帯は稲荷山姫塚古墳のそれと関係するだろうが、出現頻度は三割弱に低下している。さらに高松茶臼山古墳埴輪では27例中1例と全くの例外的存在でしかない。

こうした手がかりから稲荷山姫塚古墳→船岡山1号墳→高松茶臼山古墳の先後関係を設定しておく。さてこのように考えるならば当然、次に浮上する課題は猫塚古墳と船岡山1号墳の先後関係である。現時点ではそれぞれ異なる手がかりから到達した整理に基づき、両者の大まかな並行関係を想定したところであるが、虚心にみればともに稲荷山姫塚古墳より後出することまでしかいえない。猫塚古墳の形態と規模を勘案すれば、鶴尾神社4号墳や稲荷山姫塚古墳と同じ様に通有の広口壺に由来する壺形埴輪の単独使用ではなく、そこに何等かの装飾的器種が伴った可能性は高いと思われる。しかし現時点では具体的な検討材料を欠き、検証は将来の課題である。

最後にもう一度確認しておこう。船岡山1号墳埴輪は特殊壺形埴輪の著しい変容形態である。紡錘形に変化した器体もさることながら頸部の著しい圧縮を特徴とする。さらに本来は特殊壺形埴輪にはない透し孔と沈線文を加える。透し孔の形状と配置、また沈線文の簡略化が著しいが、遠く特殊器台形埴輪の都月型文様に淵源すると推測する。

高松平野域では鶴尾神社4号墳、稲荷山姫塚古墳と本墳およびその後続型式を伴う高松茶臼山古墳で装飾性が強い特異な埴輪類を用いる。前二者では簡素な広口壺形埴輪にこうした装飾性の

高い器種が伴うが、後二者はそうではない。いずれにせよ高松平野域という狭隘なエリアでもこの段階ではこうした器種と組成がなかなか定式化せず、築造毎に試行錯誤を重ねている。この点もまた前期後半以降とは異なる前半期の一つの特質と云えるのだろう。(大久保)

<註>

(1) 復元可能な資料が少なく難しい点もあるが、それらから推測可能な構成である。都月坂1号墳、箸墓古墳から元稲荷古墳資料まで条数と配置構成が維持される。

(2) 最初期の一群を除けば特殊壺でも大勢としては3条から2条突帯に変化する。特殊壺形埴輪ではそのまま2条突帯が定式化するが、箸墓古墳の特殊壺形埴輪では3条突帯例が知られ、そうした「古風な」スタイルも絶無というわけではない。あるいは船岡山1号墳埴輪の場合、長く引き伸ばした器体の形状、あるいは後述する透し孔などの特殊器台形埴輪の加飾的要素を付加したことが突帯を増設させた理由であるのかもしれない。

(3) 西殿塚古墳の壺形埴輪の肩部に透し孔を穿った可能性のある破片が存在する(天理市教育委員会 2000/図 25-55)。しかし破片資料で形態の復元も難しい。仮に壺形埴輪であれば、本文後段で述べるように特殊器台形埴輪と壺形埴輪の融合が一段階早く始まることになる。今は可能性のみ挙げておく。

(4) 台帳登録上の正式名称は高松「市」茶臼山古墳である。かつて前田村茶臼山古墳などと呼ばれてきたものを自治体合併に伴い、機械的に前田「村」→高松「市」に改称した経緯がある。地方自治制度の今後の推移如何ではまた名称変更が生じるのだろうか。この経緯に可笑しさを感じ、筆者は従来から高松茶臼山古墳と呼称している。

(5) 蔵本晋司氏は「横帯による区分原理と単位図像の反復による文様構成原理、文様を器面に全周させるといった施文原則は、吉備地域の特殊土器の描法に連なる」と、川部氏の評価に疑義を示した(蔵本 2002)。しかし蔵本氏が挙げた諸点は特定の地域に限定されないより普遍的な土器(というか円筒系器物)の装飾パターンである。特殊器台・特殊器台形埴輪文様の主流は次の特徴を持つと考える。①透し孔と沈線文の整合的な組合せ、②複数種の透し孔と沈線文帯を以て構成する横帯様の文様単位、③前項の文様単位を4～8回程度、横方向に反復させる全周的展開

この点で川部氏の指摘はやや不十分であったかもしれないが、蔵本氏の批判も妥当ではなかったと考える。

<引用・参考文献>

- 宇垣匡雅 1984 「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』31 卷 3 号
宇垣匡雅 1990 「吉備の前期古墳Ⅲ 網浜茶臼山古墳・操山 109 号墳の測量」『古代吉備』第 12 集
宇垣匡雅 1997 「特殊器台形埴輪の文様と編年」『考古学研究』43 卷 4 号
宇垣匡雅 2013 「特殊器台・特殊器台形埴輪編年に関する一考察」『日本考古学』36 号
梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』
愛媛県歴史文化博物館 2007 『今治市相の谷 1 号墳出土遺物』
岡山県教育委員会 1977 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 10 西江遺跡』
岡山県教育委員会 2003 『津島遺跡 4』
岡山県史編纂室 1986 「宮山弥生墳丘墓」『岡山県史考古資料』
岡山市教育委員会 1999 『長坂古墳群』
香川県教育委員会 1996 『中間西井坪遺跡 1』
香川県教育委員会 2014 『高松市茶臼山古墳』
加茂町教育委員会 2002 『神原神社古墳』
川部浩司 2007 「土器供献からみた鶴尾神社 4 号墳の再評価」『古代学研究』179
蔵本晋司 2002 「古墳時代(四国)」『考古学ジャーナル』No. 488
神戸市教育委員会 2009 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』
近藤義郎 1984 「吉備最古の前方後円墳」『えとのす』25 号
近藤義郎他 1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』
近藤義郎編 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』
近藤義郎他編 1987 『七つ塚古墳群』
近藤義郎他編 1991 『権現山 51 号墳』

近藤義郎・春成秀爾 1966 「埴輪の起源」『考古学研究』13 卷 3 号
 島根県教育委員会 1997 『塩津山古墳群』
 下條信行編 2008 『妙見山 1 号墳』
 書陵部 1991 「畚田陵の埴丘調査」『書陵部紀要』42 号
 書陵部 1999 「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業箇所調査」『書陵部紀要』51 号
 高井健司 1987 「1 号墳出土埴輪と都月 b 類」『七つ坑古墳群』
 高松市教育委員会 1983 『鶴尾神社 4 号墳調査報告書』
 高松市教育委員会 2018 『石清尾山古墳群（稲荷山地区）調査報告書』
 高松市教育委員会・徳島文理大学文化財学科 2019 『船岡山古墳群Ⅱ 古墳時代遺物編』
 都出比呂志 1971 「元稲荷古墳前方部埴丘の調査 京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』54 卷 6 号
 天理市教育委員会 2000 『西殿塚古墳・東殿塚古墳』
 奈良県教育委員会 1996 『葛本弁天塚古墳 中山大塚古墳』
 春成秀爾 1984 「箸墓古墳の埴輪 箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 3 集
 東森市良・花谷めぐむ 1992 「徳楽方墳出土の土器について」『山陰地方における弥生埴丘墓の研究』
 向日市教育委員会 2014 『向日市埋蔵文化財調査報告 101 元稲荷古墳』
 安川満 1991 「特殊器台形埴輪の地域的動向」『権現山 51 号墳』
 安川満 2008 「特殊器台形埴輪にみる畿内と吉備」『古代文化』59 卷 4 号
 安村俊史 2001 「玉手山古墳群出土の埴輪について」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』
 山内英樹 2007 「相の谷 1 号墳埴輪についての諸問題」『今治市相の谷 1 号墳出土遺物』
 陵墓調査室 2011 「大吉備津彦命墓採集の遺物について」『書陵部紀要』62 号（陵墓篇）

<挿図出典>

- 図 10 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 11 榎築墓:近藤 1992 / 西江:岡山県教委 1977 / 矢藤治山:近藤他 1995 / 宮山墓:岡山県 1986 / 権現山 51 号墳:
 近藤他編 1991 / 七つ坑 1 号墳:近藤他編 1987 / 網浜茶臼山古墳:宇垣 1990 / 西殿塚古墳:書陵部 1991 / 弁天塚古墳:
 奈良県教委 1996 / 東殿塚古墳:天理市教委 2000 / 玉手山 3 号墳:安村 2001
 図 12 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 13 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 14 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 15 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 16 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 17 高松市教委・徳島文理大学文化財学科 2019
 図 18 向日市教委 2014
 図 19 天理市教委 2000
 図 20 陵墓調査室 2011 / 近藤義郎 1984
 図 21 愛媛県歴史文化博物館 2007
 図 22 川部 2007
 図 23 高松市教委 2018
 図 24 香川県教委 2014
 図 25 香川県教委 2014
 図 26 川部 2007 / 高松市教委 2018 / 香川県教委 1996
 図 27 東森・花谷 1992
 図 28 岡山県教委会 2003 / 岡山市教委 1989 / 島根県教委 1997 / 加茂町教委 2002
 図 35 (附章補足説明とコメント項) 大久保撮影

附章 船岡山古墳群出土埴輪の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

香東川下流域産とされる土器の胎土の特徴は、角閃石の鉱物粒を多く含むことであるとされたが、これまでの分析により、角閃石だけではなく、石英や斜長石などの白色を呈する鉱物片や黒雲母の鉱物片を含めた複数種の鉱物片間の量比の関係に多様性のあることが認識された。

本分析では、香東川下流域に所在し、肉眼で把握される胎土の特徴が香東川下流域産土器に類似する石清尾山古墳群所用の埴輪を対象とし、土器と同様の分析を行うことで、その類似性および異質性を確認する。さらに本分析では、石清尾山古墳群と同時期とされる高松平野南部に所在する船岡山1号墳および三谷石舟古墳出土埴輪の分析も行い、石清尾山古墳群、船岡山1号墳、三谷石舟古墳の3者間における埴輪胎土の類似性と異質性について確認する。

第1節 試料

試料は、高松平野南部に所在する船岡山1号墳から出土した埴輪片5点と同じく高松平野南部に所在する三谷石舟古墳から出土した埴輪片3点および石清尾山古墳群の中の一つである稲荷山姫塚古墳から出土した埴輪片2点の合計10点である。これらにはNo. 01～No. 10までの試料番号が付されており、No. 01～05は船岡山1号墳出土埴輪、No. 06～08は三谷石舟古墳出土埴輪、No. 09と10は稲荷山姫塚古墳出土埴輪である。各試料の出土地や遺構名、保管機関などを一覧にして表1に示す。

第2節 分析方法

昨年度の分析と同様に薄片作製観察を用いる。以下に分析方法を述べる。薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

薄片観察結果は松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第3節 結果

観察結果を表4～6、図28～30に示す。以下に各古墳の試料について胎土の特徴を述べる。

1) 船岡山1号墳

5点の試料ともに、胎土中の碎屑物の主体は、石英、斜長石、角閃石、黒雲母の4種類の鉱物片であり、これらに加えて少量の花崗岩類の岩石片を含むことも共通する。主体となる鉱物片

の4者間の量比関係には、試料によって若干の差異が認められ、No. 01では斜長石が最も多く、No. 02では石英と黒雲母が多く、No. 3とNo. 5では石英と角閃石が多い。No. 4は4者が同量程度である。

砕屑物の粒径組成は、No. 4以外の4点については細粒砂の割合が最も高く、次いで中粒砂が高い割合を示す。No. 4は中粒砂の割合が最も高く、次いで細粒砂の割合が高い。

砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合は、いずれの試料も20%前後の値であり、試料間の差異は小さい。

2) 三谷石舟古墳

3点の試料は、それぞれ若干異なる鉱物組成・岩石組成を示す。No. 06は角閃石の鉱物片が突出して多く、少量の石英と斜長石および黒雲母を伴い、少量の花崗岩類の岩石片と微量の凝灰岩の岩石片を含む。No. 07は、石英と斜長石の鉱物片が多く、微量の角閃石の鉱物片を含み、少量の多結晶石英と花崗岩類の岩石片を含む。No. 08は、石英と斜長石および角閃石の鉱物片が多く、少量の酸化角閃石と微量の黒雲母の鉱物片も含む。岩石片では少量の凝灰岩と微量の花崗岩類を含む。

砕屑物の粒径組成においても3点では若干の違いが認められる。No. 06は中粒砂と細粒砂が同じ割合で最も多く、次いで粗粒砂や極細粒砂も比較的高い割合を示す。No. 07は粗粒砂の割合が最も高く、次いで細粒砂や中粒砂の割合も比較的高い。No. 08は細粒砂の割合が最も高く、中粒砂の割合も同程度に高く、これら2者の割合が突出する。

砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合は、いずれも20～20数%程度である。

3) 稲荷山姫塚古墳

2点の試料ともに、石英と斜長石および角閃石の3者の鉱物片を主体とすることは共通するが、それら以外に含まれる鉱物片と岩石片の量比には差異が認められる。No. 09は主体として含まれる鉱物片以上に花崗岩類の岩石片を多く含み、微量の黒雲母の鉱物片も含む。No. 10は主体として含まれる鉱物片以外には、微量～少量の酸化角閃石と黒雲母の鉱物片と微量の凝灰岩の岩石片および少量の花崗岩類の岩石片を含む。

砕屑物の粒径組成は、2点ともに中粒砂が最も高い割合を示すが、No. 09はそれに次いで粗粒砂の割合が高く、No. 10は細粒砂の割合が高い。

砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合は、2点ともに20%弱程度である。

第4節 考察

香東川下流域産とされる弥生土器の胎土については、これまでの分析事例により、含まれる砕屑物の鉱物や岩石の種類には高い共通性が認められている。それは、鉱物の種類では、石英と斜長石と角閃石および黒雲母を含むことであり、岩石の種類では花崗岩類を含むことであった。以前の分析報告（『土器生産技術は、いかに共有化され、維持・伝達されていたのか（平成30年度～令和2年度科学研究費補助金基盤（B）報告 代表 田崎博之）』に附編胎土分析報告として掲載予定・大久保補註）でも述べたように、これらの鉱物や岩石片は、香東川流域に分布する地質に由来すると考えられ、したがってある一定範囲（具体的な線引きをすることはできないが）から採取された堆積物を材料としている可能性が高いと考えられた。その一方で、出現する鉱物や岩石の種類間の量比の差には多様性のあることも認められている。すなわち、香東川下流域産

表3 試料一覧

試料番号	遺跡名	遺構名	報文番号	備考	現保管機関
No.01	船岡山1号墳		報告001	船岡山型埴輪	徳島文理大学文学部
No.02	船岡山1号墳		報告055	船岡山型埴輪	徳島文理大学文学部
No.03	船岡山1号墳		報告056	船岡山型埴輪	徳島文理大学文学部
No.04	船岡山1号墳		報告057	船岡山型埴輪	徳島文理大学文学部
No.05	船岡山1号墳		報告059	船岡山型埴輪	徳島文理大学文学部
No.06	三谷石舟古墳	後円部	1	壺型埴輪口縁部	徳島文理大学文学部
No.07	三谷石舟古墳	後円部	2	壺型埴輪体部	徳島文理大学文学部
No.08	三谷石舟古墳	後円部	3	壺型埴輪体部	徳島文理大学文学部
No.09	稲荷山姫塚古墳	旧採集	1	円筒型埴輪	徳島文理大学文学部
No.10	稲荷山姫塚古墳	旧採集	2	壺型埴輪?体部	徳島文理大学文学部

という土器胎土における共通した特性は存在するものの、それは例えば一箇所における大量生産を示すものではないことも示唆された。

今回の試料である埴輪は、その生産と需要および供給において土器とは全く異なる事情にある製品であるが、今回の分析で確認された胎土中に含まれる鉱物および岩石の種類は、これまでに分析した香東川下流域産の弥生土器の胎土とほぼ同様であった。すなわち、香東川流域の地質学的背景を反映した地域内の堆積物が、船岡山1号墳、三谷石舟古墳、稲荷山姫塚古墳の埴輪にも使用されていると考えられる。

さらに、弥生土器と同様に、鉱物や岩石の種類間の量比まで比較すると、そこには、3つの古墳間において、さらには同一の古墳内においても有意な違いの存在することが示された。この違いは、同じ地質学的背景を有する地域内における、より局所的な材料採取場所の違いや製作過程における混和材の調整の違いなどに起因すると考えられるが、いずれも製作者集団の違いに関係する可能性がある。すなわち、3箇所のいずれの古墳においても、埴輪の生産には複数の製作集団が係っていた可能性があると考えられる。ある一時期に多量の生産が必要という埴輪の事情を考慮すれば、当然のことかもしれない。また、香東川流域および同様の地質学的背景を有する地域を越えた遠隔地からの搬入品は認められないことから、やはり支配地域内での生産であったことも窺える。

なお、今回の試料では、「船岡山型」、「壺形」、「円筒形」という埴輪の種類分けがあるが、現時点では、これらの種類と胎土との対応関係は見出せない。おそらく埴輪の形態や意匠に対応した製作集団というものはなかったのかも知れない。今後も各地の古墳出土埴輪の分析事例を蓄積することにより、その生産と供給をめぐる事情がより明らかになることが期待される。

〈引用文献〉

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—, 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

表4 薄片観察結果(1)

試料番号 (No.)	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計								
		鉱物片						岩石片					その他										
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	紅柱石	黒雲母	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類		珪長岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
01	細礫																						0
	極粗粒砂			1										2									3
	粗粒砂	11		7	4			3				1	8										34
	中粒砂	14	1	24	12			6	1				1										59
	細粒砂	17		26	12			12															67
	極細粒砂	7		13	9			1															30
	粗粒シルト	2		4	1																		7
	中粒シルト																						0
	基質																						619
	孔隙																						29
備考	基質は、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。角閃石は弱酸化しているものが散見される。バブルウォール型火山ガラス、植物珪酸体あり。																						
02	細礫																						0
	極粗粒砂			1				1					1										3
	粗粒砂	4		1	1			3					2										11
	中粒砂	15		7	1			6	2				1										32
	細粒砂	9		9	5			13	1														37
	極細粒砂	5		8	5			3															21
	粗粒シルト	3		1	2																		6
	中粒シルト																						0
	基質																						394
	孔隙																						11
備考	基質は雲母鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。植物珪酸体あり。																						
03	細礫																						0
	極粗粒砂				3							1	1										5
	粗粒砂	8			4			4				4	2										22
	中粒砂	14		7	13			10	1				1										46
	細粒砂	21		5	13			9	2														50
	極細粒砂	6		3	5			1	1														16
	粗粒シルト	2		1																			3
	中粒シルト																						0
	基質																						520
	孔隙																						31
備考	基質は雲母鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。植物珪酸体あり。角閃石は弱酸化しているものが散見される。																						
04	細礫												1										1
	極粗粒砂			1	1			1				1	4										8
	粗粒砂	5		2	7			2					3							1			20
	中粒砂	16		11	8			5	3														43
	細粒砂	2		11	9			10	1														33
	極細粒砂	8		6	4		1	2	1														22
	粗粒シルト	1		1	1				1														4
	中粒シルト																						0
	基質																						533
	孔隙																						11
備考	基質は雲母鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。植物珪酸体あり。角閃石に包有される紅柱石あり。角閃石は弱酸化しているものが散見される。																						

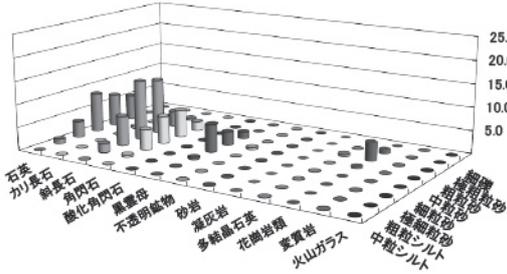
表5 薄片観察結果(2)

試料番号 (No.)	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計						
		鉱物片						岩石片						その他								
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	紅柱石	黒雲母	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩		変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体
05	細礫																					0
	極粗粒砂	1						1					2									4
	粗粒砂	11		1	2			3					4									21
	中粒砂	18		4	10			8				1			1							42
	細粒砂	15	1	8	12		1	7														44
	極細粒砂	4		7	5			2														18
	粗粒シルト	1																				1
	中粒シルト																					0
	基質																					566
	孔隙																					11
備考	基質は雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。植物珪酸体あり。角閃石は弱酸化したものが散見される。																					
06	細礫																					0
	極粗粒砂												1									1
	粗粒砂	5	1	4	12			1		1		1	11									36
	中粒砂	7	1	6	27						3		5									49
	細粒砂	8		9	26			5	1		1											50
	極細粒砂	4		13	11			4	1													33
	粗粒シルト			5					1													6
	中粒シルト																					0
	基質																					592
	孔隙																					23
備考	基質は雲母鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。植物珪酸体あり。角閃石は弱酸化しているものが散見される。																					
07	細礫											1										1
	極粗粒砂	3		2								4	6									15
	粗粒砂	18	2	18								10	9									57
	中粒砂	17	2	18								1	2									40
	細粒砂	20		21	1																	42
	極細粒砂	11		16	3																	30
	粗粒シルト	6		7	2																	15
	中粒シルト																					0
	基質																					639
	孔隙																					25
備考	基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。																					
08	細礫																					0
	極粗粒砂					1										1						2
	粗粒砂	3	2	1	3	2		1		1												13
	中粒砂	15	4	13	10	6		2	1	10	1	3	2	1	3	1	1					73
	細粒砂	17	5	20	16	10		1	3	8												80
	極細粒砂	10		8	4	4																26
	粗粒シルト	2		1	1	1															1	6
	中粒シルト																					0
	基質																					762
	孔隙																					29
備考	基質は、褐色粘土、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型、植物珪酸体あり。																					

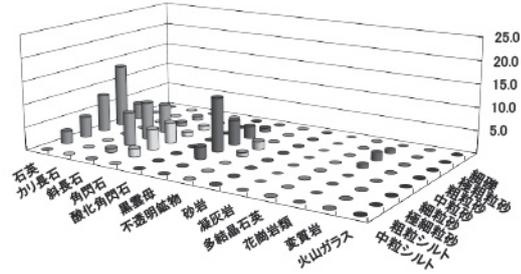
表6 薄片観察結果(3)

試料番号 (No.)	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計						
		鉱物片						岩石片					その他									
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	紅柱石	黒雲母	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩		変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体
09	細礫												1									1
	極粗粒砂	1		1									9									11
	粗粒砂	4		3	5			2				1	34									49
	中粒砂	10		7	7			7					21									52
	細粒砂	16		13	15				1													45
	極細粒砂	6		9	13																	28
	粗粒シルト	2		7	4																1	14
	中粒シルト																					0
	基質																					811
孔隙																					14	
備考	基質は、雲母鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。角閃石は未酸化である。																					
10	細礫																	1				1
	極粗粒砂	1						2				2										5
	粗粒砂	2	1		6	1		1		1		5							1			18
	中粒砂	7	2	11	12	2		3		3		1	3		1							45
	細粒砂	9		12	8	4		1	1			1										36
	極細粒砂	8		11	8	3																30
	粗粒シルト			3																		3
	中粒シルト																					0
	基質																					628
孔隙																					22	
備考	基質は、雲母粘土鉱物、褐色粘土、酸化鉄などで埋められる。角閃石は酸化が進んでいる。凝灰岩はやや結晶質。																					

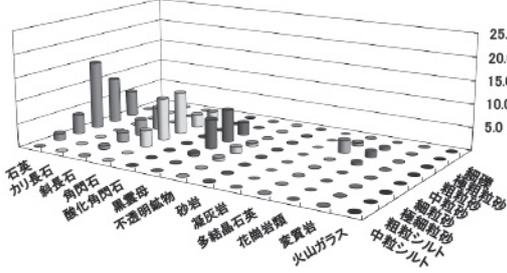
No.01 船岡山1号墳 船岡山型埴輪



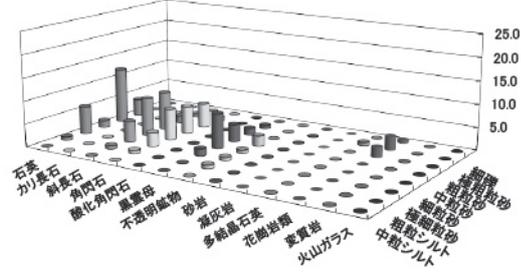
No.02 船岡山1号墳 船岡山型埴輪



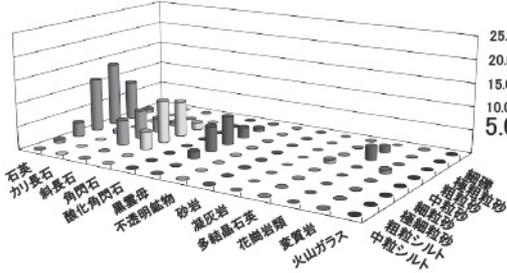
No.03 船岡山1号墳 船岡山型埴輪



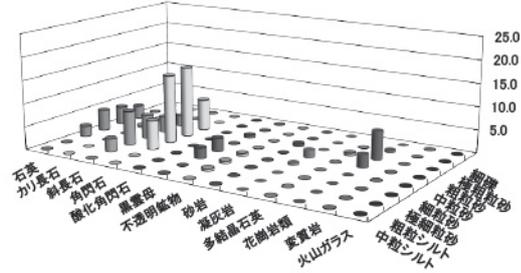
No.04 船岡山1号墳 船岡山型埴輪



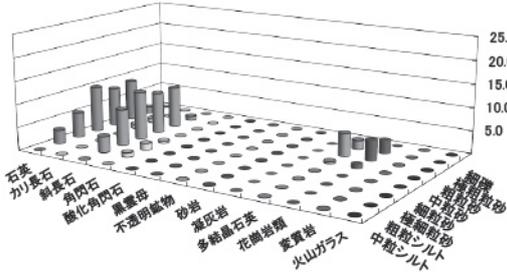
No.05 船岡山1号墳 船岡山型埴輪



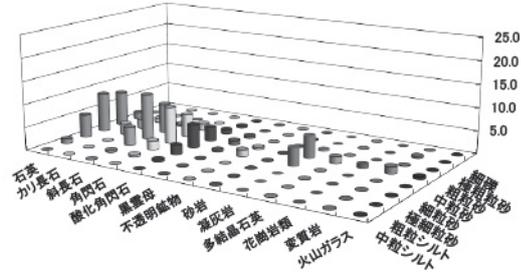
No.06 三谷石舟古墳 壺形埴輪口縁部



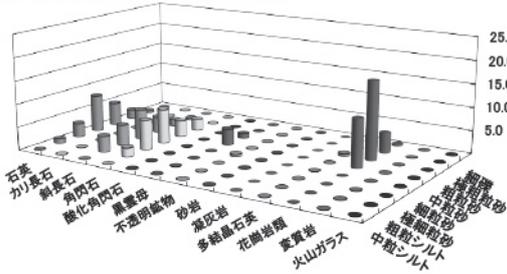
No.07 三谷石舟古墳 壺形埴輪体部



No.08 三谷石舟古墳 壺形埴輪体部



No.09 稲荷山姫塚古墳 円筒形埴輪



No.10 稲荷山姫塚古墳 壺形埴輪?体部

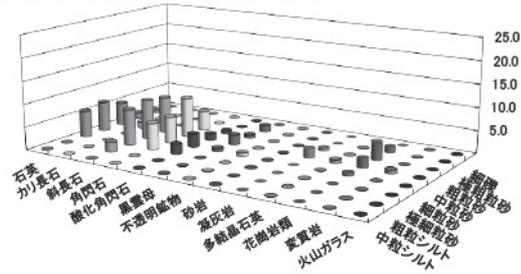


図 29 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

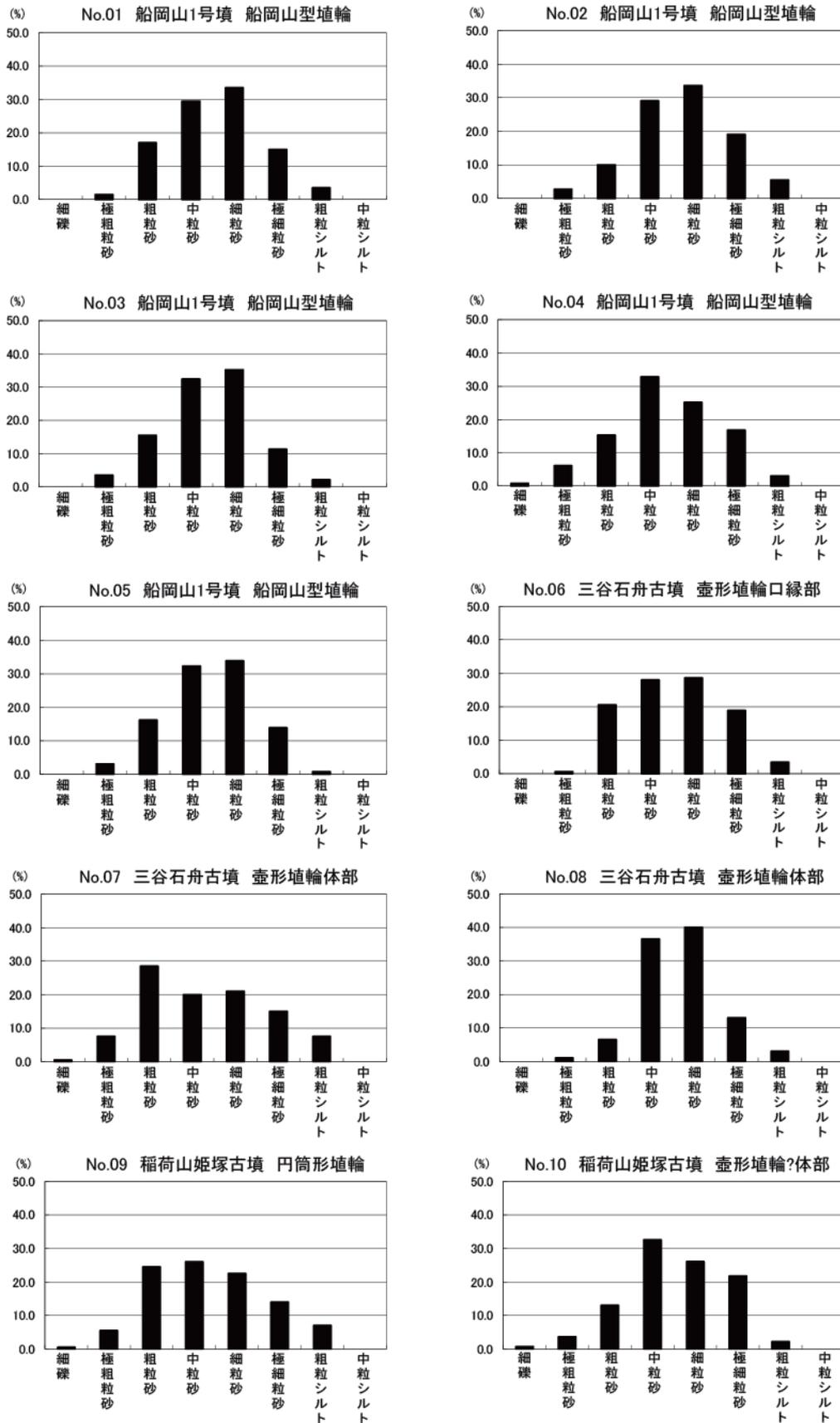


図 30 胎土中の碎屑物の粒径組成

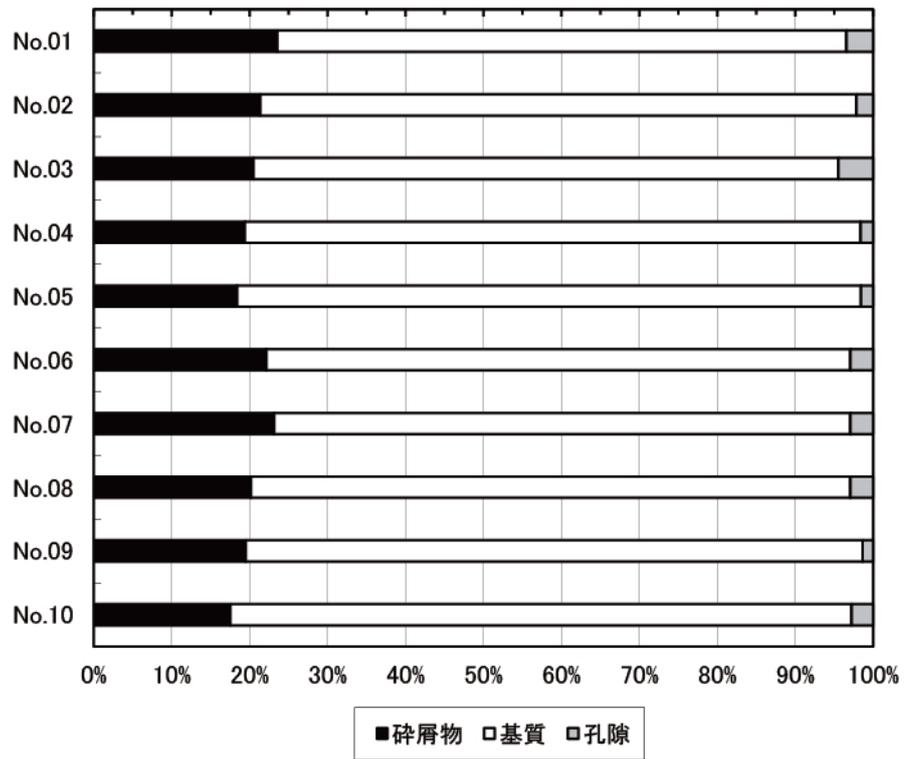
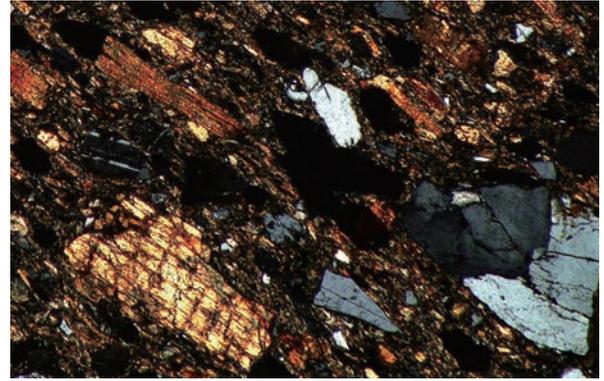
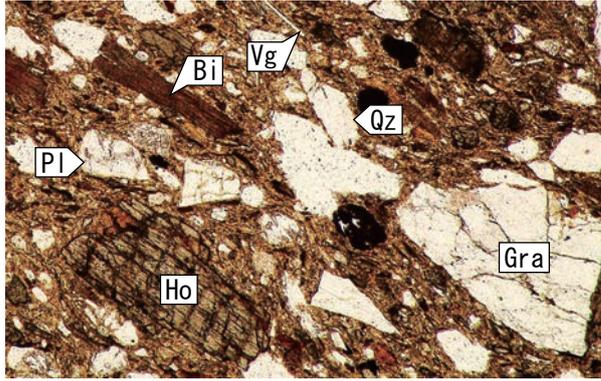
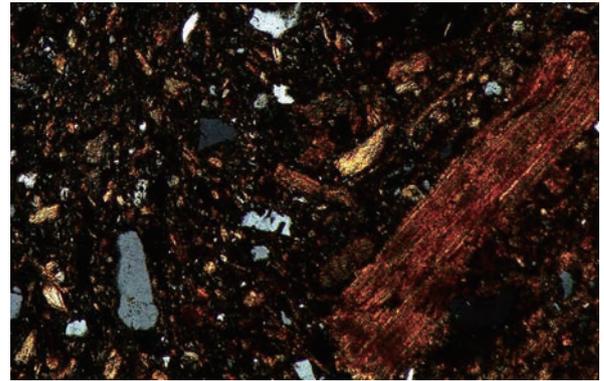
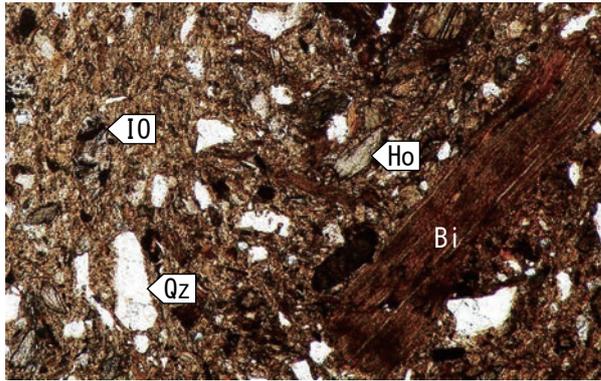


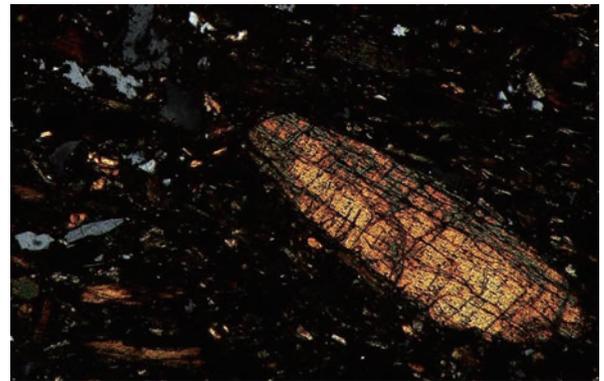
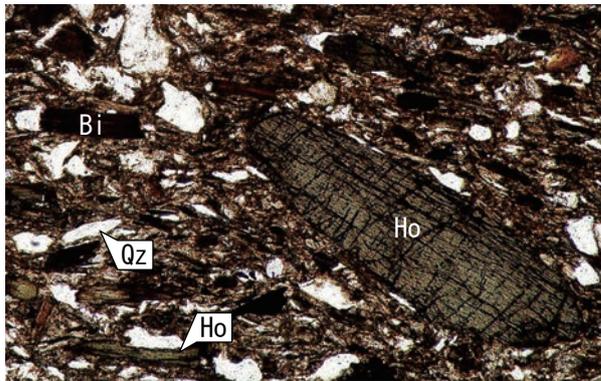
図 31 碎屑物・基質・孔隙の割合



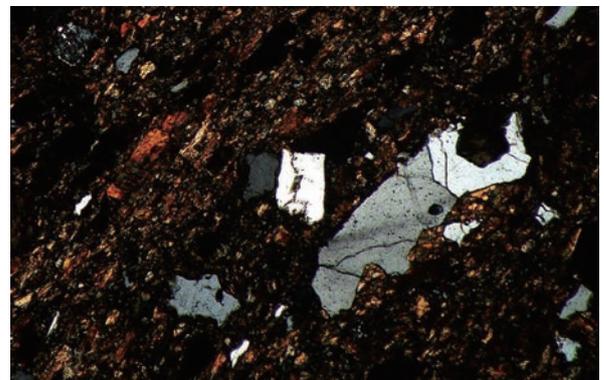
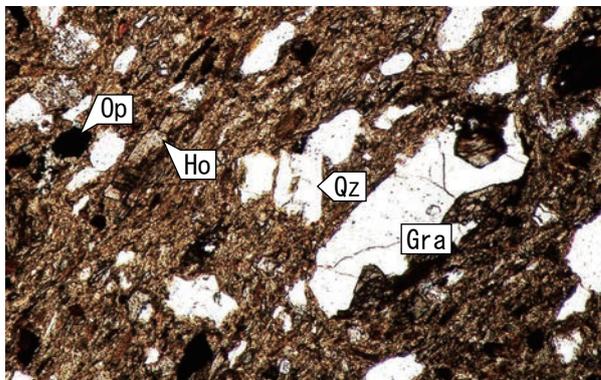
1. No. 01 (船岡山1号墳 報告001 船岡山型埴輪 徳島文理大学文学部)



2. No. 02 (船岡山1号墳 報告055 船岡山型埴輪 徳島文理大学文学部)



3. No. 03 (船岡山1号墳 報告056 船岡山型埴輪 徳島文理大学文学部)

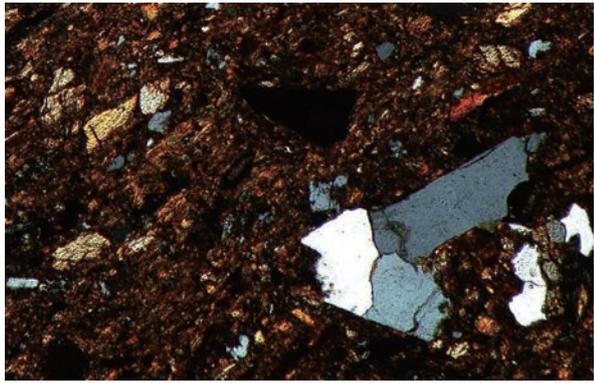
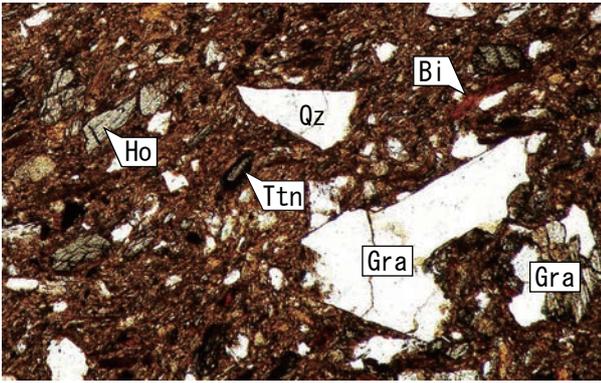


4. No. 04 (船岡山1号墳 報告057 船岡山型埴輪 徳島文理大学文学部)

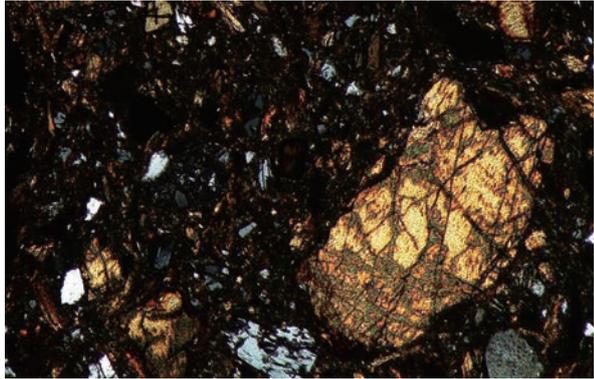
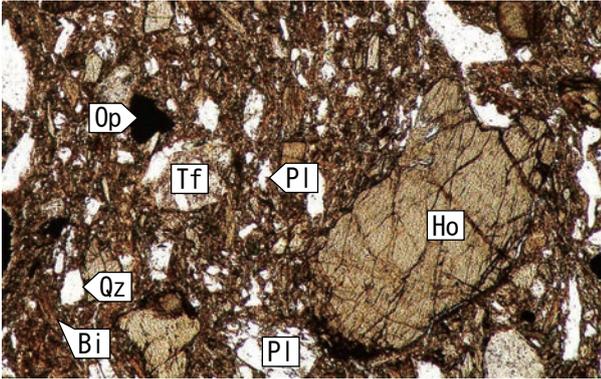
Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Op:不透明鉱物. Gra:花崗岩.
Vg:火山ガラス. IO:酸化鉄. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

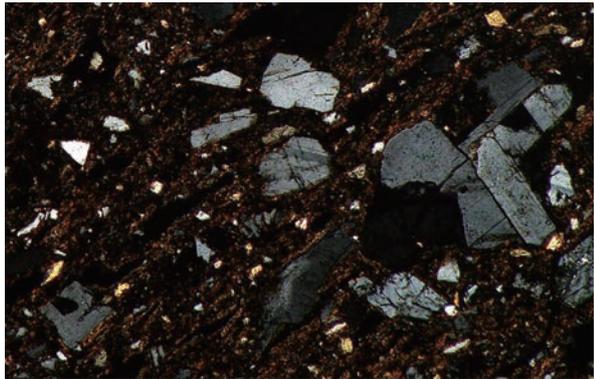
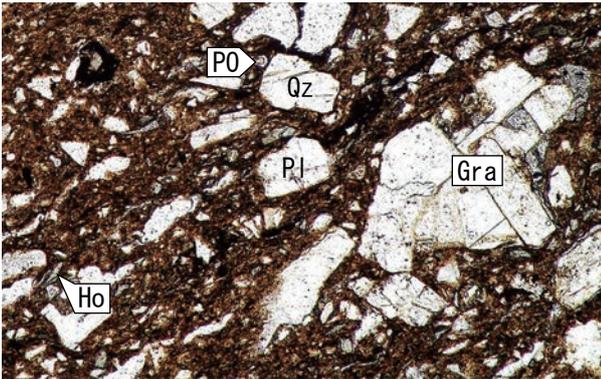
図 32 胎土薄片 (1)



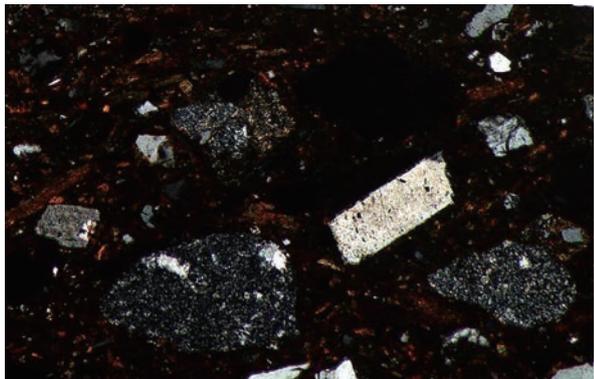
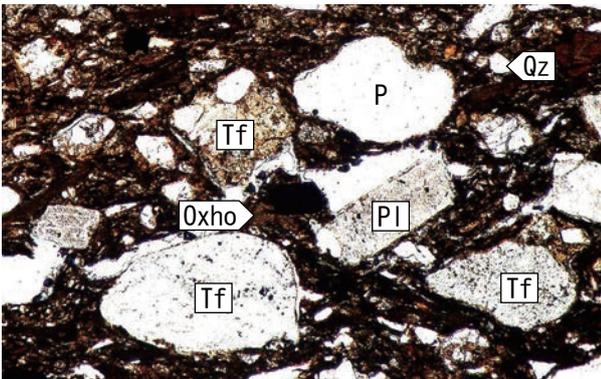
5. No. 05(船岡山1号墳 報告059 船岡山型埴輪 徳島文理大学文学部)



6. No. 06(三谷石船古墳 後円部 1 壺形埴輪口縁部 徳島文理大学文学部)



7. No. 07(三谷石船古墳 後円部 2 壺形埴輪体部 徳島文理大学文学部)

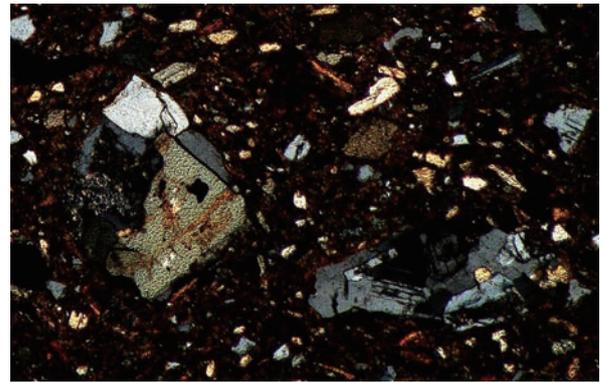
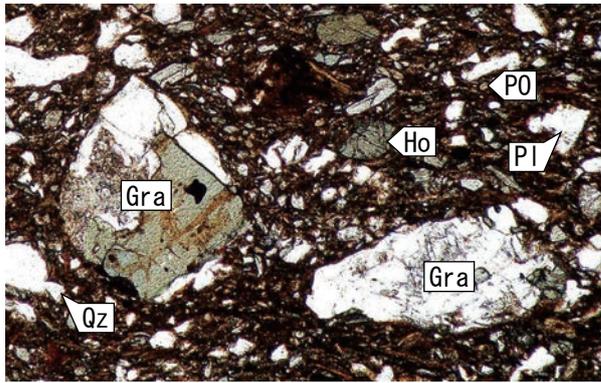


8. No. 08(三谷石船古墳 後円部 3 壺形埴輪体部 徳島文理大学文学部)

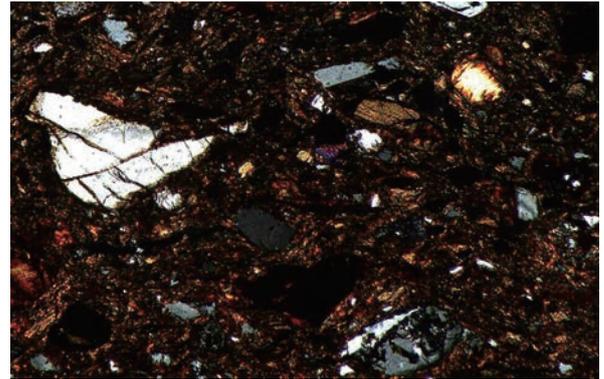
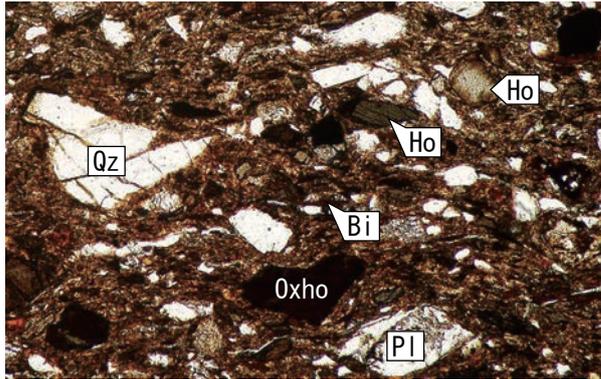
Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Oxho:酸化角閃石. Bi:黒雲母. Ttn:チタン石. Op:不透明鉱物.
Tf:凝灰岩. Gra:花崗岩. Po:植物珪酸体. P:孔隙. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図33 胎土薄片(2)



9. No. 09 (稻荷山姫塚古墳 旧採集 1 円筒形埴輪 徳島文理大学文学部)



10. No. 10 (稻荷山姫塚古墳 旧採集 2 壺形埴輪?体部 徳島文理大学文学部)

Qz: 石英, PI: 斜長石, Ho: 角閃石, Oxho: 酸化角閃石, Bi: 黒雲母, Gra: 花崗岩,
P0: 植物珪酸体. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図 34 胎土薄片 (3)

胎土分析資料について（補足説明とコメント）（図 35）

今回、委託して胎土を分析した資料は船岡山 1 号墳埴輪 5 点、三谷石舟古墳壺形埴輪 3 点、稻荷山姫塚古墳埴輪 2 点の計 10 点である。ここで分析対象資料について補足的に解説しておく。

船岡山 1 号墳資料は全て特殊壺形埴輪の変容形態である。分析 01（分析番号は前節の胎土分析報告に対応、資料 01-船岡山古墳群Ⅱ報告番号、以下同じ）、分析 02（資料 55）、分析 04（資料 57）は器体に三角形透し孔を穿つ。一方、分析 03（資料 56）と分析 05（資料 59）は巴形透し孔をもつ。既述のとおり船岡山 1 号墳埴輪で巴形透し孔と三角形透し孔は同一個体で共存しない。巴形透し孔と三角形透し孔の確認数に大差はないが、全資料の約 1/3 で確認できる刻目突帯は巴形透し孔個体に採用しない。属性差と調合素地の相関に留意して分析資料を抽出した。

船岡山 1 号墳資料と対比する目的で、三谷石舟古墳資料（3 点）と稻荷山姫塚古墳資料（2 点）を加えた。前者は 2016 年調査出土資料で、分析 06・07 は体部、分析 08 は口縁部片で全て壺形埴輪とみられる。刳拔式石棺を内蔵する三谷石舟古墳では円筒埴輪を伴わず壺形埴輪を単独で使用した可能性が高い。後者は調査前の採集資料で資料 01（分析 09）は特異な器台形の埴輪、資料 02（分析 10）は壺形埴輪の可能性が高い。

図 35 に対象資料の器面接写写真（65 倍撮影）を掲げた。なお船岡山 1 号墳の報告資料全ての器面拡大写真は船岡山古墳群Ⅱに掲載しているので確認されたい。これまで各古墳埴輪について同じ方法で観察し記録作成に努めてきた。その限りでは、各々の素地調合は同質的にみえる。また 3 古墳資料ともに細粒から粗粒までの黒色粒（主体は角閃石）を稠密に含み、雲母片や石英粒等の白色粒の有無や多寡による違いが若干見いだせるものの、総じて弥生時代後期初頭から続く香東川系土器群の採用素地にごく近い印象を得る。

今回委託した胎土分析では、対象点数を絞らざるを得なかったが、3 古墳資料の素地に有意な差異を見いだせるか否かも一つの課題であった。詳細は前節の分析報告に抛られたいが、そこで示唆された全般的な均質性と、一古墳内、および古墳間の砂礫組成の微妙な差異は興味深い。こうした示唆を念頭において、考古資料の多面的な属性を検討し各古墳埴輪の製作体制にアプローチするのは考古学の側の課題である。

なお、前節報告では上記した点を含む砂礫組成の微妙な差異に留意して、別の分析で示した所見、すなわちこれらが「一箇所における大量生産を示すものではない」（パリノサーヴェイ 2021 予定）可能性に言及し、「複数製作集団が存在する可能性」を示唆した。こうした見解を提示されたことは重要である。しかしこの分析で判明した素地の差異が、この見通しのとおり製作集団の差を意味するか否かは、さらに考古学の側の検討、すなわち資料の型式学的検討に抛るべきであり、さらに製作集団の存在形態そのものの考察と相俟って判断されるべきだと考える。

とはいえ、こうした自然科学的な分析の成果と考古学的（＝型式学的）所見との対話を重ねることこそが課題の解決に至る唯一の途であることは言を俟たない。（大久保）

<参考文献>

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会 2019『船岡山古墳群Ⅱ 古墳時代遺物編』
パリノサーヴェイ 2021『田崎・大久保編『土器生産技術は、いかに共有化され、維持・伝達されていたのか（平成 30 年度～令和 2 年度科学研究費補助金基盤（B）報告 代表 田崎博之）』附編胎土分析報告 1・2』（2021 年度刊行予定）

分析01 船岡山1号墳資料01



分析02 船岡山1号墳資料55



分析03 船岡山1号墳資料56



分析04 船岡山1号墳資料57



分析05 船岡山1号墳資料59



分析06 三谷石舟古墳P47



分析07 三谷石舟古墳P43



分析08 三谷石舟古墳P08



分析09 稲荷山姫塚古墳01



分析10 稲荷山姫塚古墳02



*撮影倍率65倍の器面接写写真を15%に縮小して掲載している。土器写真は任意縮尺

図 35 胎土分析対象資料



船岡山遠景（南から）



船岡山山上の現況（平成 21 年 8 月撮影）



船岡山1号墳 東側くびれ部（16トレンチ）完掘状況（南東から）



船岡山1号墳 東側くびれ部（16トレンチ）完掘状況（東から）



船岡山1号墳 西側くびれ部（9トレンチ）完掘状況（南から）



船岡山1号墳 西側くびれ部（9トレンチ）石積み状況（南西から）



船岡山1号墳出土埴輪集合①



船岡山 1 号墳出土埴輪集合②



船岡山 1 号墳出土埴輪①

※写真下の番号は徳島文理大学文学部ほか2019『船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）』の報告番号と対応



船岡山1号墳出土埴輪②

報告書抄録

ふりがな	ふなおかやまこふんぐんⅢ(こうさつへん)							
書名	船岡山古墳群Ⅲ(考察編)							
副書名	徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書							
巻次	第3冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第212集							
編著者名	大久保 徹也(徳島文理大学文学部) 高上 拓(高松市)							
編集機関	徳島文理大学文学部 高松市教育委員会							
所在地	〒769-2193 香川県さぬき市志度1314-1 TEL087-899-7100 〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かがわちよ 香川町	37201		34° 16' 11"	134° 1' 59"	2008. 7 . 22 ~ 2012 . 11. 14	161 m ²	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	古墳	古墳時代前期 中世	1号墳 (前方後円墳) 2号墳 (墳形未確定)	埴輪 土師器・青磁・釘		盛土と積石を併用した墳丘構築。外表は積石塚古墳と類似。		
要約	<p>高松平野南部に所在する前期古墳の墳形確認調査。徳島文理大学文学部と高松市教委とが連携協定を結び、重要遺跡の確認調査として実施した。</p> <p>既往の調査において双方中円墳の可能性が想定されていたが、前方後円墳1基と墳形不明墳1基の、2基からなることが判明した。既刊の2冊で古墳時代遺構と遺物について報告しており、本書では中世の遺構・遺物の報告及び考察を行う。船岡山古墳群についての報告書は本書が最終巻である。</p>							

高松市埋蔵文化財調査報告第212集
徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書
第3冊

船岡山古墳群Ⅲ(考察編)

2020年3月31日

編集 徳島文理大学文学部・高松市教育委員会
発行 徳島文理大学文学部
印刷 有限会社中央ファイリング